ISSN 0385-0285

沖縄県立博物館紀要

第27号

BULLETIN OF
THE OKINAWA PREFECTURAL
MUSEUM
No.27

2001

目　次

前田真之：沖縄県福祉のまちづくり条例と博物館 …… 1

神谷 厚昭：屋我地島の地形と地質 …… 15

與那嶺一子・幸喜新：＜史料紹介＞「県博所蔵の染織資料Ⅲ－経浮花織－」…… 29

嵩原建二：沖縄島中南部の市街地で繁殖したツミとリュウキュウサンショウクイの２種について…… 45

姉崎悟・嵩原建二：南大東島産鳥類目録…… 51

園原　謙：『ウルマ(うるま)新報』にみる戦後の文化財保護胎動期における関係記事について…… 77

仲底善章：特別展「日系移民１世紀展」教育プログラムの 実施について…… 113

柏木祐・喜久川智子：沖縄県内の博物館における来館者調査 …… 131

沖 縄 県 立 博 物 館
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

沖縄県立博物館紀要

第27号

沖 縄 県 立 博 物 館

目　次

CONTENTS

前田真之：沖縄県福祉のまちづくり条例と博物館 …… 1
Masayuki MAEDA: Bylaws making Public Facilities Available to Disabled Person and the Museum

神谷 厚昭：屋我地島の地形と地質 …… 15
Kosyo KAMIYA：Geography and Geology of Yagaji Island

與那嶺一子・幸喜新：＜史料紹介＞「県博所蔵の染織資料Ⅲ－経浮花織－」…… 29
Ichiko YONAMINE and Shin KOKI：＜Material Note＞ The Ⅲ Textile item on Okinawa Prefectural Museum － "*Tateuki-Hana-ori*", Supplementary wrap weaving－

嵩原建二：沖縄島中南部の市街地で繁殖したツミとリュウキュウサンショウクイの２種について…… 45
Kenji TAKEHARA: Notes on two breeding Birds, *Accipiter gularis* and *Pericrocotus divaricatus tegimae,* on urban area in the southern and central part of Okinawa I., The Ryukyus

姉崎悟・嵩原建二：南大東島産鳥類目録…… 51
S.ANEZAKI, K.TAKEHARA: Checklist of Birds recorded in South Borodino Island

園原　謙：『ウルマ(うるま)新報』にみる戦後の文化財保護胎動期における関係記事について…… 77
Ken SONOHARA: In Relation to Articles as to Okinawan Cultural Properties on "Uruma Shinpo" Newspaper Published in Ishikawa after World War Ⅱ

仲底善章：特別展「日系移民１世紀展」教育プログラムの 実施について…… 113
Yoshiaki NAKASOKO: A Note of Educational Programs Related with Special Exhibition "One Century of Japanese Emigration -From Bento to Mixed Plate"

柏木祐・喜久川智子：沖縄県内の博物館における来館者調査 …… 131
Yu KASHIWAGI and Tomoko KIKUGAWA：Audience Research in Museums in Okinawa

沖縄県立博物館紀要　第27号　1－13，2001

沖縄県福祉のまちづくり条例と博物館

人にやさしい博物館をめざして

前　田　真　之
（沖縄県立博物館）

Bylaws making public facilities available
to disabled person and the Museum

Masayuki　MAEDA
(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

近年博物館においては、すべての人に施設を利用していただくため、来館者の多様なニーズにきめ細やかに対応できるあり方が論議されてきている。当館紀要第26号の拙稿(注1)においては、来館者対応のあり方としてアメリカで1990年に制定された障害者法（Americans with Disability Act：通称はＡＤＡ法）について紹介したが、この法律では、連邦の支援を受ける施設は、物的な面のみならず人的な面において全ての人が公共施設を利用できるよう措置を講ずることを義務づけている。このような内容がアメリカで制定されるに至った背景には、ベトナム戦争で負傷し、障害を持つようになったアメリカ市民等が積極的に社会参加の働きかけを行ってきたことが存する。

本稿では、すべての人に施設を利用していただくため、とりわけ障害のある人々に対して沖縄ではどのような対応が取られてきたのか、また沖縄県立博物館には、どのような課題があり、それをどのように改善しようとしているのかについて紹介していくことにする。

結論を先取りして述べるならば、日本における対応は、ハード面が中心となっており、アメリカのようにソフト面を含めた取り組みにはなっていないということである。しかし現在の公共施設の整備状況を前提にするならば、ハードの整備をまず手がけていくことが大切であり、その上にたってソフト面の対応もあわせて検討していくことがこれから重要になってくると思われる。

1．沖縄県福祉のまちづくり条例

沖縄県においては、昭和55（1980）年に「障害者福祉都市宣言」を行った沖縄市が、平成５（1993）年に「沖縄市人にやさしいまちづくり環境整備要綱」(注2) を策定したのが、

障害者対応の先駆けとなっている。この要綱の８条には、新設等の場合、申請書等の提出を行う前に、あらかじめその計画について市長と協議し、人にやさしいまちづくりを推進し、市民福祉の向上につながるものとなっているかを検討することとなっている。

沖縄県は、それから４年後の平成９（1997）年に、沖縄県福祉のまちづくり条例（以下「福祉のまちづくり条例」と省略）を制定している。(注3)

（１）福祉のまちづくり条例の構成

本条例は、前文、第１章　総則、第２章　福祉のまちづくりに関する施策、第３章　生活関連施設の整備基準への適合等、第４章　公共車両等及び住宅の整備、第５章　沖縄県福祉のまちづくり審議会、第６章 雑則から構成されている。

本条例の中で、とりわけ博物館と関わりがあるのは、第３章の生活関連施設の規定である。博物館は、第３章の「生活関連施設」に該当し、さらに沖縄県福祉のまちづくり条例施行規則（以下「施行規則」と省略）の別表第１(注4)により、「生活関連施設」の中の「教育文化施設」の「図書館等」イに該当する。さらに同条例第14条で述べている整備基準は、施行規則の別表第２(注5)で詳細に定めている。

（２）施行規則別表２で定める整備項目及び整備基準

この別表第２で定める「建築物に関する整備項目」には、出入り口、廊下、階段、昇降機、便所、駐車場敷地内通路、客席、客室、共同浴場、シャワー、受付カウンター、公衆電話、案内板、授乳場所がある。これらの場所のうち、博物館の施設を念頭に置きながら検討してみると、、出入り口、廊下、階段、昇降機、便所、駐車場、敷地内通路、客席、客室、受付カウンター、公衆電話、案内板が、大きな関わりを持ってくる。

それぞれの整備項目についての整備基準は、沖縄県福祉のまちづくり条例「整備基準の解説」(注6) によるとおよそ次のとおりである。

①出入り口・・・有　効　幅：幅は内法を80cm以上とする。
　　扉の形式：自動的に開閉する構造又は車いすを使用しているものが円滑に開閉して通過できる構造とする。
　　段差の制限：車いす使用者が通過する際に支障となる段を設けない。

②廊　　下・・・床仕上げ：表面は、粗面とし、又は滑りにくい材料で仕上げる。
　　有　効　幅：内法120cm以上
　　車椅子の回転スペース：廊下の端は車椅子の回転に支障のない構造とし、区間50メートルごとに車椅子が回転できるようにする。
　　高　低　差：傾斜路及び踊り場または車椅子使用者用昇降機を設ける

水平面の確保：エレベーター及び昇降機の出入り口に接する部分は水平にする。

傾　斜　路：幅は、内法120cm、勾配は12分の１を越えないこと
高さ75cmを越える場合、75cm以内ごとに踏み幅150cm以上の踊り場を設ける。

手　す　り：傾斜路には手すりをもうける。

③階　段・・・手　す　り：両側に連続して設ける。

形　　式：外来者が利用する主たる階段には、回り段を設けない。

床仕上げ：表面は、粗面とし、又は滑りにくい材料で仕上げる。

踏　み　面：高齢者、障害者等が識別しやすく、つまづきにくいものとする。

注意喚起用床材：階段にのぼる手前に注意喚起用床材を敷設する。

④昇降機・・・かごの床面積：1.83平方メートル以上とする。

かごの奥行き：内法を135cm以上とする。

かごの平面形状：車椅子の回転に支障がない。

表示及び音声：停止する階をかご内に表示する。
到着する階及び戸の閉鎖を知らせる装置を設ける。

出入り口：内法を80cm以上とする。

操作装置：車椅子利用者が操作できる高さにする。
視覚障害者が円滑に操作できるようにする。

⑤便　所・・・便　　房：十分な床面積があり、腰掛け便座、手すり、大便器の洗浄装置が適切に配置されていること。

出入り口：出入り口の幅は、80cm以上とする。
戸は、円滑に開閉できること。

段差の解消：出入り口に段差を設けない。

洗　面　器：レバー式等の操作が容易な洗面器を１以上設ける。

男子用小便器：床置式で、両側に手すりのある小便器を１以上設ける。

⑥駐車場・・・駐車場の設置：施設の出入り口まえの距離ができるだけ短くなるようにする。幅は、350cm以上とする。

駐車場の表示：車いす使用者用であることが分かるような表示にする。

⑦敷地内通路・・仕　上　げ：表面は、粗面とし、又は滑りにくい材料で仕上げる。

通路の幅：幅員は120cm以上とする。

段　　差：高低差がある場合には、傾斜路及び踊り場又は特殊構造

昇降機を設ける。

出入り口への通路：誘導用床材または音声装置を設ける。

傾斜路・階段等の手前には、注意喚起用床材を用いる。

⑧客　　席・・・席　　数：固定席が200を越える場合は、200をひいた数の車いす用席を用意すること。

床　面　積：１人につき、幅85cm以上、奥行き110cm以上とする。出入り口から容易に入ることができ、避難しやすい場所に設ける。

⑨受　　付・・・高　　さ：車いす使用者が円滑に利用できるよう、高さ、けこみ等に配慮した構造のカウンター又は記載台を１以上設ける。

⑩公衆電話・・・高　　さ：受付と同じ構造のものを１以上設ける。

⑪案内板等・・・明　確　性：案内板の高さ、文字の大きさを、高齢者、障害者等に配慮したものとする。必要に応じて点字による表示を行う。

車椅子便房：便所のある位置を表示すること。

避難誘導灯：点滅型誘導音装置付き誘導灯を設けるよう努める。

２．沖縄県における取り組み：福祉のまちづくり県立施設整備計画

沖縄県では「福祉のまちづくり」条例制定の翌年の平成10年８月には、「沖縄県福祉のまちづくり推進連絡会議設置要綱」が施行され、そのもとで県立施設整備状況調査が行われている。この際の調査項目は、先に紹介した整備項目に基づいている。また平成12年９月14日に行われた「福祉のまちづくり推進連絡会議」では、「福祉のまちづくり県立施設整備計画」（以下整備計画と省略）が承認されている。

（目的）

この整備計画の目的は、福祉のまちづくり条例にもとづく県立施設の整備をとおして、高齢者、障害者を含むすべての県民が安心して生活し、自らの意志で自由に行動し、等しく社会参加ができるようにすることである。

（方法）

この整備を進めていいくため、県立施設をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄに区分し、その区分に基づいてＡの施設から順に整備を行うこととなっている。沖縄県立博物館は、この区分においてＡに位置づけられ、平成13年度に出入りロドア、公衆電話、廊下誘導床材、案内板,敷地点字ブロック、階段点字ブロック、受付カウンターの整備をはかることが望ましい重点施設となっている。

3．沖縄県立博物館における施設の点検

沖縄県立博物館の施設を点検したところ、次のような課題があることが分かった。

①出入り口の整備：講堂への出入り口の開閉

②廊下の整備：２階へあがるスロープへの踊り場及び手すりの設置等

③階段の整備：スロープから企画展示室に向けての階段及び美術工芸室から民俗展示室への階段の改善

④便所の整備：館の１階には、整備基準に合致する便房が設けられているが、２階のトイレをどうするのか。

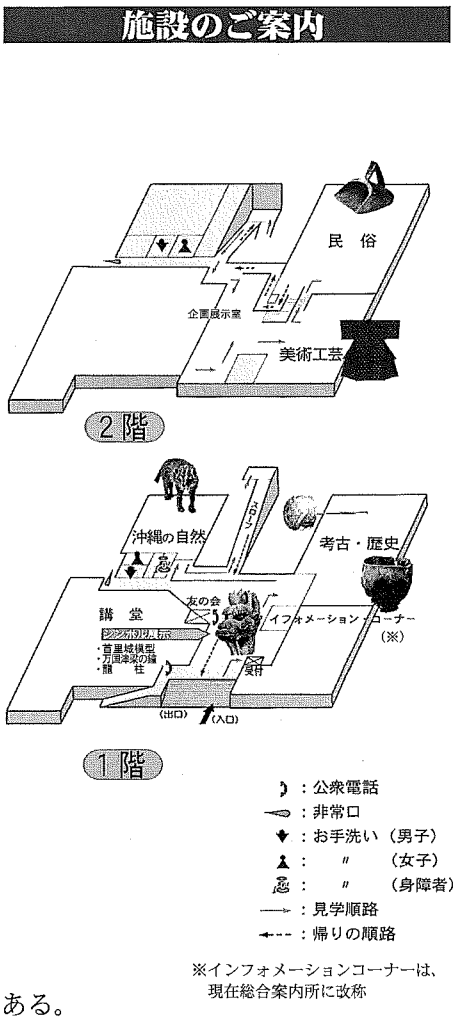
⑤敷地内の通路：玄関の出入り口に向けてスロープが設けられているが、誘導床材か音声装置、車路に接するところへの注意喚起用床材の使用などの課題がある。

⑥客席の整備：固定式の席が237席あるので、すくなくとも37席分を車いす用の区画としなければならない。

⑦受付カウンター：受付カウンターを車椅子使用者が利用できるよう高さ、けこみ等を配慮することが必要である。

⑧公衆電話：受付カウンターと同様の課題がある。

⑨案内板：点滅型誘導音装置付き誘導等の設置



4．車椅子使用者による施設の点検

車椅子を使用している沖縄国際大学の吉田真梨子さんが、平成12年10月17日に来館し、施設の整備状況を点検し、当館にアドバイスを行った。(注7)

彼女からは、次のような声があがっている。

①現在の施設の状況では、見学後相当な疲労がある。

②売店のカウンターの位置が高い。

③電話の位置が高い。

④ウオータークーラーの位置が高い。

⑤ホームページの端末機の位置が高い。

⑥身障者用トイレのドアが重く、開閉がスムーズにできない。

⑦玄関前の側溝には、車椅子のタイヤがはさまれてしまう。また玄関前スロープのカーブしているところは、方向転換が難しい。

⑧美術工芸室から民俗展示室へは、いったん企画展示室の外へ出てから迂回しなければならないので、見学をあきらめた。

⑨１階から２階へのスロープは、途中踊り場がなく、手動の車椅子の場合、いったん手を離すと、まっさかさまに落ちてしまう。

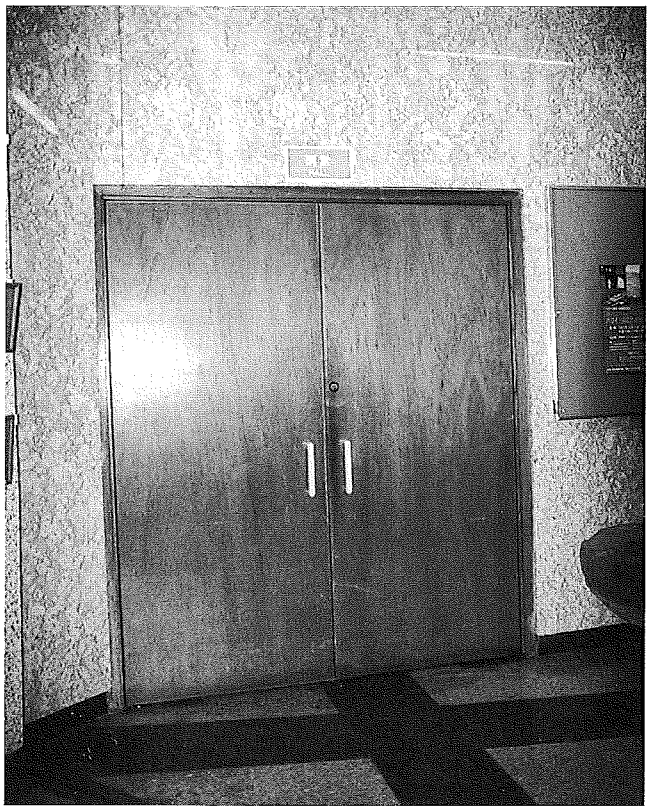
⑩企画展示室前のカーブしたスロープは、１人では移動できない。

５．これからの取り組み

これまでに行ってきた施設点検をもとに、沖縄県立博物館の施設改善をどのように進めていくのかという課題が生じてきている。しかしこの課題については、県の厳しい財政状況の中で十分な予算調整を必要としていることも事実である。ただここで忘れてならないことは、課題が現に存すること、またそれらの改善を博物館利用者が望んでいること、博物館で仕事をする私たちも施設の改善をはかることにより、多くの方々に博物館に来ていただきたいという願いを持っているということである。

資料（1）出入り口の整備：講堂への出入り口<開閉と段差>

資料（2）出入り口の整備：ロビーから講堂への出入り口<開閉>



資料（3）廊下の整備：スロープから企画展示室へ＜踊り場と手すり＞

資料（4）階段の整備：美術工芸室から民俗展示室への階段＜昇降機の設置＞

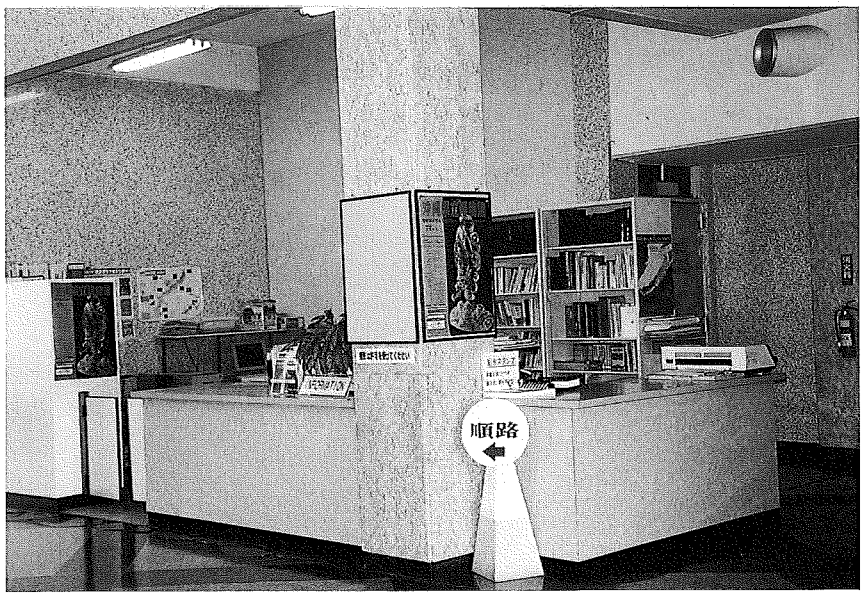
資料（5）便所の整備：ドアの開閉<円滑な開閉>

資料（6）敷地内通路：駐車場から玄関までのアクセス<誘導床材等の使用>

資料（7）敷地内通路：側溝＜段差の解消＞

資料（8）敷地内通路：スロープ＜直線コースへの変更＞

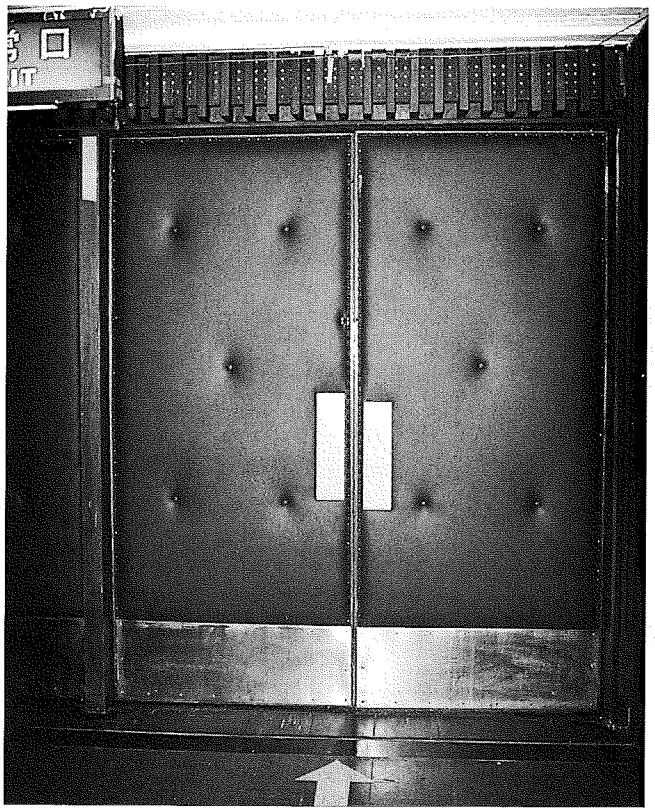
資料（9）受付カウンターの整備<車椅子に合わせた高さ及びけこみの調整>



資料（10）ミュージアムショップの整備<車椅子に合わせた高さ及びけこみの調整>

資料（11）講堂の整備＜車椅子使用の区画設定＞

資料（12）講堂の整備＜ドアの円滑な開閉＞



注　記

注１　前田真之「視覚障害者とミュージアムアクセス」(『沖縄県立博物館研究紀要』26号参照のこと)

注２　沖縄市地域福祉課「沖縄市人にやさしいまちづくり環境整備要綱」(1994年発行)

注３　沖縄県公報 平成９年３月31日（号外第10号）を参照のこと

注４　沖縄県公報 平成10年２月３日第2636号を参照のこと

注５　沖縄県公報 平成10年２月３日第2636号を参照のこと

注６　沖縄県福祉保健部障害保健福祉課「沖縄県福祉のまちづくり条例　整備基準の解説」(1999年発行)

注７　吉田真梨子さんは、車椅子使用者の立場から県内の公共施設を見学し、施設の改善について研究中である。「使いづらい身障者トイレ」琉球新報、2001年２月21(朝刊)、「車いすの吉田真梨子さん観光施設をチェック」沖縄タイムス、2001年

参考文献

・リチャード・K・スコッチ「アメリカ初の障害者差別禁止法はこうして生まれた」(明石書店，2000年)

・Gedra Groff with Laura Gardner, What Museum Guides Need to Know, American Foundation for the Blind, 1990

・John P. S. Salemen, Everyone's Welcome：The Americans with Disabilities Act and Museums, American Association of Museums, 1998

・U. S. Department of Justice, The Americans with Disabilities Act, Title Ⅱ Technical Assistance Manual, 1993

・U. S. Department of Justice, The Americans with Disabilities Act, Title Ⅲ Technical Assistance Manual, 1993

沖縄県立博物館紀要　第27号　15－28, 2001

屋我地島の地形と地質

神　谷　厚　昭
（沖縄県立博物館）

Geography and Geology of Yagaji Island

Kosho　KAMIYA
(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

屋我地島は、沖縄島北部の名護市に属し、市の北半に位置する島である。東西が約4.6km、南北が約3.5km、東に尖った楔形の島で、面積は約7.66km²である。本島の地形や地質については、第２次世界大戦以後、アメリカ軍の地質調査（FLINT etal,1959）の結果の地質図と、復帰後になされた土地分類基本調査（沖縄県、1991）の一環として作成された地質図・地形分類図等が公表されているが、屋我地島に限っての独立した調査報告はない。今回、名護博物館で企画展「屋我地」展が実施されるのを機会に、同島の地形と地質について調査を行った。その結果を報告する。現地の調査と本報告書をまとめるに当たって、名護博物館の山本英康学芸員および比嘉武則主査にはいろいろと便宜を図っていただいた。ここに深く感謝申しあげます。

I　屋我地島の地形

屋我地島は、最高点が屋我地浄水場の55.2m地点で、全体としては低平な低島的様相を示す島である。しかし、細かく観察すると次のようないくつかの特徴が認められる。

①小規模な谷の多い丘陵

屋我地島で最も広い範囲を占める地形である。標高が10m以上の地域はほとんどがこの地形に相当する。一般に数度以下の緩斜面の頂上と丘腹斜面からなる丘陵である。運天原から前垣、我部、饒平名にかけては比高および谷幅ともに20～30m程度の谷が発達し、幅の割りに深さを感じる小さな谷が多い。運天原においては基盤とその上の砂礫層を侵食してできた谷であるが、前垣、我部、饒平名地域は非石灰質砂礫層からなる我部層にできた谷である。沖縄島中部の琉球層群非石灰質砂礫部層地域、または北部の東村等の国頭礫層分布地域によく見られる地形と同様な特徴を示している（神谷、2000）。つまり、起伏量－谷密度の相関関係を見れば、起伏が小さい割りに谷の数が多いという特徴を示している。

現在パイン畑になっている島の中央部の平坦地も、1921年（大正10）に発行された50,000分の１地形図からは、もともと浅い谷間の発達した同様な地形からなる地域であったことが読みとれる。

②石灰岩の侵食残丘

屋我付近、済井出南東および我部南の海岸域には、標高数mの平坦面から比高が15m～35m程度の円錐に近い形の山がそびえている。これらの地形は、頂上部に石灰岩または比較的硬い石灰質砂岩が分布し、周辺より侵食に強いために残丘状に残ったものである。このような残丘は、嘉手納基地東側の沖縄市美里地域に残るライムストンピンナックルや各地の石灰岩海食崖にできた塔状の石灰岩地形と同じような原因で形成されたものと思われる。

図１　石灰岩の侵食残丘

③砂嘴

屋我地大橋の袂から南南西の方向に、海浜砂の堆積によってできた特徴的な地形が見られる。1990年発行の25,000分の１地形図を見ると、屋我地大橋に対して15°の方向に伸び

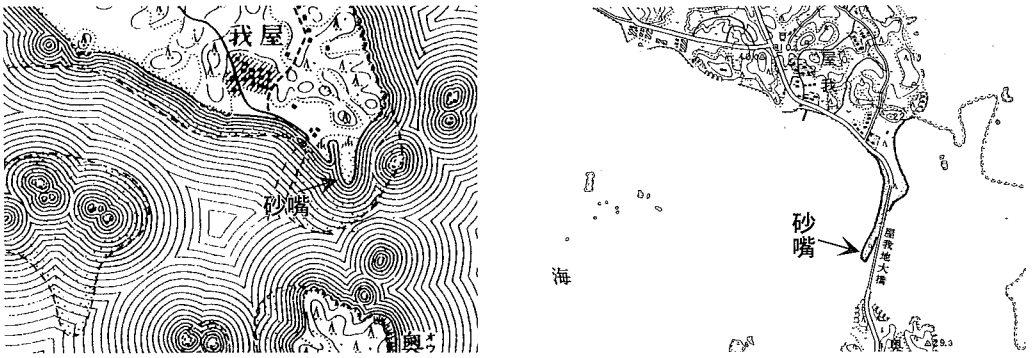


図２　砂嘴の形態変化（左：1921年、右：1990年）

ている（図２右）。しかし、今回調査時の2000年現在、その角度は大橋に対して40°の角度をなしている（図３）。この８年間に海の流れによって砂嘴の砂の堆積場所が変化したものと推定される。また、前述の1921年版50,000分の１地形図（図２左）を見ると、砂嘴は二股に分かれ、現在のものよりかなり短い。西側のものが特に短く、東側のものがやや長い。両者ともほぼ南に向かって伸びている。そして、東側に位置する１つがほぼ南に向かって成長し、途中方向を南南西に変え、現在にいたっている。地図上で比較すると、19

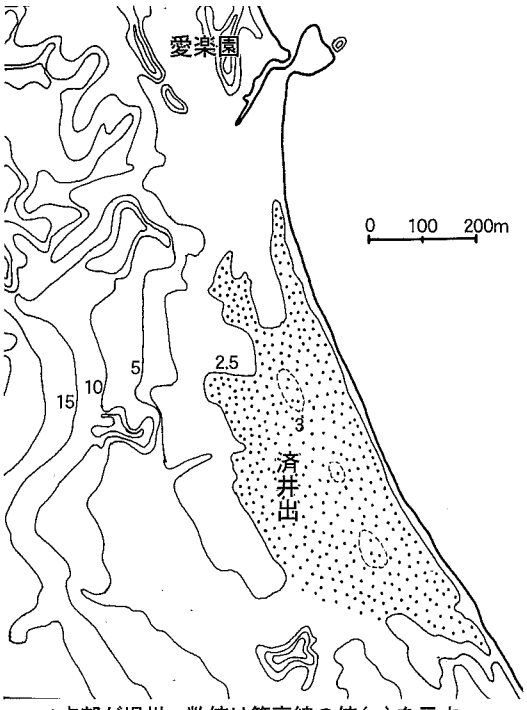
90年発行の地形図上の砂嘴は、1921年版よりおよそ400mほど成長していることがわかる。ちなみに、大橋がはじめて架けられたのが1953年、その後1960年にチリ津波によって流失し、1963年に復興した。その橋も老朽化が進み、現在の橋が完成したのが1993年である(名護博物館、2000)。従って、砂嘴が現在のような形態になるに至った経緯はおよそ次のようになると考えられる。

いまから約80年前、南に向かって200mほど成長していた砂嘴が、1953年または1960年の屋我地大橋の建設時にはさらに南側（やや西よりになっていったかも知れない）にいくらか成長していた。そして、橋建設に伴い砂嘴の成長する方向が西寄りに変化したと思われる。その間、もう一方の砂嘴はまったく成長しなかった。最後の８年間に砂嘴の西への移動は前述したように、25°に達することが確認できる。このように、砂嘴の成長・形態変化および方向の変化は、大橋の３度に渡る大橋の建設に深い関係があるものと推定される。

図３　現在の砂嘴の様子

④堤州（図４）

潟湖や湿地によって陸地から隔てられ、湾口を塞ぐように伸びた、離水した砂礫質の地形的高まりを一般に堤州という。済井出集落の中を通る県道125号線の西側には標高が2.5m以下の場所が幅約100mでもって南北方向に細長く分布し、その中を済井出西方と南に源をもつ小河川が北に流れ、愛楽園入口の東側で海に注いでいる。その低地部は、かつては内陸部の湿地を形成していたことが推定できる。低地部の東側、済井出の集落が位置している海岸側には海浜砂が堆積し、標高が2.5mを越す高まりの部分、つまり堤州が、幅約200m、長さ約850mに渡って発達している。このような堤州は一般に湾入の大きい地域に発達し、沖縄島北部地域の各地で観察できる（目崎他、1978）。しかし、本部半島地域は全般に発達が悪く、



*点部が堤州、数値は等高線の値(m)を示す。

図４　済井出の堤州付近の地形図

半島基部の名護市屋部とここ屋我地にしか見られない。

⑤ドリーネ

1970年代の屋我地島の5,000分の１地形図を見ると、前垣北方の古期石灰岩地域に半径が数10～100mのドリーネが２カ所に確認できる。しかし、現在は農地改良によって平坦化されて畑になり、消失して認められない。貴重な石灰岩地形が失われてしまって残念である。

II　屋我地島の地質

屋我地島の地層・岩石は大きく７つに区分される（図７）。次ぎにその各層について、今回の調査結果と他地域の相当層とを比較しながら説明をする。

１．運天原層（与那嶺層）

運天原を中心に、屋我地島の北西部を占めて分布する地層である。本部半島に分布する与那嶺層に類似する地層で、その北東延長の一部を占めるものと推定される。本部半島においては、石灰岩、チャート、泥質岩類が混在して分布し、オリストストロームを構成している。現在のところ、屋我地島では時代決定に有効な化石類は未発見であるが、模式地の本部半島において、石灰岩からペルム紀のフズリナ類、チャートからは三畳紀の放散虫やコノドントが、そして基質部からは白亜紀の放散虫が発見されている。

図５　石灰岩の露頭（オランダ墓近く）

図６　千枚岩の露頭（浄水場近く）

運天原層は、大きく石灰岩（図５）からなる部層と千枚岩（図６）からなる部層の２つに区分できる。前者はオランダ墓付近から浜苗代、運天原にかけてと、前垣北方のスクブに分布する。一方、千枚岩部層は、両方の石灰岩分布地域に挟まれるように、大池から大堂にかけて、屋我地浄水場のある島の最高点地域を占めるように分布している。一方、石灰岩や千枚岩部層に伴ってチャートの分布が認められる。分布は限られており、運天原の沖縄養殖センター西側に幅150mほどに渡ってまとまって分布するほかは、浄水場北東の

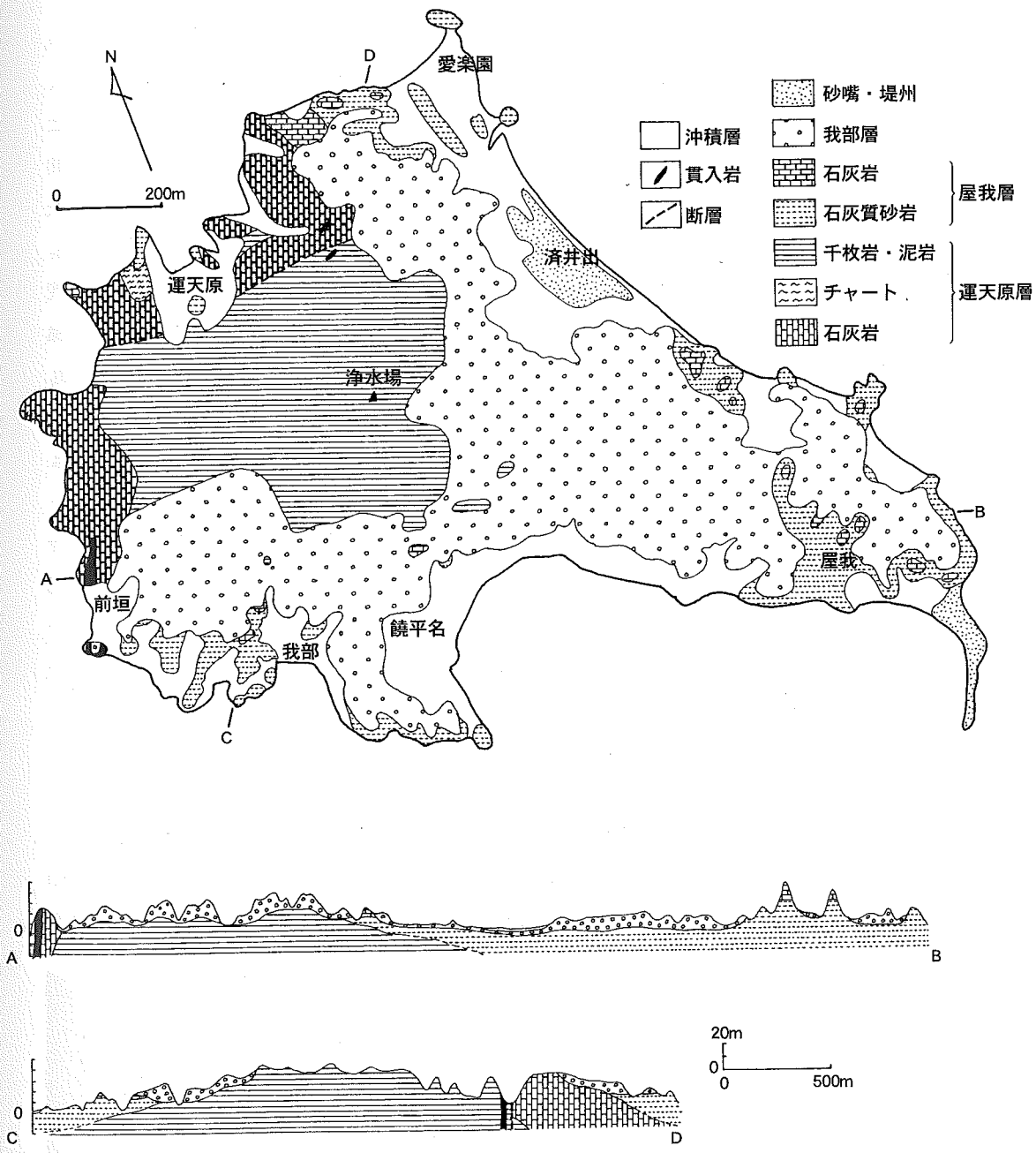

N
0
200m
D
愛楽園
沖積層
貫入岩
断層
砂嘴・堤州
我部層
石灰岩
石灰質砂岩
屋我層
千枚岩・泥岩
チャート
石灰岩
運天原層
済井出
運天原
浄水場
B
屋我
A
前垣
我部
饒平名
C
0
A
B
20m
0
0
500m
0
C
D

図７　屋我地島の地質図

済井出養豚団地北約150m地点において、千枚岩層に挟まれて厚さ数mの小露頭が分布するのみである。

石灰岩は、灰白色～暗灰色結晶質石灰岩で、多くは層状の岩体で産出する。岩体によって走向傾斜にばらつきがあり、前垣北方岩体およびオランダ墓岩体では走向北東～東西で、北に25°～30°で北に傾斜、浜苗代～長佐久北海岸の岩体では水平～N35°W、20°Eとなっている。また、前垣北方岩体の運天原大池の西側海岸におけるように、緩やかに褶曲している層準も認められるが、石灰岩体全体としては北にゆるく傾斜する傾向が強い。長佐久北海岸においては、一部に千枚岩の薄層を挟み、厚さが数cmの石英脈も観察できる。

千枚岩部層は、主に泥質千枚岩～粘板岩から構成され、場所によって厚さ数10cm程度の砂岩層を挟む。新鮮な露頭においては、前者は黒色、後者は暗灰色を示すが、一般に風化が進んでいて共に灰白色を呈することが多く、特に著しい場合には赤色土壌化している。

走向は一般に西北西から北東の間で変化し、傾斜はときに垂直層も見られるが、一般に緩傾斜で18°～35°Nから20°～35°Sの間で変化しているものが多い。傾斜の変化から、数10m～数100mの波長で褶曲を繰り返しているものと考えられる。

チャートは、石灰岩に伴うものと、千枚岩部層に挟まれるものとがある。いずれのチャートも淡灰色～優白色のもので、層状チャートである。千枚岩に伴うものは千枚岩に調和的であり、石灰岩に伴うものは両者の関係が不明である。しかし、沖縄養殖センター西のチャートが北側の千枚岩の小露頭と済井出養豚団地北側と同様に調和的であるとするば、チャートと石灰岩は、走向傾斜のずれから見て非調和的である可能性が高い。

2．貫入岩類

前垣のニライ水産エビ養殖場北側と、済井出から運天原に抜ける県道110号線沿いに2カ所、計3カ所においてヒン岩の岩脈が確認できる。県道沿いの2カ所の露頭は幅が10m程度の小露頭であるが、前垣海岸の岩脈は幅約50mある（図8）。後者は養殖場を挟み南北の露頭で観察でき、岩脈の延長は少なくとも500mに達するものと推定される。

いずれの岩脈も風化が著しく、新鮮な標本を採取するのは難しい。比較的新鮮な露頭では、灰白色の石基に径2～8㎜程度の白色斜長石斑晶と長径2㎜程度の角閃石柱状結晶が散在するのが認められる。前垣海岸における露頭では、石灰岩と接触しているのが確認でき、ほぼ調和的に貫入してい

図8　ヒン岩の露頭（前垣海岸）

るのが観察できる。このような岩質や基盤岩との貫入関係は、本部半島や恩納村から名護市にかけて分布する岩脈類と同じ傾向であり、一連の新生代中新世貫入岩類の構成物であることが推定される。

3．屋我層（琉球層群）

愛楽園、済井出南東～屋我、我部から饒平名にかけての海岸地域に分布し、石灰質砂岩部層と石灰岩部層からなる地層である。沖縄の島じまに広く分布する琉球層群に対比される。石灰質砂岩部層は下位に、石灰岩部層は上位に位置する。類似の地層群は西側対岸の今帰仁村運天周辺や古宇利島南東海岸等にかけて分布する。今帰仁村の琉球層群については高安（1976）の詳しい研究がある。彼は石灰岩層を大きく２層に区分し、下部層は有孔虫－コケムシーウニ等を含む石灰質砂岩層からなり、上部層は各種石灰岩からなることを述べている。そして、下部層の上部にカキ化石の密集する層準があることを述べている。また、上部層をさらに下位からＡ～Ｃ層に３区分し、Ａ層の上半部にサイクロクリペウスやオパキュリナなどの大型有孔虫が、Ｂ層に石灰藻が、Ｃ層にはサンゴ化石がそれぞれ特徴的に含まれるとしている。

一方、古川・黒川（1998）は古宇利島架橋工事に伴う古宇利島～屋我地島間の海底の地質ボウリングの結果を検討し、琉球層群を４層に区分し、上から２番目の層の下位層準にカキ化石の密集層（高安の下部層上位に当たると考えられる）があることを記載し、さらに下位に厚い石灰質砂層・砕屑性石灰岩・暗灰色泥層が存在することを確認し、高安（1976）の下部層よりさらに下位の層準が古宇利島と屋我地島の間の海底下に広く分布していることを確認した。

屋我地島では、愛楽園、屋我、饒平名、我部、運天原の海岸部に限って分布し、内陸部での分布は確認できない。分布の大部分は下位の石灰質砂岩部層で、ときに非石灰質砂礫層をレンズ状に伴っている。上位部層の石灰岩の分布は限られている。その中で、石灰岩

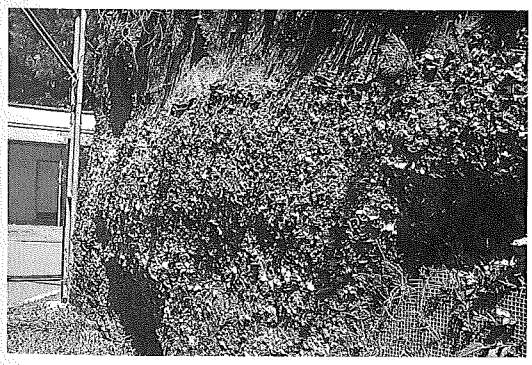


図９　石灰質砂岩の露頭（愛楽園構内）

図10　イタヤガイ（屋我東海岸）

が広くまとまって分布する地域は屋我周辺である。そこでは、地形の項で述べたように、比高20～30m程度の残丘状地形を示すことが多い。

石灰質砂岩には化石が豊富に含まれており、カキ・ウニ・コケムシ・イタヤガイ・キンチャクガイ・腕足類・生痕化石・アンフィステギナ・サイクロクリペウス・オパキュリナ・石灰藻球・多くの貝片等が産出する。なかでもカキ化石は、愛楽園周辺、運天原海岸、我部等に密集層を作って広く分布している（図９）。高安（1976）は、琉球層群上部層のＡ層を構成する石灰岩にサイクロクリペウスやオパキュリナが、その上位のＢ層の石灰岩に石灰藻球が特徴的に含まれることを述べているが、屋我地島では、いずれも石灰質砂岩層中に産出するのが特徴である。このことは、屋我地島の琉球層群が今帰仁より陸域に近い環境で堆積した可能性を示している。

上記の化石類の産出分布の特徴を見ると、カキ密集層は島の西部、特に北西部の愛楽園周辺に多く分布し、イタヤガイ・ウニ等は各地にまんべんなく分布している（図10）。一方、サイクロクリペウス、オパキュリナそれに石灰藻球等は、島の南東部屋我から奥武島にかけて産出する。これらの化石分布と高安（1976）の結果を併せて考察すると、石灰質砂岩部層は西から東に向かって上位層が現れていることになる。石灰質砂岩層の下位に近い運天原海岸では、露頭の最下部に径が１ｍを越す運天原層の古期石灰岩やヒン岩の角礫が多数産出し、基盤の岩石からなる海岸線に沿って、極浅海を埋めるようにして堆積していった石灰質砂岩層であることを推定させる（図11）。石灰質砂岩層の上位にあたる屋我周辺では、基盤に由来する礫は産出せず、ラミナの発達した石灰質砂岩層が顕著になり、また、ときに基盤に由来する砂層を伴うようになる。これらは屋我付近の層準がより海側の堆積物であることを示唆している。

図11　石灰質砂岩中のヒン岩礫（運天原海岸）

石灰岩部層の固結の進んだものは、屋我周辺の小丘陵山頂部に点々と、標高25m以上を占めて分布するものが多い。また、固結の弱いルーズなタイプも多く、各地に見られる。有孔虫、貝片、サンゴ片、腕足類等を含む砕屑性石灰岩である。後述の我部層の中に礫として混入することがある。高安（1976）のＡ層ないしＢ層に当たるものと思われる。

済井出南東海岸において、石灰岩の転石や石灰質砂岩からなる露頭において、径が数10cmの縦穴が見られる。“ヤシ林化石”類似の穴である。同様な縦穴は屋我地島の北方に位置する古宇利島北東海岸において数多く観察される。過去のある時期に形成された石灰

岩の溶食地形または侵食地形（ポットホール）と考えられている。屋我地島の縦穴も同様な成因できたものと思われる。この縦穴は後述の我部層を構成する砂層で埋積されており、同層より古い時代に形成されたことがわかる。つまり、少なくともリス・ウルム間氷期以前に形成されたことが推定される。

4．我部層（国頭礫層）

島の西部に分布する基盤岩類を取り囲むように、我部から饒平名、屋我、済井出にかけて、標高数m～30mの範囲に広く分布する砂礫層である。FLINT etal（1959）によって那覇累層礫部層、石灰質砂岩部層もしくは国頭礫層と呼ばれる地層をふくんでいる。今回の調査では、奥武島や屋我付近に分布する砂層が呉我層の石灰質砂岩層や石灰岩の凹部を埋積して分布する（図12）こと、屋我や我部において砂層の中に屋我層に由来すると推定される石灰岩礫が存在することなどから、両者の関係は明らかに不整合で、砂層が呉我層の上位を占める段丘堆積物であることが確認できる。屋我付近において、砂層は細礫層～中礫層に漸移する。同様な砂礫層は屋我から済井出～饒平名東方の線にかけて広く分布している。

図12　屋我層と呉我層の関係

一方、饒平名集落から我部にかけての集落の裏手丘陵沿いに、中礫～大礫を多量に含む砂礫層が分布する。場所により厚く20mに達し、１mほどの泥層を挟むことがある（図13）。これらをFLINT etal（1959）は那覇累層の礫部層として記載し、屋我層の石灰質砂岩と同時異相と捉えている。筆者は今回の調査の結果、次のような幾つかの理由で前述の砂礫層と同時異相と考え、屋我層の上に不整合で乗る段丘礫層として解釈した。

①砂礫層が常に我部層の石灰質砂岩層より地形的に高所に位置する。つまり、ほぼ水平に発達する石灰質砂岩層より見かけで上位に存在すること。

②屋我付近に分布する砂層中の礫層と明らかな違いがないこと。

③我部～饒平名を中心に、東方の屋我および西方の前垣に向かって礫の大きさが漸移的に減少しているように分布すること。

④我部および運天原の海岸近くの石灰質砂岩の露頭では、基盤に由来する礫が角礫～亜角礫であるのに対し、より基盤に近い礫層のれきが円礫～亜円礫であること。

⑤饒平名集落の北側において、屋我付近に分布する砂層と類似の砂層が、礫層の最上部

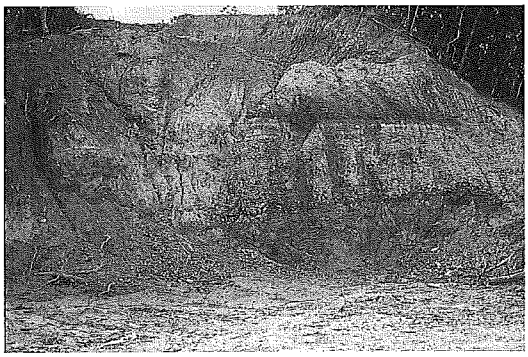


図13　我部層中の粘土層（我部）

図14　我部層中の石灰岩礫（屋我）

に見られ、礫層と指交関係にあり、同時異相を形成していること。

⑥砂層～細礫層中に石灰岩礫が見られる（図14）。

以上のように、我部層は屋我層の上に不整合で乗る段丘礫層と考えると、分布する高度からみて中位段丘下位面～低位段丘面構成層となる。本部半島に見られる段丘の東方への延長に当たると思われる。時代は読谷石灰岩あるいは牧港石灰岩の堆積時に相当すると考えられ、ミンデル・リスもしくはリス・ウルム間氷期となる。

石灰質砂岩層の凹部を埋めている我部層の砂層が観察されるとき、境界に沿ってマンガンが濃集している場合がある。また、ときには斑点状のマンガンが境界近くに含まれるときもある。このような現象は東村宇出那覇付近に分布する低位段丘砂礫層でも確認されている（神谷、2000）。これは、段丘が形成されるときに、両地域が同じような堆積環境にあったことを示している。東村のマンガン層の形成と同じ環境だと考えると、我部層の上部層に当たる砂層が堆積するとき、下部層の礫層堆積時よりも酸化的または外海的な環境であったことが推定される。つまり、下部層が堆積するころ淡水の影響の強い浅海にあった堆積場が、上部層が堆積する頃には陸の影響が少ない、より沖合の堆積場に変化したものと思われる。下部層の堆積時が還元的環境を帯びていたことは、我部北側の礫層中に内湾的環境を示す青灰色粘土層が見られることとも整合性がある（図13）。

Ⅲ　屋我地島の主な露頭の記載

ここでは屋我地島および奥武島に見られる露頭で、屋我地の地質を考察する上で重要だと思われるいくつかの露頭について記載する。露頭の位置は図15に番号で示す。

1．屋我のＡ露頭

屋我の北側、生コン工場（協栄総業）の北西側、小林宅裏に位置する屋我層と我部層からなる露頭。屋我層下部の砂質石灰岩部層を最下位に、その上に屋我層上部の石灰岩部層、さらに上位に我部層の非石灰質砂層が乗る露頭である。石灰質砂岩層が露頭の大半を占め

石灰岩および砂層は少ない。石灰質砂岩は黄褐色を呈し、全体として径数cm程度のノジュールを多量に含むが、下部に近いところはノジュールの比較的少ない砂層である。石灰質砂岩の上部には層理に平行に厚さ数cmの板状ノジュールが発達している。

石灰質砂岩層の上に乗る石灰岩は、淡黄色の礫状の砕屑性石灰岩である。上位面は凹凸を形成し、赤褐色砂層が堆積している。また、崖の右端に近いところでは、最下部の石灰質砂岩層が直接赤褐色砂層によって覆われている。このことは、赤褐色砂層が堆積する前に、石灰岩および石灰質砂岩層が明らかに侵食を受けていることを示している。つまり、赤褐色砂層は、尾根の地形面に沿って、厚さ数m以下で屋我層を不整合に覆って分布している。

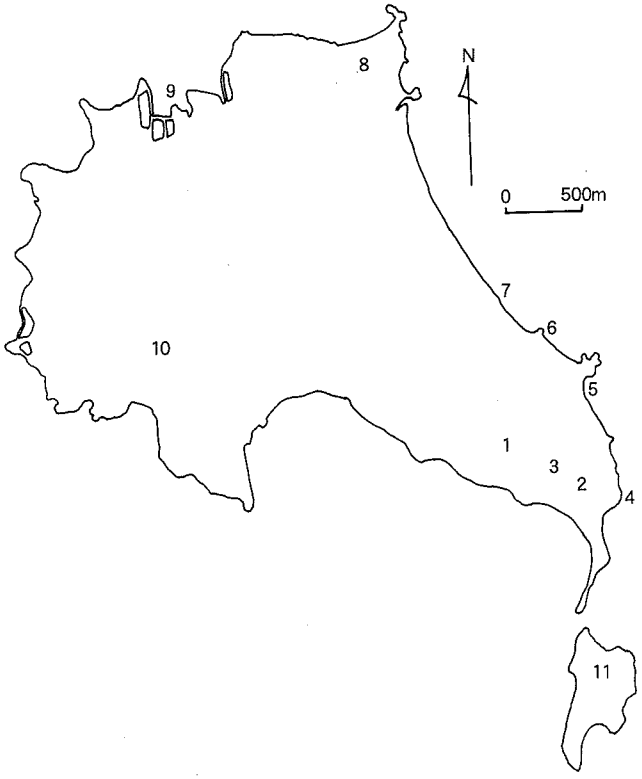


図15　記載露頭の位置

2．屋我のB露頭

屋我集落裏、「山原遊びと創造の森図書館」北西約150m地点、墓地の中の我部層からなる露頭。我部層の非石灰質砂層と礫状になった石灰岩が複雑に入り混じった露頭である。砂層は全体に赤色土壌化し、粒度がほぼ揃った石英粒からなる中粒～粗粒の砂層である。石灰岩礫は径数cm～30cmの有孔虫砕屑性石灰岩の角礫～亜角礫で、屋我層上部の石灰岩部層から供給されたものと考えられる。石灰岩礫がほとんど円磨を受けていないところから、礫の形成とほぼ同時に非石灰質砂層によって埋葬されたことを示している。つまり、屋我層の石灰岩が崩れてできた崖錐性の石灰岩礫が崖下に堆積し、そこへ他所から非石灰質の砂が運び込まれ堆積していったと思われる。

3．屋我のC露頭

屋我集落金城宅入口の２つの小露頭。屋我層下部の石灰質砂岩層の上に我部層の非石灰質砂岩層が乗っている露頭である。下部の石灰質砂岩層は凹凸に富み、その凹所を埋めるようにして非石灰質砂層が分布している。石灰質砂岩層は、下部が数cm大の礫状ノジュー

ルを含む層準で、上部は厚さが数cm単位でよく成層した板状の石灰質砂岩である。

非石灰質砂層は、南側の露頭が前述（屋我Ｂ露頭）の砂層によく類似し、赤色化が進んだ砂層である。それに対して、北側の露頭を構成する砂層は、石灰質砂層との境界部において淡黄色砂層で、上位に移行するに従って、細礫混じりの赤色化した砂層へと変化しているのが観察される。

４．屋我東海岸の露頭

屋我地ビーチ北東約200m地点の露頭。高さ10m余の海食崖をつくる露頭である。すべて屋我層の石灰質砂岩層から構成されている。上から順に、径２～３cmのノジュールを含む層（３m）、上と下に厚さ数10cmの平行ラミナ層を伴い生痕化石の見られる層（４m）、生痕化石と貝化石が散在し、弱いクロスラミナの見られる層（３m）、基盤の細礫や化石（イタヤガイ、キンチャクガイ、ウニの棘など）が含まれる層（1.5m）からなる。

５．屋我北海岸のＡ露頭

屋我クルマエビ養殖場北約150mの海岸に面した屋我層の下部からなる露頭。高さ10m余の海食崖をつくる。最上部に固結した石灰質砂岩（３m）、その下に礫状に見える軟質石灰質砂岩（５m）、上位が砂層、下位が径数mm～２、３cm大の細中礫を伴う砂礫層からなる非石灰質砂礫層（５m）、下部に非石灰質礫および貝化石を伴うクロスラミナの見られる石灰質砂岩（0.8m）、生痕化石の見られる層（1.6m）からなる。非石灰岩砂礫層と石灰質砂岩層が同時に見られる数少ない露頭の１つである。

６．屋我北海岸のＢ露頭

屋我クルマエビ養殖場北西約550m地点の海岸に面し、屋我層の下部と上部層が見られる露頭。高さ10m余の海食崖をつくる。最上部に石灰岩（３m）が乗り、その下に遠望して石灰藻球と思われる塊が礫状に入っている石灰質砂岩層（１m）、全体として基盤の細礫を含み、下部に石英の細礫が多く、大きなノジュールが見られない層（２m）、南に向かって緩く傾斜するように方向性をもった生痕化石の見られる層（１m）、上から平行ラミナ・クロスラミナ・平行ラミナが見られる層（３m）、生痕化石、貝片、弱い板状ノジュール等の見られる層（１m）からなる。

７．済井出南東海岸の露頭

済井出南東約500m地点の海岸に面した屋我層の上下部層からなる露頭。高さ10数mの海食崖をつくる。中ほどに墓があり、下半分は植生や階段などで観察できない。上部数mについて観察すると、最上部に石灰岩（３m）、その下に板状の石灰質砂岩が礫状になっている層（１m）、石灰藻球の多い石灰質砂岩層（250m）、オパキュリナ密集層（1.2m）、それから生痕化石が散在する層（１m＋α）と続く。礫状に見える部分が不整合面かどうかは高いところに位置し観察が難しく不明である。石灰質砂岩層中に含まれる石灰藻球や

オパキュリナを観察するに適した露頭である。

8．愛楽園の露頭

愛楽園第６センター東側の露頭。屋我層下部の石灰質砂岩層にカキ化石が密集し、いわゆる化石床を形成している露頭である。上部には軟質な砕屑性石灰岩が認められる。カキ以外にもイタヤガイ、ウニ、コケムシ、腕足類等の化石が産出する。同様な露頭は古宇利島架橋工事現場の海岸、運天原海岸、前垣、我部等、島の西側に限って分布する。また、同様な化石層は、対岸の今帰仁村運天周辺や古宇利島の南東海岸にも分布している。

9．運天原海岸の露頭

運天原沖縄養殖センター北東の海岸に飛び出た岬にある屋我層下部と上部層からなる露頭。高さ10mほどの海食崖をつくる。最上部近くにカキ・ウニ密集層があり、その下は固結が進んだ石灰質砂岩層で、化石層より３mほど下の層には弱いラミナが確認できる。さらに下の中部には扁平なノジュールが含まれる層準が３mにわたってあり、さらに下の下部層には生痕化石や貝化石が多く存在する。中部層から下部層にかけては縦に割れ目が発達し、鍾乳石が形成されている。また、下部層にはチャートの小円礫、ヒン岩や古期石灰岩の角礫～亜角礫の巨礫が含まれる。この露頭は、屋我層の最下部に近い層準であると推定される。崖の上部層の左側にはブロック状に砕屑性と思われる石灰岩が乗っている。その分布形態から、へばり付き型タイプの石灰岩であると思われる。

10. 我部の露頭

我部集落の前垣停留所北東約550m地点にある我部層の露頭。基盤の運天原層（砂岩）の上に不整合に乗る砂礫層である。不整合面直上に10数mの厚い礫層が乗り、その中に厚さ約１mの青灰色～黄褐色粘土層が挟まれている。礫はほとんどが円礫～亜円礫で、基盤の千枚岩、砂岩、チャート、石英粒に由来する中～大礫から構成される。

11. 奥武島の露頭

屋我地大橋南側駐車場より南へ約250mの地点、県道110号線沿いの墓地裏の露頭。軟質部と固結部の入り混じった砕屑性石灰岩層が侵食されてできた複雑な凹凸面を境に我部層上部の砂層が乗っている露頭である。下部の軟質砕屑性石灰岩層には数種類の腕足類が豊富に含まれ、イタヤガイ、ウニ、サイクロクリペウス、キンチャクガイ、サンゴ片等が散在し、石英の亜角礫が見られる。不整合面の凹凸を埋積して粒度が均質な非石灰質砂層が乗っている。石灰質砂岩層との境界には幅10～20cmの範囲で径数mmのしずく状マンガンが濃集して層を形成している。特に、凹部において厚くなる傾向が見られる。

参考文献

FLINT, D. E., SAPLIS, R. A. and CORWIN,G.(1959)：Military geology of Okinawa-jima, Ryukyu-Retto. (5) *Intell. Div. Eng. HQ. USAP. with USGS,* 88p.

神谷厚昭(2000)：東村の地形と地質．地学教育研究会誌，第23号，p.7-12.

木崎甲子郎編(1985)：琉球弧の地質誌．沖縄タイムス，278p.

黒田登美雄・古川博恭・小澤智生(1998)：琉球石灰岩の形成史とその土質工学的評価について．第11回沖縄地盤工学研究発表会講演要旨，p.69-72.

目崎茂和・我那覇念・広山実(1978)：沖縄島北部の海浜地形．琉球列島の地質学研究，第3巻，p.215-225.

名護博物館(2000)：第17回企画展「屋我地」図録．63p.

沖縄県(1991)：沖縄本島北部「名護」「国頭平良」の表層地質図・地形分類図および同説明書．土地分類基本調査，沖縄県.

沖縄県(2000)：沖縄県地質鉱物緊急実態調査報告書－沖縄県の地形・地質－．沖縄県天然記念物調査シリーズ，第39号，90p.

高安克己(1976)：沖縄県本部半島北部の第四紀石灰岩．地質学雑誌，第82巻，第3号，p.153-162.

沖縄県立博物館紀要　第27号　29－45，2001

＜資料紹介＞

県博所蔵の染織資料Ⅲ

－経浮花織－

與那嶺　一　子
（沖縄県立博物館）
幸　喜　　新
（沖縄市経済文化部）

The textile item on Okinawa Prefectural Museum
－ "*Tateuki-Hana-ori*", Supplementary wrap weaving－

Ichiko YONAMINE
(Okinawa Prefectural Museum)
Shin KOKI
(Okinawa city)

Ⅰ．はじめに

沖縄は多くの素材と技法の織物があることで知られる。その中に「花織」と呼ばれる紋織物がある。これまでの研究の結果、花織には①地組織が浮いて紋を成すもの（写真1、2）と、②地組織に浮糸（紋糸）を織り込むもの（写真3、4、5）があることが分かっている。これらの花織はかつての琉球圏内、奄美から与那国までの地域に点在するかたちで残っている（図1）。これらの織り方や模様の表現などは、同じ技法でも微妙に異なるが、与那国や首里を除き、それらの花織の技法は長く途絶えていたため（註1）、その系譜や関係については殆ど解明されていない。

これまで、木綿紺地の平織組織に別色の浮糸が加わる織物は、読谷山地方のものと一くくりで考えられていた。しかし、最近の研究で、縦方向に浮糸の浮く花織（写真4）は、沖縄市の知花、登川（旧美里間切）などで織られていたことが確認された（図2／註2）。

当館には、木綿紺地の平織組織に縦方向に浮糸が浮く花織の染織資料が6件あるが、1996年受け入れの資料№.6を除き、全て台帳名称は「読谷山花織」となっている。これらの資料は沖縄市登川又は知花地域などで織られたことが明らかになったので、そのことも含めて資料紹介することにした。経浮花織は、沖縄市知花地区で多くその例が残されていたため、現在、「知花花織」（註3）として復元作業が行われている。今回、ここでは、これ

まで、紹介されることの少なかった経浮花織を取り上げて解説する。

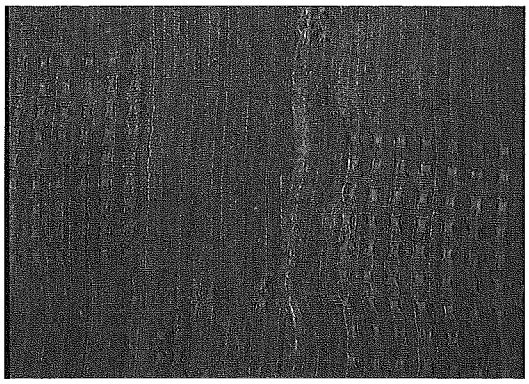


写真１：両面浮花織

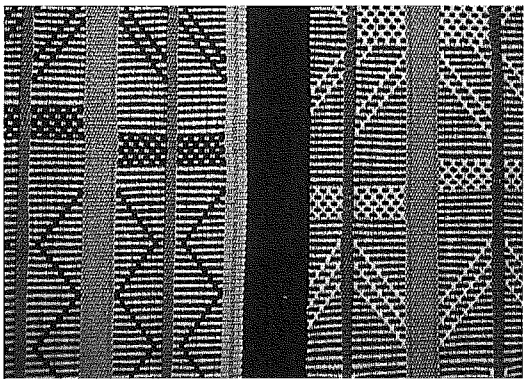


写真２：変化畝織（グーシ花織）

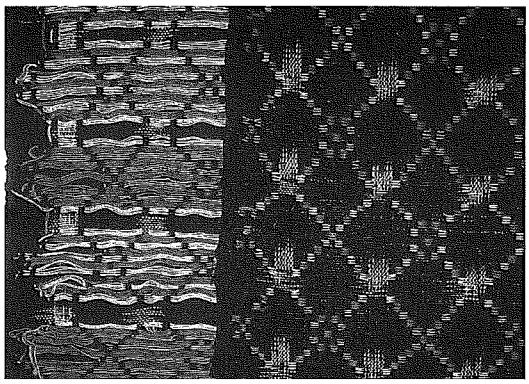


写真３：緯浮花織

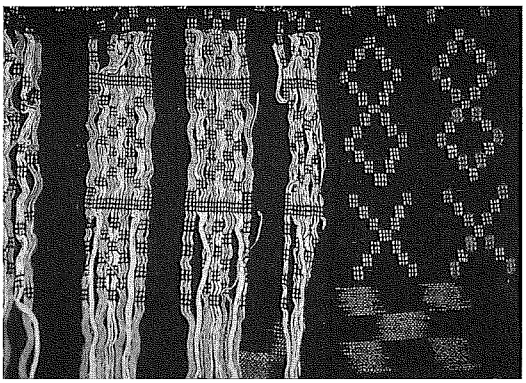


写真４：経浮花織

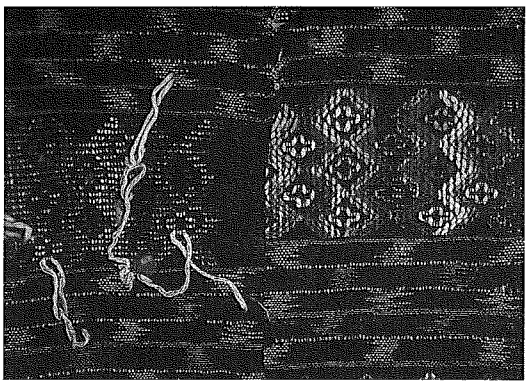


写真５：縫取花織

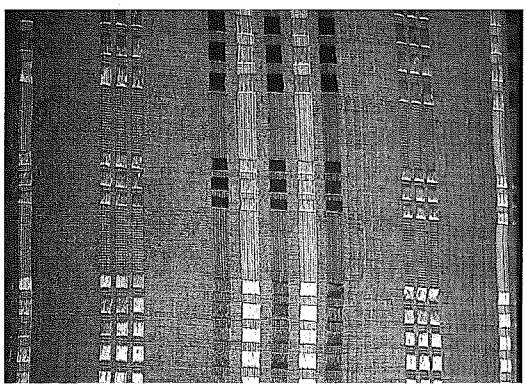


写真６：道屯（ロートン）織

図１）　琉球列島における花織分布

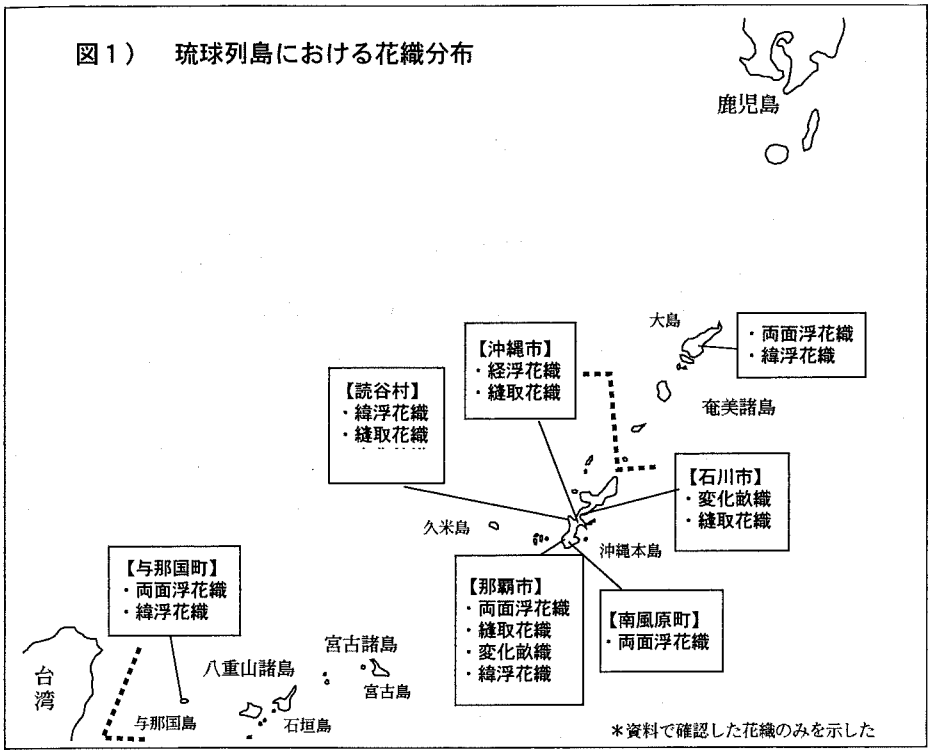
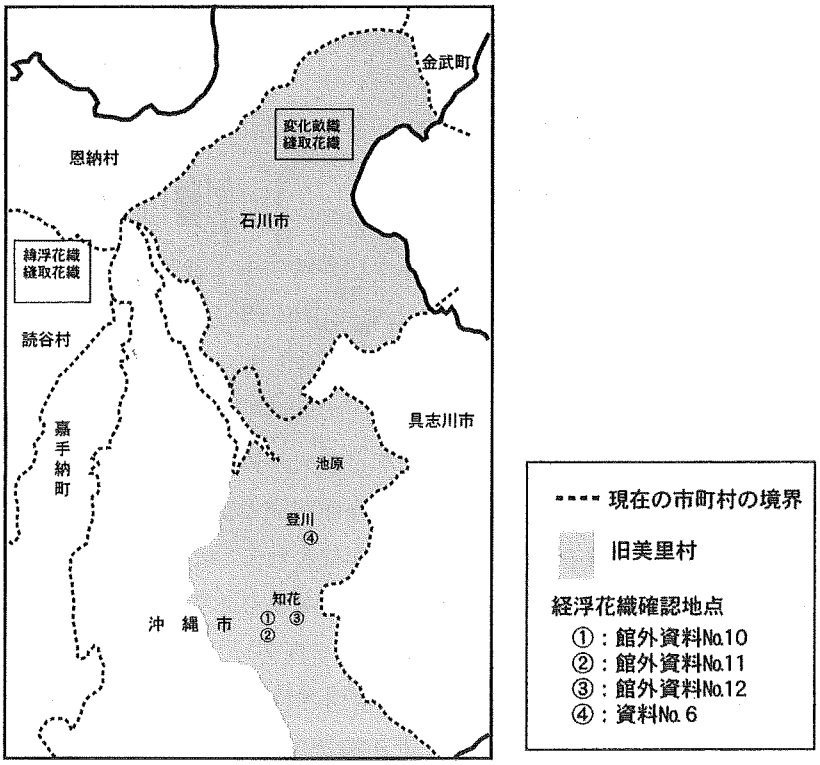


図２　沖縄市における経浮花織資料の確認分布



Ⅱ.「経浮花織」の概要

【経浮花織とは】

織物には平織・綾織・繻子織といった三つの基本となる組織（織り方）があり、それを基本にいろいろな布へと変化する。沖縄の織物は平織組織を基に様々なかたちへ展開され、糸が浮いて模様を織りなす浮織物も平織組織から誘導される。

経浮花織は、地組織の平織に浮糸を組合わせたもので、布の表面では縦方向に模様を作りだし、裏面では浮糸（俗に遊糸）が平織組織に貼り併せたように表れる（写真４、７／図３）。縦方向に模様を表すものに道屯（ロートン）織（写真６）があるが、これは浮糸が平織組織と一体となって模様をあらわし、経浮花織とは異なる。

この織物は、知花地域で「ハナゥイ」、登川地域では「ウキゥイ」と称されている。また登川では、特に裏に小紋紅型を袷せた着物（資料№.６）については「ウスデークジン」と呼んでいる。この種の経浮花織の着物は、旧暦の８月15日に行われる臼太鼓（ウスデーク）衣裳として着用されていた。また、他の花織衣裳（館外資料№.11）の場合も祭の場で使われた。

経浮花織の織物技術は、長いこと途絶えていたが、地元に残されていた染織資料や聞取り調査から、明治期後半までは織られていたことも判った。

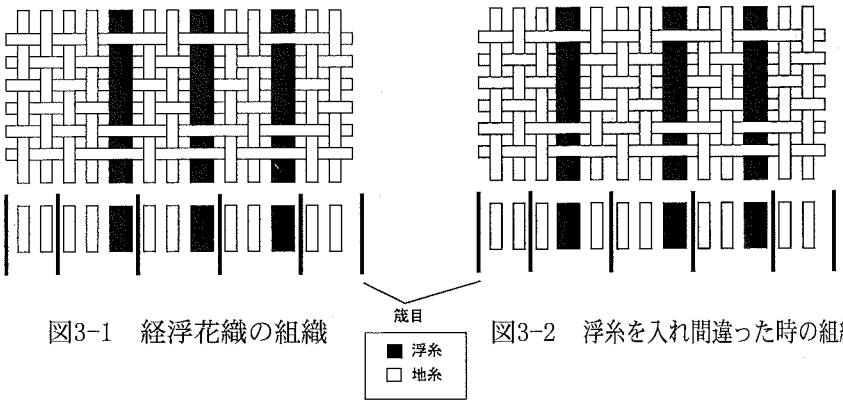


図3-1　経浮花織の組織　　図3-2　浮糸を入れ間違った時の組織

【経浮花織の素材】

素材は木綿を中心に、芭蕉、絹、羊毛などの天然繊維が使用されている。衣裳に使われる地糸の経と緯は木綿がほとんどである。経浮花織と縫取織を併用したティーサージ（館外資料№.１／表１）の場合は、地糸に芭蕉が使われていた。また、浮糸は、木綿、絹の素材が確認でき、単糸を２本取りした双糸や、双糸を２本引きそろえにしたものを使い、糸の太さや撚り加減を工夫した跡がみられる（写真７）。羊毛は、ティーサージの花糸（縫取織の模様を表す糸。以後花糸とする）に使用されている。知花・登川の聞取り調査から、木綿は昭和初期まで栽培されていたことが確認できた（註４）。また芭蕉は戦前までは盛

んに織られていて、昭和10年代になると輸入されたフィリピン苧（マニラ麻）が使用されたことも聞取りとこの地域に伝わる他の染織資料から判った。

絹は明治後期に桑畑の作付けについての資料がみられる（註５）が、直接自家製として使用したかわからない。羊毛については、どのような経路で入手したのか、これも現時点では判らない。

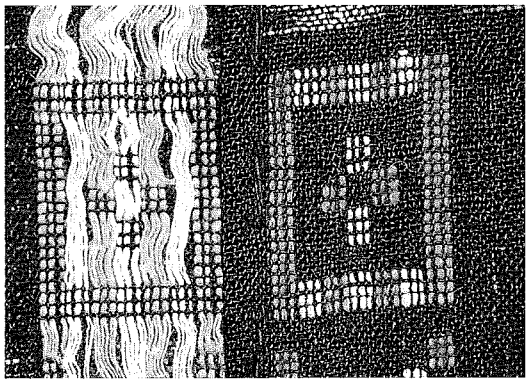


写真７：経浮花織裏表面

【経浮花織の染材】

今回調査を行った当館およびその他の染織資料から染材をみると、地糸の染色は青系統がほとんどである。また、浮糸は赤系統と白系統で、赤系統は２種類の色相がみられる。縫取花織の花糸には、赤、緑など何色か確認できることを補足しておく。

これらの色を、文献、染色実験等から考察すると（註６）、青系統は琉球藍（学名：Strobilanthes cusia）が考えられる。また、明治後期になるとみやこ染（化学染料）が普及するため、みやこ染の可能性も考えられる。

赤系統の染材については、染色実験などからスオウ（学名：Caesalpinia sappn)、グールー（学名：Smilax china var. kara）などが考えられる。

これらの染色は地元で行なわれただけではなく、泊り込みで那覇で染めた話（註７）や、藍染屋が泡瀬や比謝川沿にあったこと（註８）などから、他の地域で染色をしたことなども考えられる。

赤系統の染材については、読谷山花織の手巾に使用されている赤の糸について、田中俊雄氏が「トウガシィ（唐糸)」と述べていて（註９)、染色された糸を購入して使用したことも考えられる。

また、資料№.２・３・4のように、浮糸の赤味の退色を嫌ったのか、意図的に顔料で補色した様子がみられる。

浮糸は、赤系統の色がほとんどだが、沖縄市にある個人蔵の資料には、一部に青味の浮糸を使用しているものがある。

【経浮花織の技法】

この花織がどのような形で織られたのかは不明である。現在、その技法を経験していた者はすでにおらず、聞き取りなどでも確信をつくような答は得られなかった。調査した染

織資料から織り技法を考察してみると、いくつかの疑問点が挙げられる。

一つはどのような織機を用いたかである。経浮花織の製織は聞取り調査や染織資料から地機で織られたのではないかと考えられるが、時代背景から考察すると、経浮花織が織られたとする明治40年頃は、これまでの地機にとって変わられ高機（改良機）が導入された時期である。これまで行なわれた再現の仕事は全て高機で試みられてきた(註10、12)。

また経糸はどのように仕掛けられたか。経糸は地糸と浮糸を分けて二重ちぎりで織機に仕掛けをしたと考えられる（写真８）。沖縄県工芸指導所が昭和51・53年度に経浮花織の試作研究を行った際に、二重ちぎりにしている（註10)。また、読谷山花織の與那嶺貞氏は機仕掛けについて、二重ちぎりではないかと述べていた（註11)。さらに昭和48・55年大城志津子氏が経浮花織を再現した際にも、同様の仕掛けで織られていたこと（註12）などから、ちぎりは二つであった可能性が高い(地機ではマチジャー(巻板))。

浮模様を表す方法には、平織を織る地綜絖と浮模様を作る花綜絖を分け、必要に応じて花綜絖の枚数を増減させる方法（写真９）と、竹グシ等で浮模様を表す方法（写真10）が考えられる。

綜絖については、聞取り調査で確信の持てる情報は得られなかったが、技術的な側面から花綜絖を使ったのではないかと考える。竹グシの方法だと、浮糸のすくい方を間違えたならばそのつど直すことが可能である。しかし花綜絖の場合だと、一度仕掛けたら織あげ

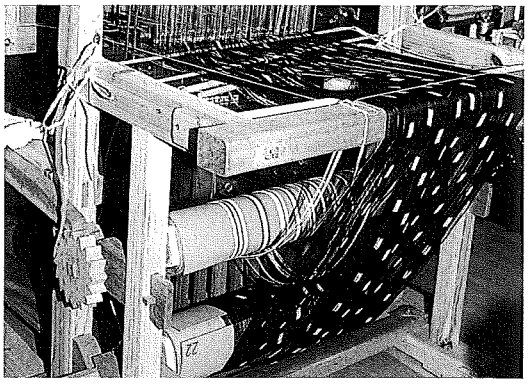


写真８：二重ちぎり構造

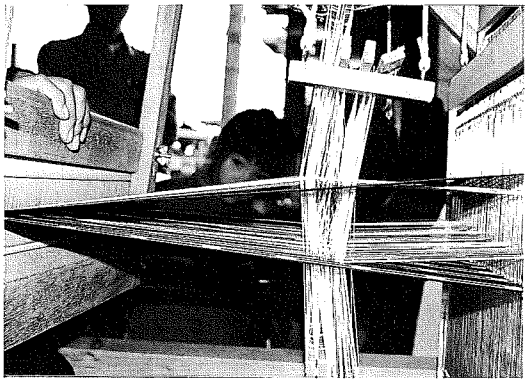


写真９：花綜絖

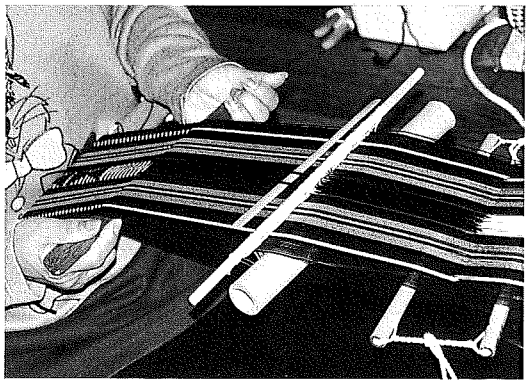


写真10：竹グシを使用する

るまで同じすくい方で花綜絖を上下させなければならない。調査した染織資料の一部に織始めから織上がりまで浮糸が図3-1とは異なる組織で続く部分があること（図3-2）、技法・技術の復元を試みた際（註２）、異なった浮模様の列で模様が重なりあう場合、花綜絖を使用することにより、より近い浮模様を織り成すことが容易にできたことだ。また、田中俊雄氏は館外資料№１のティーサージの経浮花織について「綜絖花織」と解説している（註13）。このようなことから、現段階では花綜絖を使用した可能性が一番高いと考える。

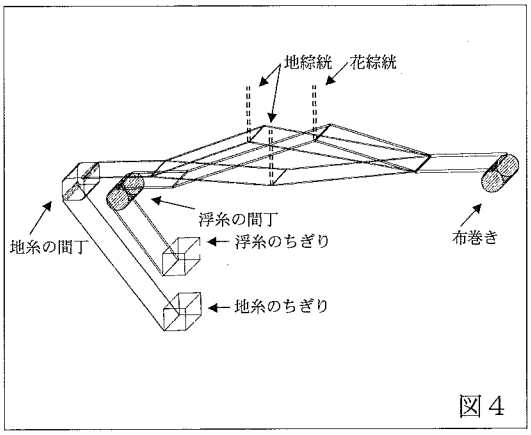


図４

織機、経糸の機仕掛け、浮模様を表す方法については、ここで述べた以外の可能性もあり、今後の研究課題である。

【経浮花織の模様構成】

経浮花織は、基本となる模様の連続した構成がみられず、画一化されない特徴がある。染織資料の形態が大小に関わらず、決まったパターンを連続して構成することがなく、模様は常に変化に飛んでいる。

経浮花織が貢納布であるならば、絵図に従って模様構成されたものを織らされるか、絵図がなかったとしても、管理と検査を受けて納めることになる。しかし、残された経浮花

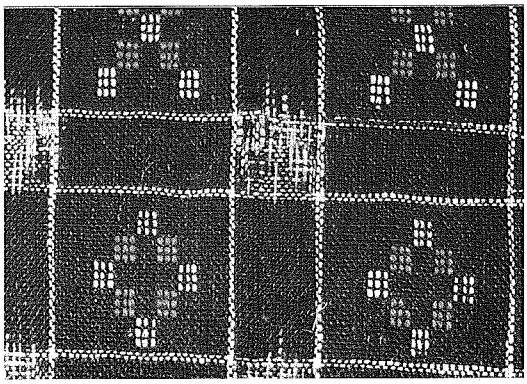


写真11：点ハナ

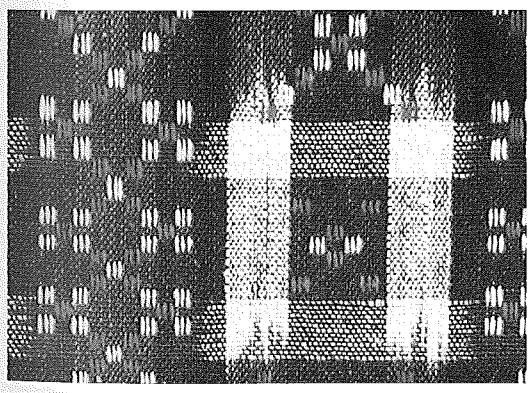


写真12：飛ハナ

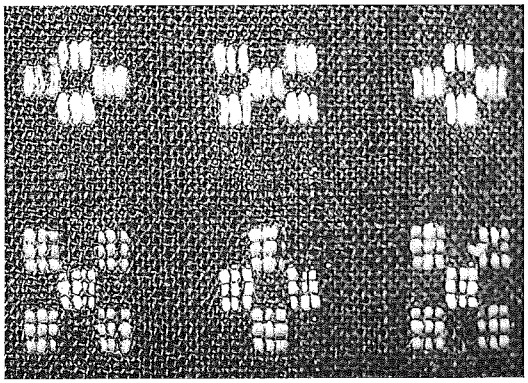


写真13：点ハナ、飛ハナ併用

織の資料からは、その厳しさは感じられない。むしろそれらの制度から放たれ、織手が自らの祭の為に、自由奔放な模様を楽しみながら織ったものだと考えられる。

経浮花織には「点ハナ」（９～20の点が一つのまとまりとなってハナを構成する／写真11、図５）、飛ハナ（緯糸を２段～数段浮いてハナを構成する／写真12、図３）などがある。　模様の構成は、「絣と併用」（資料№.１、２）、「格子と絣と併用」（資料№.３，４，５、６）、「縫取花織と併用」（館外資料№.１）などがみられる。また「点ハナ」、「飛ハナ」（館外資料№.２／写真13）を併用する例もある。当館の資料は全て「点ハナ」である。

【今後の研究課題】

経浮花織技法の染織資料は、長く「読谷山花織」として位置付けられていた。これまで多くの関係者によって行われてきた染織資料の調査や、聞取り調査などから、沖縄市知花地域を中心とした登川などから多く産出されたものであることが判った。しかし「戦前に織った経験者が既に生存していない」「地元に残されている実物資料が少ない」ことなどから、素材、染材、技法や模様などについて、経浮花織そのものをさらに解明してゆくことは困難である。また、この染織技法が、何処からどのようにしてこの地域に伝わったかについては殆ど解っていない。

そのために、今後次のような調査が必要である。

１　県内、県外、国外に散逸した実物資料の確認調査。

２　隣接する地域の類似の織物（緯浮花織、グーシ花織）の技法調査。

３　国外の類似の織物（経浮の織物）の調査。

４　経浮花織が織られていた当時の政治・経済などの歴史・民俗調査。

１の調査により、経浮花織の技法や模様構成などの分類と地域（知花・登川など）による違いなどが解明できるのではないか。２や３の調査により、系譜や途絶えてしまったかつての織り方など見出せると考える。また、経浮花織が与えた地域社会への影響などを総合的に考察するためには４の調査も必要となる。それは単に、技法・技術の体系化にとどまらず、これまで継承されてきた祭祀儀礼から見い出される精神性など、心のよりどころとしての染織文化を語ることができるのではないか。

最後に、資料をまとめるにあたり、日本民藝館、サントリー美術館、鐘紡株式会社、鹿児島県大島紬技術指導センター、平田ハル氏、宮里正子氏、吉戸直氏、当銘正幸氏、池原ノブ氏、新里秀子氏、金城苗子氏、大城慧子氏、比嘉順豊氏にご教授並びにご協力いただいた。ここに記してお礼申し上げる。さらに、今後も課題の解決のために、収集家、研究者、知花地域の皆様など関係者のご理解とご協力をあおぎたい。

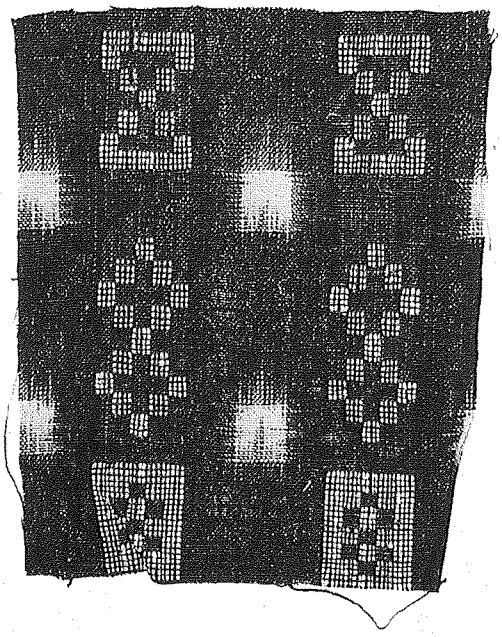
館外所蔵経浮花織資料一覧

（平成12年12月現在）

No.	資料名	数量	資料の形態	寸法(cm)	織技法	所蔵者	備考
1	ティーサージ	1	手巾	縦69.5 横23.5	経浮花織／緯絣／経絣／縫取織	日本民藝館	地糸は芭蕉。
2	紋織裂　紺地花織	1	裂	縦52.4 横27.5	経浮花織	サントリー美術館	佐々木コレクション
3	紋織小裂	1	裂	縦16.1 横15.8	経浮花織／格子縞	サントリー美術館	佐々木コレクション
4	絣入花織着物	1	衣裳	丈119.3 裄66.8	経浮花織／格子縞／経緯絣	鐘紡株式会社	
5	絣入花織裂	1	裂	縦8.9 横9.7	経浮花織／経緯絣	鐘紡株式会社	
6	経浮花織(格子に絣)	1	裂	縦6.1 横6.7	経浮花織／格子縞／経緯絣	南風原文化センター	裂帳に貼付／木崎コレクション
7	経浮花織(絣入り)	1	裂	縦8.3 横5.9	経浮花織／経緯絣	南風原文化センター	裂帳に貼付／木崎コレクション
8	経浮花織裂	1	裂	縦33.0 横40.6	経浮花織／経緯絣	ホノルル美術館(USA)	1988年の調査で確認
9	木綿紺地格子に緯絣経浮花織着尺	1	反物	巾36.5 長1.250	経浮花織／格子縞／経緯絣	国立東洋美術館(ロシア)	『在欧調査報告書』で確認
10	知花花織・馬乗袴	1	衣裳	胴58 丈85.5	経浮花織／経絣	個人蔵	沖縄市指定文化財
11	知花花織・馬乗り上着・踊り衣裳	1	衣裳	丈97.0 裄64.0	経浮花織／経緯絣	個人蔵	沖縄市指定文化財
12	知花花織・胴衣	1	衣裳	丈92.5 裄66.8	経浮花織／経緯絣	個人蔵	
13	沖縄市知花の花織胴衣	1	衣裳	丈91.0 裄63.8	経浮花織／経緯絣	個人蔵	「読谷山花織展」図録(図版26)に掲載
14	紺地経浮花織着物(絣入り)	1	衣裳	丈120.4 裄72.8	経浮花織／経絣	個人蔵	
15	紺地格子に経緯絣経浮花織	1	裂	縦112.0 横35.5	経浮花織／格子縞／経緯絣	個人蔵	
16	紺地経縞に経絣経浮花織	1	裂	縦111.0 横34.7	経浮花織／経縞／経絣	個人蔵	
17	紺地格子に経緯絣経浮花織	1	裂	縦5.5 横9.0	経浮花織／格子縞／経緯絣	個人蔵	大道弘雄著『琉球裂』昭28号(20部限定)に貼付
18	木綿紺地経緯絣経浮花織踊衣裳	1	衣裳	丈91.0 裄59.5	経浮花織／経緯絣	個人蔵	登川／ウスデーク衣裳
19	木綿紺地経浮花織胴服	1	衣裳	丈67.0 裄52.0	経浮花織／格子縞／経緯絣	個人蔵	登川／ウスデーク衣裳／明治20年
20	木綿紺地格子緯絣経浮花織衣裳(ワタジン)	1	衣裳	丈112.0 裄60.4	経浮花織／格子縞／経緯絣	個人蔵	旧美里村
21	木綿紺地経緯絣経浮花織衣裳(ワタジン)	1	衣裳	丈121.3 裄69.5	経浮花織／経緯絣	個人蔵	旧美里村
22	木綿紺地格子経緯絣経浮花織衣裳(ワタジン)	1	衣裳	丈125.0 裄63.5	経浮花織／格子縞／経緯絣	個人蔵	旧美里村／明治初か
23	木綿紺地経格子に経緯絣経浮花織衣裳(ワタジン)	1	衣裳	丈111.0 裄64.4	経浮花織／格子縞／経緯絣	個人蔵	旧美里村／明治か
24	木綿紺地格子経緯絣経浮花織衣裳(ワタジン)	1	衣裳	丈113.5 裄63.6	経浮花織／格子絣／経緯絣	個人蔵	
25	木綿紺地経緯絣経浮花織衣裳(ワタジン)	1	衣裳	丈106.0 裄61.5	経浮花織／経緯絣	個人蔵	

資料紹介

資 料 №：1
資 料 名：紋織裂
台帳番号：431
素　　材：地（経：木綿単糸S撚り／緯：木綿単糸Ｓ撚り）浮糸（木綿単糸２本取り／S甘撚り）
織 技 法：経浮花織・経緯絣
織 密 度：経22本／cm・緯17～18本／cm
染　　色：地（経緯：濃紺→琉球藍）
　　浮（経：白・赤→？）
　　絣（緯：白）
資料の特徴：浮糸の配列は、経は４列だが、緯の浮きは３から５段と一定ではない（図５）。
由来・来歴：1952年、田中俊雄・玲子両氏より寄贈された「沖縄織物裂地集」の78枚の１片。昭和14年頃収集。



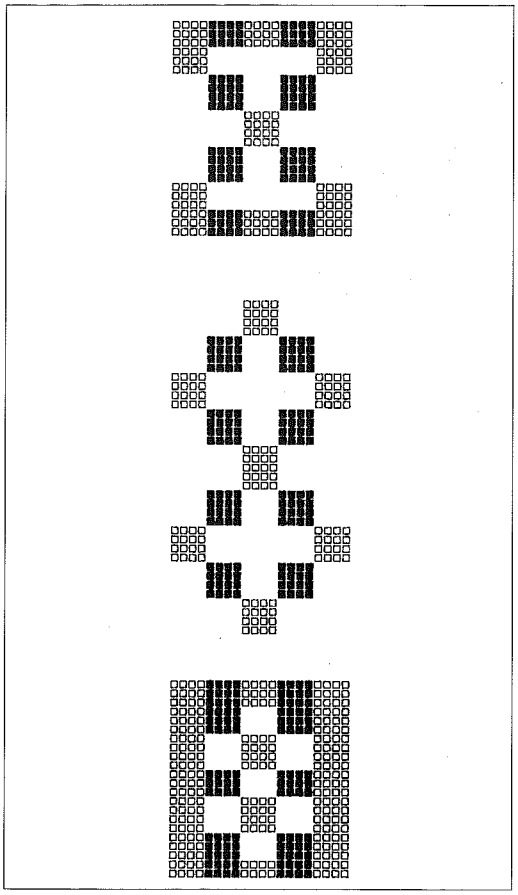
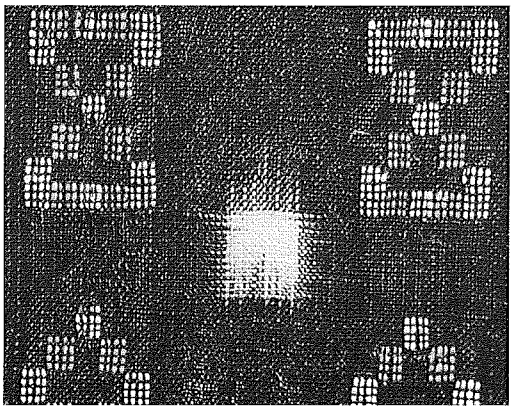
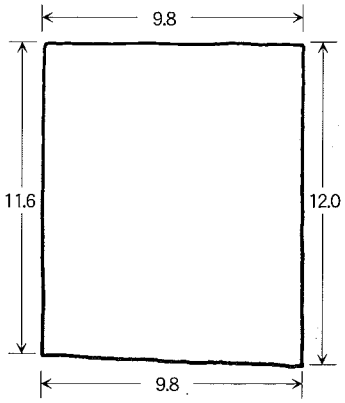
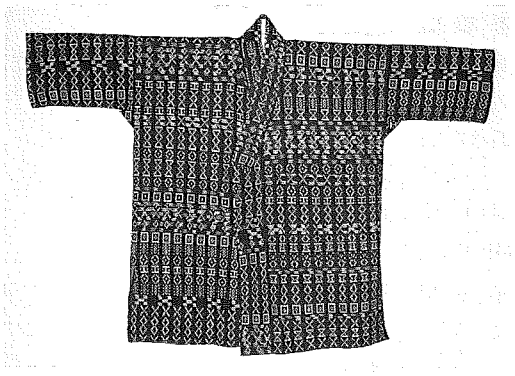


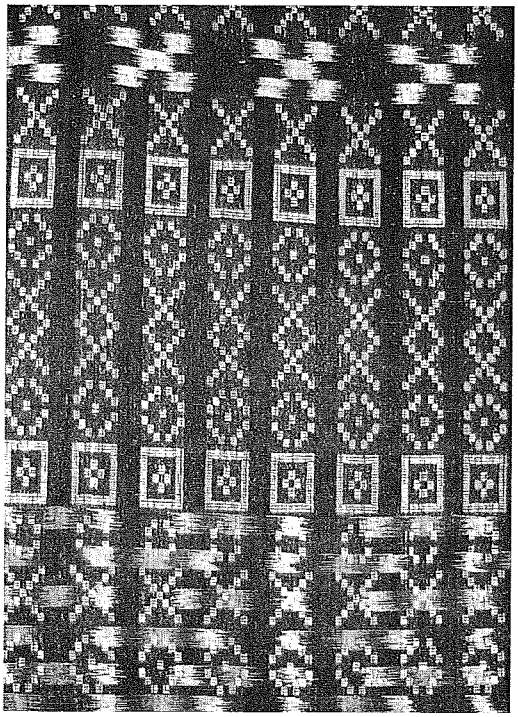
図５　浮模様のパターン

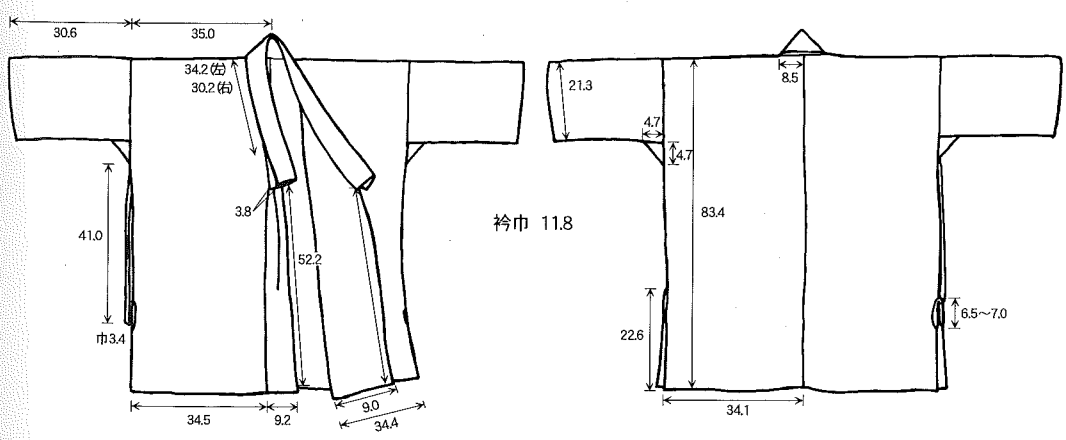




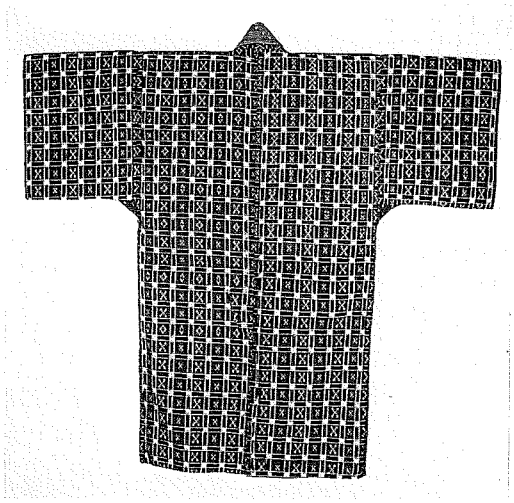
資 料 No.：2
資料名称：読谷山花織胴衣
台帳番号：1452
素　　材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）
　　浮糸（木綿単糸２本取り）
織の技法：経浮花織・緯絣
織の密度：経28本／cm・緯18本／cm
染　　色：地（経緯：濃紺→琉球藍）
　　浮（経：白・赤→？・顔料で手差し）
　　絣（緯：白・赤→顔料で手差し）
資料の特徴：裏なし。脇の紐は平絹。浮糸の色褪した部分と白絣の一部に朱の顔料で手差し。
由来・来歴：昭和30年受け入れ。宮里栄輝コレクション。夫人の宮里初子氏（旧姓石川）が戦前、知花で教員をしており、その際にティサジを収集している。この資料も当時、収集された可能性がある。

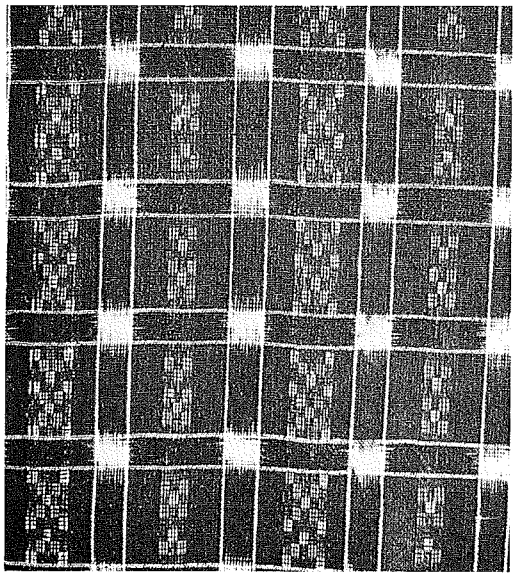


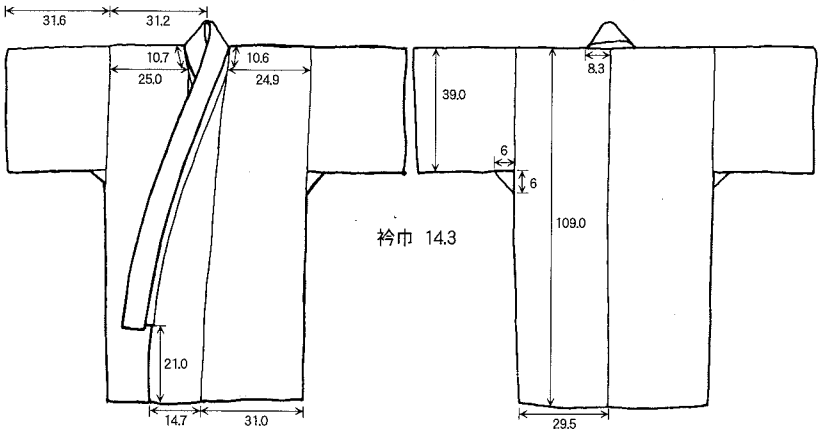




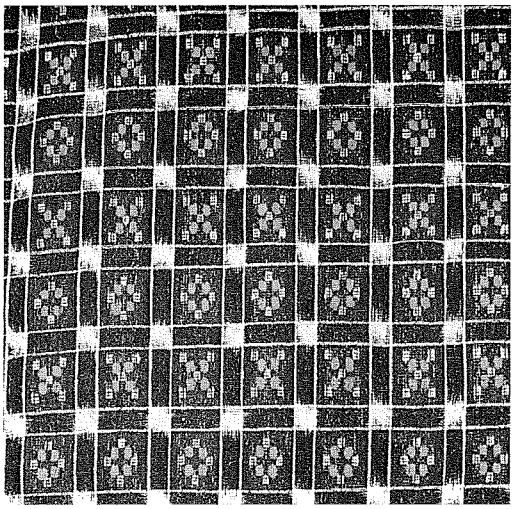
資 料 No.：3
資 料 名：読谷山花織着物
台帳番号：1584
素　　材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）
　　浮糸（木綿単糸２本取り）
織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絣
織の密度：経20本／cm・緯15～16本／cm
染　　色：地（経緯：濃紺→琉球藍）
　　浮（経：白・赤→？）
　　絣（経緯：白）
　　格子縞（経緯：白）
資料の特徴：裏は木綿浅地小紋紅型。紅型の花模様と浮糸の朱の色の部分全体に顔料の朱が薄目に差されている。
由来・来歴：昭和30年11月20日受け入れ・文化財キャラバンで京都より収集した資料の一部。西村仙之助コレクション

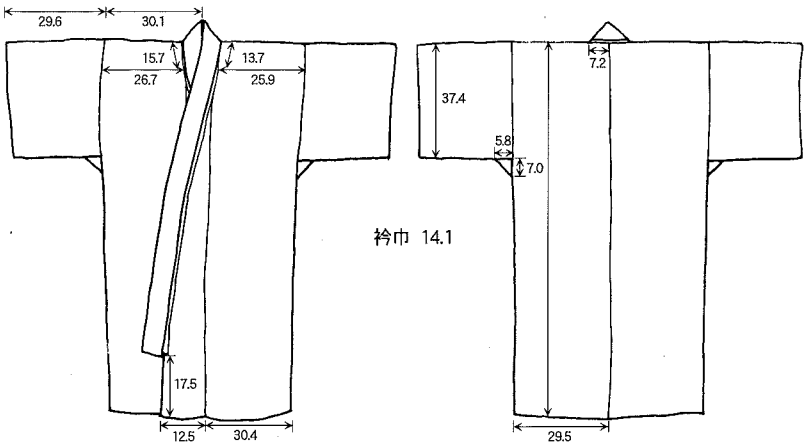




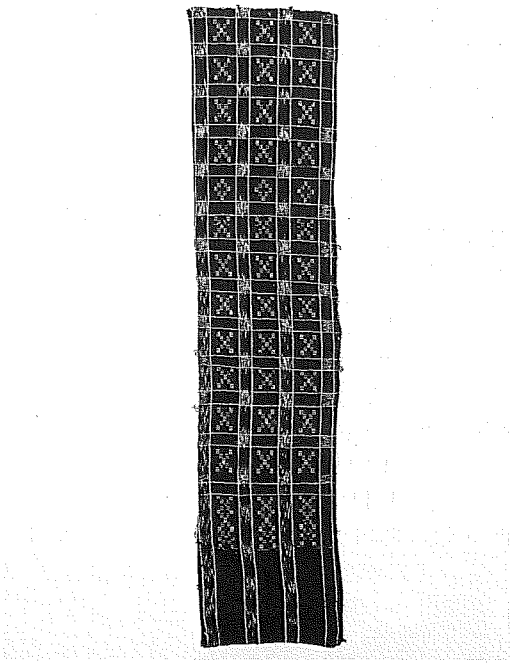


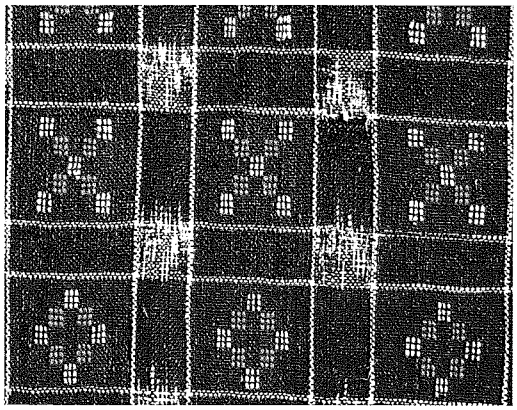
資 料 No.：4
資 料 名：読谷山花織着物
台帳番号：1589
素　　材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）
　　浮糸（木綿単糸２本取り）
織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絣
織の密度：経20本／cm・緯15本／cm
染　　色：地（経緯：濃紺→琉球藍）
　　浮（経：白・赤→？）
　　絣（経緯：白）
　　格子縞（経緯：白）
資料の特徴：裏は木綿浅地紅型。紅型の花模様と浮糸の朱の色の部分全体に顔料の朱が濃い目に差されている。
由来・来歴：昭和30年11月20日受け入れ・文化財キャラバンで京都より収集した資料の一部。西村仙之助コレクション

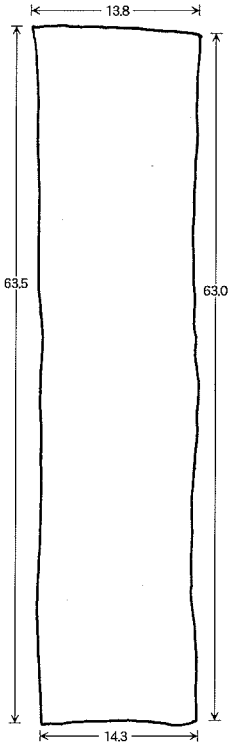




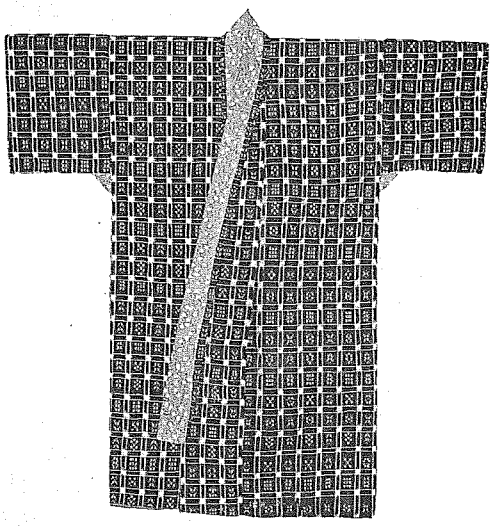
資 料 №：5
資 料 名：織物裂②　読谷山花織
台帳番号：7104
素　　材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）
　　浮糸（白：木綿単糸２本取り／赤：木綿双糸２本取り）
織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絣
織の密度：経19～20本／cm・緯14本／cm
染　　色：地（経緯：濃紺→琉球藍）
　　浮（経：白・赤→？）
　　絣（経緯：白）
　　格子縞（経緯：白）
資料の特徴：布は両脇が裏に７～６返されおり、縫い糸と思われる青い木綿糸がみられる。衿等の部分と思われる。緯絣は手結いのずらしの絣（ミミグワーユイ）である。
由来・来歴：1981年受け入れ。横浜国立大学教授の鹿間氏の収集品。

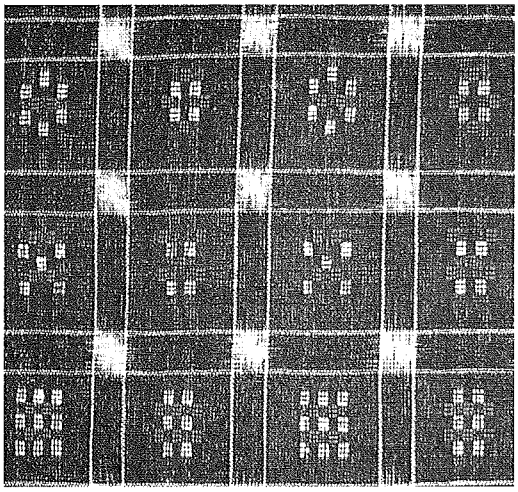


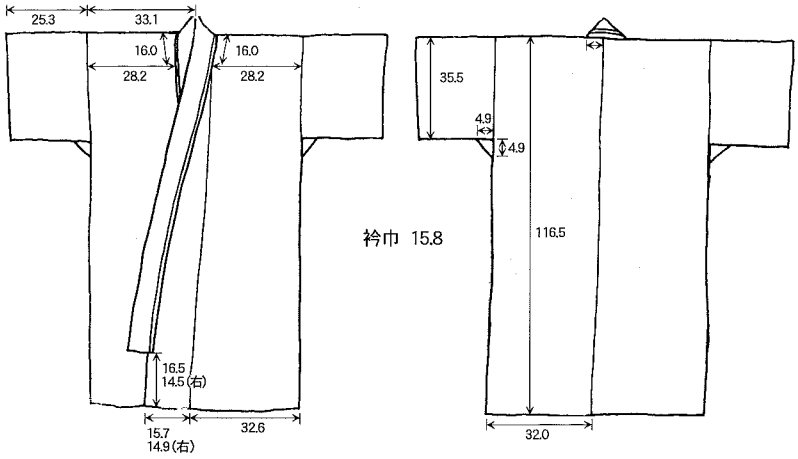




資 料 №：6
資 料 名：木綿紺地格子に絣経浮花織着物
台帳番号：15379
素　　材：地（経：木綿単糸／緯：木綿単糸）
浮糸（木綿単糸２本取り／３本取りに見える部分もある）
織の技法：経浮花織・格子縞・経緯絣
織の密度：経20本／cm・緯14～16本／cm
染　　色：地（経緯：濃紺→琉球藍）
浮（経：白・赤→？）
絣（経緯：白）
格子縞（経緯：白）
資料の特徴：ウスデークジンと呼ばれ、祭り衣裳であった（平田ハル氏談）。格子と経緯絣に経浮花織のパターンはいくつか類似の例がある。裏は緑地小紋紅型。
由来・来歴：1996年３月受け入れ。平田カマド（沖縄市登川／明治21年～昭和55年）が18歳の時（1906年）に織り、仕立て、ウスデークで使用したもの。







註１）沖縄本島中部では、明治末期、1900年を境とした辺りから花織は織られていない。資料６が1906年に製作されており、それ以後はっきりした記録はない。読谷村の花織については、昭和39年頃から復興された。奄美地方の花織は、昭和62年に鹿児島県大島紬技術指導センターが試験的に花織・浮織に着手しており、1990年には安田謙志氏が復元と創作を行っている。
（参考資料：P3-4『読谷ブックレット３　輝く読谷山花織　その復興に情熱を傾けた二人』読谷村役場　1997／P44-49「奄美花織の復元と創作」『染織α112』1990.7）

註２）「読谷山花織について」『読谷山花織展』沖縄県立博物館　昭和54年
P63　辻合喜代太郎・橋本千榮子「知花花織胴衣」『琉球服装の研究』関西衣生活研究会　平成３年
P2、P24-81『読谷村立歴史民俗資料館開館20周年記念　企画展読谷山花織展』読谷村立歴史民俗資料館　1995年
P3-4　柳悦州「沖縄とラオスの織物」『民藝　第五百二十四号』日本民藝協会　1996年
P18　柳悦州「沖縄の紋織物」『沖縄県史料調査シリーズ第１集・沖縄県文化財調査報告書第126集　沖縄の染織（Ｉ）染織品編』沖縄県教育委員会　1997年
幸喜『旧美里村における経浮花織技法の調査・研究および復元』1998年

註３）「知花花織」は、知花地域を中心として行われていた経浮花織、縫取花織などの織物を含めた総称である。2000年８月に沖縄市経済文化部商工労政課によって知花花織復元作業所（沖縄市知花）が開設される。

註４）P45　幸喜『旧美里村における経浮花織技法の調査・研究および復元』1998年
P292-P294／P320-321／P414／P468-469　『沖縄市史』第七巻　資料編６・上

註５）P416-417　『沖縄市史』第七巻　資料編６・上

註６）Ｐ47　幸喜『旧美里村における経浮花織技法の調査・研究および復元』1998年

註７）平田ハル氏（沖縄市登川在／大正15年生）談（平成13年10月21日調査）

註８）P415　『沖縄市史』第七巻　資料編６・上
P175,543『沖縄市史』第八巻　資料編７・上

註９）P78　田中『沖縄織物の研究＝別冊』紫紅社　昭和51年

註10）P21,25,『工業指導所20のあゆみ　染織技術支援編』沖縄県工芸指導所　平成８年

註11）與那嶺貞氏談（昭和54年１月27日）
経浮花織の織り方について筆者（與那嶺）が尋ねたところ『経糸の仕掛は二重ちぎりではないかと思う』との返答があった。

註12）P61『技と美　大城志津子図案集』沖縄県立博物館　1991
大城慧子氏談「機仕掛けは、地糸用のちぎりとは別に、八重山上布の短高機の経絣用のアヤツブルを浮糸用のちぎりとして使い、高機の上に設置した」（平13年２月）

註13）Ｐ111　田中俊雄「手巾について」『工藝　113号』日本民藝協會　昭和18年

沖縄県立博物館紀要　第27号　45－50，2001

沖縄島中南部の市街地で繁殖したツミ *Accipiter gularis* とリュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* の2種について

嵩原建二
（沖縄県立博物館）

Notes on two breeding birds, *Accipiter gularis* and *Pericrocotus divaricatus tegimae,* on urban area in the Southern and Central part of Okinawa I., The Ryukyus.

Kenji TAKEHARA
(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

本州では本来自然環境の豊かな場所に生息するようなハシブトガラス*Corvus macrorhynchos*、オオタカ *Accipiter gontilis*、チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*、ハクセキレイ *Motacilla alba*、コゲラ *Dendrocopos kizuki*、カワセミ *Alcedo atthis* などの野鳥が市街地に適応し、大都市の市街地で「都市鳥化」していることが知られている（唐沢，1987. 川内，1997. バーダー編集部、1999など）。さらに川内（1997）は,1981年に埼玉県上尾市で、野口（1988）は東京都町田市で、土橋（1994）は東京都板橋区と、それぞれ市街地におけるツミ *Accipiter gularis* の繁殖例を報告している。

沖縄県内においては、唐沢（1992）によって、1990年に実施された全国41都市の都市鳥の繁殖状況の中で、沖縄島南部の那覇市と八重山諸島石垣島の石垣市の市街地で合計20種（帰化種２種含む）の都市鳥が報告されており、その中にツミも記録されている。

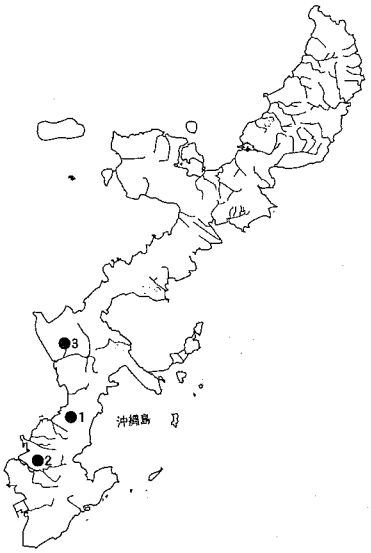
しかしながら、県内の市街地で営巣する鳥類の詳細な繁殖生態や行動についての調査報告は少なく、喜納（1993）や嶺井（1994）のイソヒヨドリ*Monticola solitarius philippensis*の例、金城（1993）や金城・瑞慶山（1996）によるシロガシラ*Pycnonotus sinensis*の例、嵩原・渡久地（1996）によるツミとイソヒヨドリの繁殖例などが知られているにすぎない。

筆者は県内におけるツミの都市鳥化を追認する観察記録と、これまでに報告されていないリュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae*の市街地における繁殖活動等に若干の知見が得られたので報告する。

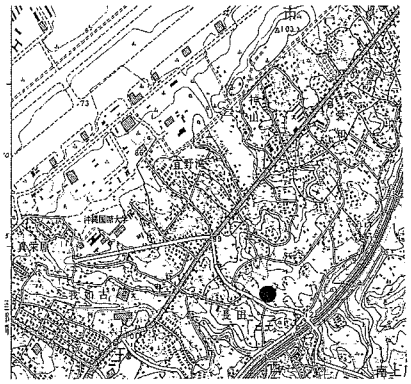
なお、県内では八重山諸島の石垣島、西表島に留鳥として生息するリュウキュウツミ*A. g. iwasakii*（三島 1962）と、沖縄島に留鳥として生息し、冬季には冬鳥としてその他の地域に飛来するとされるツミ *A. g. gularis* の２亜種が生息するとされる（日本鳥学会　2000）。したがって、本地域に生息する亜種については、日本鳥学会（2000）に従い、亜種ツミ *A. g. gularis* として扱った。

本調査の報告にあたり、営巣情報の入手に協力いただいた沖縄タイムス社の磯野直氏、傷病鳥保護に関して有益な助言を得た沖縄こどもの国（動物園）金城輝雄獣医師、文献の入手と本報告のまとめに有益な助言をいただいた沖縄大学教授の中村和雄博士、鳥類研究家の梶田学氏、調査に協力していただいた沖縄県立博物館職員（非常勤）の城間恒宏氏に感謝申し上げる。

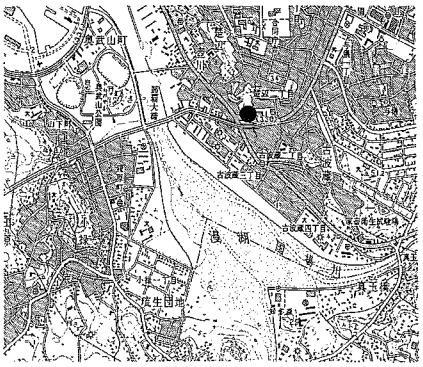
図１．ツミ及びリュウキュウサンショウクイの営巣地（●印）



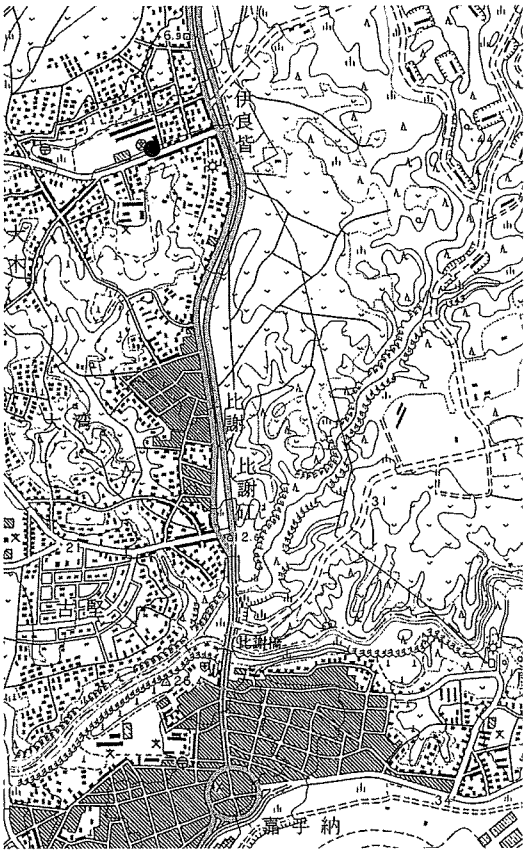
①ツミの営巣地（１）（宜野湾市長田）



②ツミの営巣地（２）（那覇市楚辺）



③リュウキュウサンショウクイの営巣地（読谷村伊良皆）



（国土地理院発行25000分の１の地形図改変）

調査地概要及び調査方法

主たる調査地の範囲は図１に示したように、沖縄島南部の那覇市、中部の宜野湾市と読谷村の市街地である。調査は営巣状況の直接観察と、営巣木の特定、直径巻き尺による胸高直径の計測や測高管による樹高や巣高などの計測を行った。なお、詳細な営巣地及び営巣環境、調査方法等については、各鳥類によって異なるので、以下にツミ及びリュウキュウサンンショウクイと鳥類別に分けて、調査概要や営巣状況としてまとめて示した。

１．ツミの営巣地及び調査概要

（１）宜野湾市内におけるツミの繁殖

本地域では2000年５月27日の夕刻5:30頃、市内長田地区の県道沿いの電線にとまる成鳥（雌）を確認し、その周辺地域での営巣の可能性が考えられたため、隣接する街路樹や屋敷林を探索した結果、造巣を確認した（図１－①）。

営巣箇所は県道32線沿いに植栽された街路樹上で、樹種はホルトノキであった。そのホルトノキは樹高が5.6m、胸高直径21cmで、巣は高さ5.15mの位置にあった（写真１，２）。

写真１，ツミの営巣地環境（１）
（宜野湾市長田）

写真２，ツミの営巣場所（２）
（宜野湾市長田）

（２）那覇市内におけるツミの繁殖

ツミの営巣が確認された場所は、那覇市楚辺２丁目に所在する沖縄県経済連農協会館（通称農協会館）前の緑地である（図１－②）。営巣が確認された期日は、2000年６月20日で、営巣地近くに居住する読者より、地元新聞社への取材依頼があった。しかしながら、翌日行ってみるとすでに巣立ち後であったという（磯野直氏私信）。

営巣木は国道330号線と国道329号線が交叉し、県道221号線が高架道として立体交差する小波蔵交差点西側に所在していた。その営巣木は、胸高直径63cm、樹高10.4mのデイゴで、地上から高さ8.7mの太い枝先に営巣が見られた（写真３，４）。

同営巣地周辺の環境は、国道と県道に挟まれるようにアカギ、モモタマナ、ガジュマル、

デイゴ、ホウオウボク、フクギ、ホルトノキ、ビロウなど26種の樹木が人為的に植栽された緑地帯となっている。

筆者は６月22日から同所で観察した結果、巣立ち間もない亜成鳥４個体が確認された。亜成鳥４個体は、それぞれ分散して木立にとまり、親鳥からの給餌を待っている様子であった（写真５）が、その内１個体は14時20分頃に親鳥の運んだスズメを採食した（写真６）。また、別の亜成鳥１個体は自力で林内に生息していたリュウキュウアブラゼミを捕食した。

ツミの営巣調査は、同会館周辺において2000年６月22日から2000年７月12日までの期間に、延べ５回にわたって調査を実施したが、７月12日以降亜成鳥の姿を確認できず、営巣地より分散したものと思われたことから、その後の調査は行っていない。

なお、本地域では本種の他に、シロガシラ、ヒヨドリ*Hypsipetes amaurotis pryeri*、メジロ*Zosterops japonicus loochooensis*の３種の留鳥が観察された。

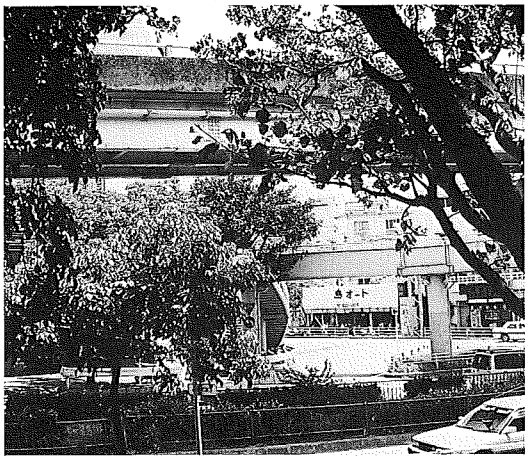


写真３，ツミの営巣地環境（３）
（那覇市楚辺）

写真４，ツミの営巣場所（４）
（那覇市楚辺）

写真５，ツミの亜成鳥
（那覇市楚辺）

写真６，スズメの採食
（那覇市楚辺）

2．リュウキュウサンショウクイの営巣環境と調査概要

本種の営巣を確認したのは、2000年５月２日の夕刻で、図１に示したように、沖縄島中部の読谷村伊良皆であった（図１－③）。その後営巣環境、営巣木の概要（樹高、胸高直径など）等について調査を実施した。また、育雛中の巣については、直接観察を行い、雛の数や育雛活動等を記録した。

営巣場所は同村伊良皆にある県立高校正門の真上で（写真７）、正門脇に植栽された樹高10.20m、胸高直径71.5cmのホウオウボクに、地上から5.4mの高さに営巣が確認された。同正門前の道路は県道６号線で、交通量の多い場所である。また、校門周辺にはモクマオウやガジュマルの大木のほか、街路樹としてホルトノキが植栽されている環境であった。

営巣が確認された時点で、巣内には雛３個体が確認された（写真８）。その後５月４日の早朝７時に観察すると、雛はまだ巣内におり３個体が確認された。しかし、その日の夕刻17時頃に再び巣内を観察すると、雛は確認できず巣立ったものと思われた。

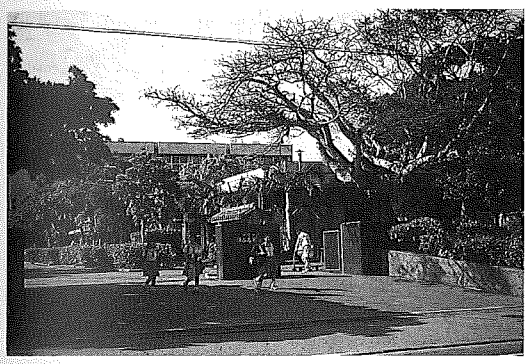


写真７　リュウキュウサンショウクイの営巣場所

写真８　巣内の雛

調査結果と考察

1．ツミの市街地における繁殖

沖縄県内では嵩原・渡久地（1997）によって、那覇市や浦添市などの人口の密集する市街地で本種が繁殖することが知られている。したがって、今回の営巣確認はこの状況を追認する例であろう。

今回営巣地となった場所は、市街地における道路整備に伴う付帯的で人工的に創出された緑地帯であった。その緑地には成鳥や巣立ち間もない亜成鳥の他に、留鳥として生息するメジロやヒヨドリの２種の採餌行動が確認され、同所的な場所利用が認められた。また、人家近くに生息するスズメ*Passer montanus saturatus*が親鳥により捕獲され餌として運ばれていた。また、アブラゼミも捕食された。したがって、本種はこれらの市街地に生息する留鳥や昆虫などの小動物を餌資源として、市街地に適応し繁殖活動を行っているものと思われた。

2．リュウキュウサンンショウクイの市街地における繁殖

本種は本来森林地域を主たる生息地としている種であり、森林の多い沖縄島北部の国頭地域では日常的に見られる。しかしながら、本種の市街地における繁殖確認例は、これまでに知られていないものと思われる。

今回確認された本種の営巣した場所は、森林地域から大きくはずれた県立学校敷地内にあり、車の行き交う交通量の多い県道に面している市街地であった。しかも、営巣地が生徒の登下校の際に利用される校門の真上で、人の出入りが頻繁に行われる場所でもある。このことから、本種が人に警戒することなく、都市鳥化してきている傾向が認められる。

なお、本種については沖縄島南部の那覇市首里大中町に所在する沖縄県立博物館の構内でも繁殖時期の2000年夏季に番で確認しており（嵩原未発表)、県立博物館周辺でも繁殖している可能性がある。また、沖縄島南部の西原町においても、本種の巣立ち間もない亜成鳥が傷病鳥として保護され（金城輝男　私信)、その後死亡している。

したがって、豊かな森林環境を有する沖縄島北部地域から、さらに中南部の市街地化した緑地面積の少ない地域にまで生息分布を広げてきているものと思われる。

＜引用文献＞

バーダー編集部　1999. 都市で暮らす鳥. バーダー10月号.

土橋信夫　1994. 東京都板橋区でのツミの繁殖. 都市鳥研究会会誌11（1）13-18.

唐沢孝一　1987. マン・ウオッチングする都会の野鳥たち，草思社.

唐沢孝一　1992. 全国４１都市の都市鳥の繁殖状況のまとめ. 都市鳥研究会会誌. 9（2）84-97.

川内博　1997.大都会を生きる野鳥たち. 地人書館. 245pp.

喜納幹雄　1995. イソヒヨドリの繁殖行動及びヒナ分けについて.琉球大学理学部修士論文. 53pp.

金城常雄　1993. 沖縄本島南部に侵入したシロガシラ*Pycnonotus sinensis* の分布域の拡大と生態的特性.九病虫研報39:119-123.

金城常雄・瑞慶山浩　1996.沖縄本島に侵入したシロガシラ.鳥獣害とその対策、植物防疫特別増刊号（No.2）.日本植物防疫協会.

三島冬嗣　1962. 南部琉球諸島のツミ(新亜種)とクロアジサシの亜種名について. Tori 17(79／80)：219-221.

野口淳平　1988. 町田市住宅地でのツミの繁殖. 都市鳥研究会会誌５（2）35-36.

嶺井千夏　1994. イソヒヨドリの子育て行動. 琉球大学理学部卒業研究. 28pp.

嵩原建二・渡久地政武　1997.沖縄島南部の市街地で繁殖する鳥類. 沖縄県立博物館紀要第23号　33-54.

日本鳥学会　2000.日本鳥目録改訂第６版. 日本鳥学会. 345pp.

沖縄県立博物館紀要　第27号　51－75，2001

南大東島産鳥類目録

姉崎　悟・嵩原建二
（沖縄生物学会・沖縄県立博物館）

Checklist of Birds recorded in South Borodino Island

Satoru Anezaki・Kenji Takehara
(The Biological Socity of Okinawa・Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

大東諸島は沖縄島から東へ約400kmの洋上に位置し、北大東島，南大東島および沖大東島の３島からなる（図１）。いずれも隆起環礁に由来する海洋島であり、このうち南大東島は大東諸島最大の島で、かつては原生林におおわれた無人島であったが、1900年以降の開拓によって、現在は人口1,500人以上の住民が居住するサトウキビ畑に広くおおわれた島となっている。

南大東島の鳥類記録は1922年９月が最初であり（Kuroda 1923・1925)、以来多くの研究者や観察者によって鳥類記録が追加されてきた。昨年発行された日本鳥類目録改訂第６版（日本鳥学会 2000．以下、目録第６版と略す）では、124種が南大東島に分布し（島名を示さず「大東諸島」と表記されたものも含む)、うち８種について大東諸島固有亜種が認められ、他に12種が南大東島で繁殖する（あるいはしていた）とされている。しかし、これらの分布情報には根拠が示されておらず、また、過去に文献で報告されていながら目録第６版で採用されていない情報も多く存在している。そこで、筆者らは文献調査，山階鳥類研究所における標本調査、および現地調査を行ない、得られた記録を観察年度や時期ごとにまとめ直し、南大東島産鳥類目録の作成を試みた。

本報告を行なうにあたり、貴重な鳥類記録の提供をいただいた南大東村役場の金川雅之氏、船浮中学の奥土晴夫氏、文献調査および標本調査で多大な協力を頂いた山階鳥類研究所の平岡考氏に厚く御礼申し上げます。

（１）調査地および調査方法

１）調査地概要と調査方法

南大東島（25°55′N，131°14′E）は、面積30.57km^2，周囲21.2km，最高点75mで、海岸線は高さ10～20mの絶壁に取り囲まれており、盆地状の中央部には40以上もの池沼が点在している。かつては原生林におおわれていたが、1900年以降の開拓により、現在は島

面積の約60％が農耕地で、その大半がサトウキビ畑となっている。

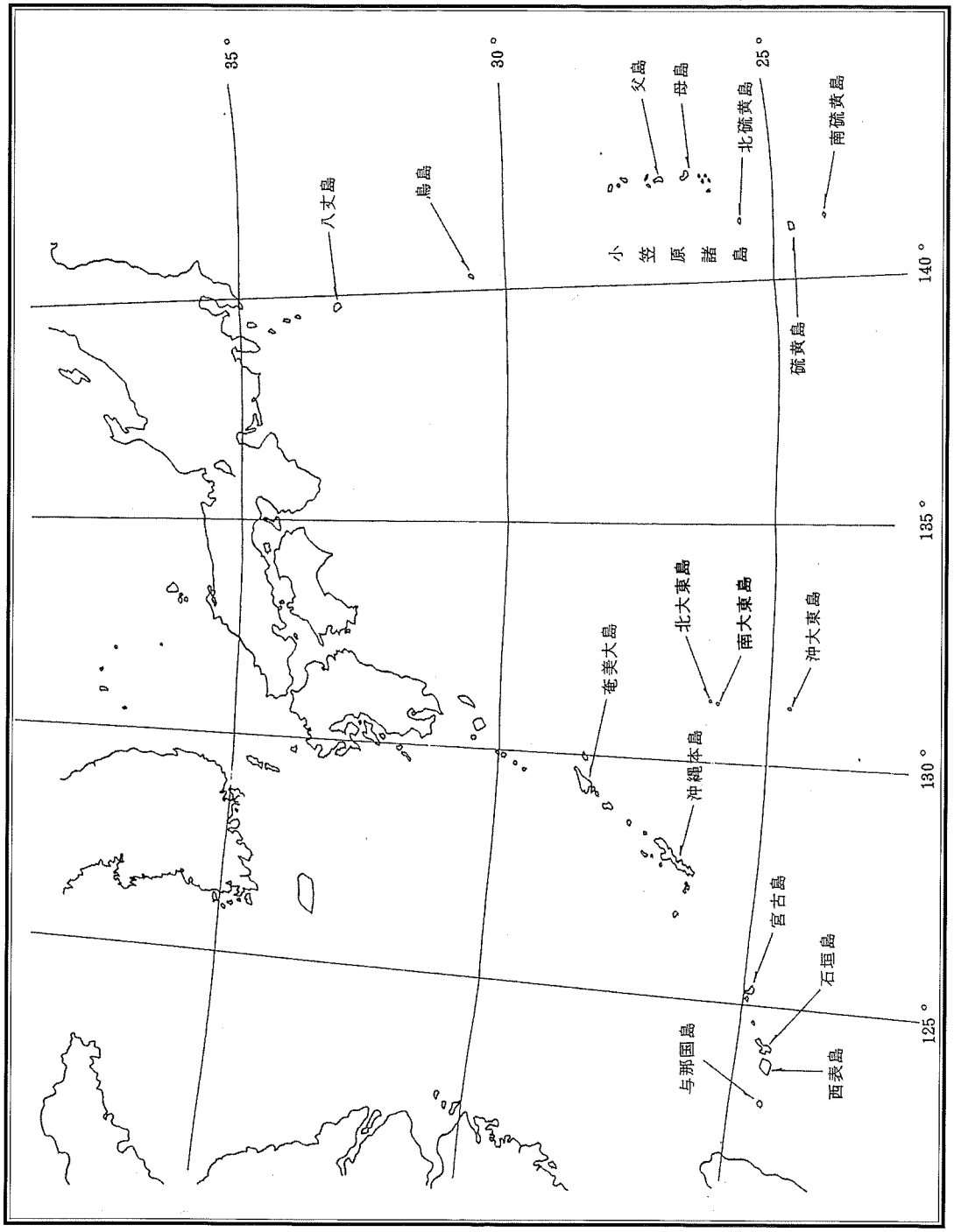


図１．南大東島の位置（文化庁、1973を改変）

目録作成にあたり、文献調査，標本調査および現地調査を行ない、できる限り多くの情報を収集した。文献調査は、学術論文以外の文献も対象とし、最終的に末尾リストに示す計45件から情報を得た。ただし、ほかの文献や標本記録と比較して、明らかに誤記と思われる記録は除外した。標本調査は、戦前に記録がある種を中心に調査し、文献調査では得られなかった記録のみ記した。

現地調査は、1995年３月12～17日，1997年４月19～22日（以上姉崎），1999年６月３～４日，６月27日～29日，７月14～16日，2000年１月10～12日，３月８～9日，５月15～17日，９月25～27日，2001年２月24日～25日（以上嵩原）の各時期に島に滞在し、任意に観察した鳥類を記録した。姉崎の観察記録の一部は、嵩原他（1999）にて発表しているため、今回は未発表分のみを現地調査結果として示した。また、ふるさと文化センターにおいて標本記録も収集した。

得られた記録を目録第６版の分類にしたがってリスト化し、記録時期を各種ごとに「●」で表（目録）に整理した。その他の特記事項は備考欄に示した。また、現地調査の結果は「■」および「PS」（Present Survey）で示した。同じ調査による記録が複数の文献に記されている場合は、最も詳細に記述されていると思われた文献のみ示した。国内で複数の亜種が確認されている種は、備考欄に南大東島で確認された亜種と、それを最初に同定したと思われる文献を示した。ただし根拠が不十分と思われる場合は無視した。標本ないし野外観察によって繁殖の証拠（巣・卵・ヒナなど）が得られている、あるいは留鳥と思われる種で幼鳥が確認されている場合は備考欄にその旨記した。なお、環境庁（現・環境省）が1998年に発表したレッドリストに基づき、該当する稀少(亜)種にEX（絶滅），CR（絶滅危惧IA類），EN（絶滅危惧IB類），VU（絶滅危惧II類），NT（準絶滅危惧），DD（情報不足）の各記号を、また、沖縄県環境保健部自然保護課（1996）に基づき、該当する稀少(亜)種に絶滅，(絶滅)危惧，危急，希少の各記号を付した。

２）目録対象外の種について

Greenway（1958）は、1919年までアホウドリ *Diomedea albatrus* が生息していたと記しているが、これは引用ミスによる誤記で、正しくは北大東島である（山成 1935）。黒田（1935）によれば1933～1934年にキジ *Phasianus colchicus* が移入されたようであるが、その後記録がなく、定着していたかどうかは不明である。大沢・大沢（1997）はアマツバメ *Apus pacificus* の記録を示しているが、これは姉崎が同定不十分のまま報告したものであり、大沢・大沢（1998）では削除された。目録第６版はハジロミズナギドリ *Pterodroma solandri* が分布すると示しているが、この記録（黒田 1932）は中村（1979）による再検討でカワリシロハラミズナギドリ *P. neglecta* に変更された。また、目録第６

版は「大東諸島」にベニバト *Streptopelia tranquebarica* とミヤマホオジロ *Emberiza elegans* が分布すると示しているが、今回の調査で南大東島からの記録はみつからなかった。以上から、上記6種は対象から外した。奥土（2000）はドバト *Columba livia var. domestica* の写真を示しており、こうした外来種の記録も重要だと思われるが、本目録では除外した。

（2）調査の結果

1）確認された鳥類

全調査の結果、172種の記録を得た（記録時期不明の9種を含む）。目録中で＊印を付した種は、目録第6版で分布が示されていない種である。このうちオグロシギ *Limosa limosa*, ホトトギス *Cuculus poliocephalus* およびショウドウツバメ *Riparia riparia* ノビタキ *Sacicola tarquata* の4種は今回の現地調査により初記録となった。カッコウ *Cuculus canorus* は過去に大沢・大沢（1990）の報告があるが、ホトトギスの可能性も否定できないと記されていたので、これも現地調査で初めて確認されたといえる。

確認された全172種のうち、目録第6版が国内で複数の亜種を認めている種は37種であり、このうち25種について、文献調査に基づいて南大東島産の亜種を明記した。また、ダイサギ *Egretta alba*, ツメナガセキレイ *Motacilla flava* およびツグミ *Turdus naumannni* の3種は現地調査で確認した亜種を示した。アカショウビン *Halcyon coromanda* は奥土（2000）に標本写真が掲載されており、森岡（1990）に従って同定した場合、背面のマゼンタ色が認められず、腰の青白色斑の青みが強いことから亜種アカショウビン *H. c. major* と判断されるが、標本が現存しないため明記は避けた。シロチドリ *Charadrius alexandrinus*, オオソリハシシギ *Limosa lapponica*, キジバト *Streptopelia orientalis*, ヒバリ *Alauda arvensis*, トラツグミ *Zoothera dauma*, アカハラ *Turdus chrysolaus*, アオジ *Emberiza spodocephala* およびシメ *Coccothraustes coccothraustes* の8種は、文献をみる限り十分に亜種の同定が行なわれていないと思われたため、亜種の記述は避けた。このほか、標本調査においてコチドリの亜種ミナミコチドリ *Charadrius dubius dubius* と記載された標本が確認された。また、ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* の亜種をタイワンハシブトガラス *C. m. colonorum* とする文献もみられた。

繁殖については、文献調査によって9種で巣・卵・ヒナのいずれかが確認され、留鳥とされるリュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus*, リュウキュウカラスバト *Columba jauyi* およびリュウキュウコノハズク *Otus elegans* の3種についても幼鳥の記録が得られた。スズメ *Passer montanus* および、イソヒヨドリ *Monticola solitarius* は、文献調査では繁殖の証拠が得られなかったが、現地調査によって繁殖が確認された。なお、スズメは

森林でも繁殖していた。

目録第6版に繁殖（RB, FB）と示されているミサゴ *Pandion haliaetus*, シロチドリ, ヒメアマツバメ *Apus affinis*, ミソサザイ *Troglodytes troglodytes*, ウグイス *Cettia diphone* およびヤマガラ *Parus varius* の6種については繁殖の証拠が得られなかった。ただし、夏期に記録があるミサゴは繁殖している可能性が高い。ウグイスとヤマガラも、南大東村誌収録の資料によれば開拓以前の夏期に観察例があり（南大東村誌編集委員会 1990：p.912)、繁殖していた可能性が高いと思われる。しかしながら、ヤマガラは絶滅したとされ、ウグイスについては、5、6月の観察もあるが繁殖確認はできなかった。

このほかコアホウドリ *Diomedea immutabilis* とアカモズ *Lanius cristatus* についても繁殖の情報がみられたが、伝聞によるものであり、証拠は得られなかった。

なお、大東諸島の特色としては、固有亜種8種, カイツブリ *Tachybaptus ruficollis* の白色型, マガモ *Anas platyrhynchos* 雄の羽色の地域変異などが文献調査により確認された。ただし、カイツブリ、ノスリ *Buteo buteo*, リュウキュウコノハズクおよびミソサザイの固有亜種については異論もみられた。このほか、マガモ, ノスリおよびモズ *Lanius bucephalus* の3種は、大東諸島が沖縄県で唯一の繁殖地であり、南大東島は国内の繁殖南限にあたることも分かった。

2）目録第6版掲載種との比較

今回の調査で、目録第6版に示された121種のほかに51種（＊印）の記録が確認された。また、目録第6版には採用されていないコチドリの亜種ミナミコチドリ, ハシブトガラスの亜種タイワンハシブトガラスについての情報も得られた。これら新情報のなかには記録時期不明など検討を要する種も含まれているが、目録第7版で少しでも多くの記録が採用されることを期待したい。

なお、目録第6版は各種の地域ごとの分布状況を9タイプに分けて表示しているが、今回の調査結果と比較して、必ずしも一致しない種が多くみられた。例えば、メダイチドリ *Charadrius mongolus* は1923年5月の記録を確認したのみであるが、目録第6版では Winter Visitor と示されている。また、ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* とコサギ *Egretta garzetta* は1989年以降ほぼ毎年記録があるが、目録第6版では Irregular Visitor と示されている。シロチドリとヒメアマツバメは1～2例しか記録がないが Resident Breeder と示され、ハシブトガラスは、かつて多数が生息したことを示す論文（黒田 1926）があるにもかかわらず、Accidental Visitor とされている。このように、海洋島という注目すべき地域でありながら、その鳥類相についてはまだ十分な把握がなされていない。今後、本目録が基礎資料となり、より詳しい研究が進められることを期待したい。

引用文献

Greenway,J.C.. 1958. Extinct and Vanishing Birds of the World. American Committee for International Wild Life Protection, New York.

Kuroda,NM.. 1923. Descriptions of New Forms of Birds from the Borodino Islands. Bull. Brit. Orn. Club 43:120-123.

————. 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu-KiuIslands and the Vicinity. published by the author, Tokyo.

黒田長禮. 1926. 琉球孤島産鳥類の小採集物に就て. 鳥 5(22):79-95.

————. 1932. 大東列島より初めて知らるる鳥類. 鳥 7(33,34):261-262.

————. 1935. 大東列島の鳥類に就て. 植物及動物 3(7):129-130.

南大東村誌編集委員会(編). 1990. 南大東村誌 改訂. 南大東村役場, 沖縄.

森岡弘之. 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科学博物館専報 (23):151-166.

中村一恵. 1979. 日本近海産シロハラミズナギドリの分類と分布. 海洋と生物 1(1):24-31.

日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.

沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.

奥土晴夫. 2000. 南大東島の自然. ニライ社, 那覇.

大沢啓子・大沢夕志. 1990. 南大東島で観察された鳥類. 山階鳥類研究所研究報告 22:133-137.

大沢夕志・大沢啓子. 1997. 南大東島自然ガイドブック. ボーダーインク, 那覇.

————. 1998. 南大東島自然ガイドブック (第2刷). ボーダーインク, 那覇.

嵩原建二・姉崎悟・高木昌興・奥土晴夫・金川雅之. 1999. 南大東島で最近新たに記録された鳥類について. 沖縄県立博物館紀要 (25):75-93.

山成不二麿. 1935. 北大東島に於ける燐酸礬土鉱床 [VII] 燐鉱の分布. 東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告 (15):25-26.

文献調査の対象リスト

A1：Kuroda,NM.. 1923. Descriptions of New Forms of Birds from the Borodino Islands. Bull. Brit. Orn. Club 43:120-123.

A2：Kuroda,N. 1925. A Contribution to the Knowledge of the Avifauna of the Riu Kiu Islands and the Vicinity. published by the author, Tokyo.

A3：黒田長禮. 1926. 琉球孤島産鳥類の小採集物に就て. 鳥 5(22):79-95.

A4：石澤健夫. 1927. 本州に於けるマガモの蕃殖地に就て. 鳥 5(23):261-264.

A5：Kuroda,NM.. 1927. Descriptions of Two New Forms. Ibis 12th Ser. 3:722-723.

A6：黒田長禮. 1930. ヒメアマツバメの新渡来地. 鳥 6(29):314.

A7：————. 1932. 大東列島より初めて知らるる鳥類. 鳥 7(33,34):261-262.

A8：日本鳥学会. 1932. 改訂 日本鳥類目録. 日本鳥学会, 東京.

A9：山階芳麿. 1934. 日本の鳥類と其の生態 第1巻. 梓書房, 東京.

B1：黒田長禮. 1935. 大東列島の鳥類に就て. 植物及動物 3(7):129-130.

B2：Yamashina,Y.. 1938. A New Subspecies of *Troglodytes trogloytes* from the Borodino Islands. Tori 10(48):227-228.

B3：日本鳥学会. 1942. 日本鳥類目録 改訂3版. 日本鳥学会, 東京.

B4：清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅰ～Ⅲ. 講談社, 東京.

B5：日本鳥学会. 1958. 日本鳥類目録 改訂4版. 日本鳥学会, 東京.

B6：黒田長久. 1971. 南大東島のノスリ新亜種について. 鳥 20(89):125-129.

B7：池原貞雄. 1973. 大東島の陸産脊椎動物. 大東島天然記念物特別調査報告. pp.52-62. 文化庁, 東京.

B8：日本鳥学会. 1974. 日本鳥類目録改訂第5版. 学習研究社, 東京.

B9：日本野鳥の会. 1975. 大東諸島. 環境庁委託調査 特定鳥類等調査. pp.269-298. 環境庁, 東京.

C1：友利哲夫・新垣秀雄. 1975. 沖縄の自然 野鳥. 新星図書, 那覇.

C2：樋口広芳. 1979. 島にすむ鳥の生態. 日経サイエンス 9(8):74-88.

C3：中村一恵. 1979. 日本近海産シロハラミズナギドリの分類と分布. 海洋と生物 1(1):24-31.

C4：日本野鳥の会. 1980. 短報－野鳥情報－. 野鳥 45(8):47-48.

C5：畑正憲. 1986. 人魚の国 天然記念物の動物たち. 角川書店, 東京.

C6：沖縄野鳥研究会(編). 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会, 沖縄.

C7：佐野昌男. 1988. 信州の自然誌 スズメ 人里の野鳥. 信濃毎日新聞社, 長野.

C8：南大東村誌編集委員会(編). 1990. 南大東村誌 改訂. 南大東村役場, 沖縄.

C9：森岡弘之. 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科学博物館専報 (23):151-166.

D1：大沢啓子・大沢夕志. 1990. 南大東島で観察された鳥類. 山階鳥類研究所研究報告 22:133-137.

D2：環境庁自然保護局野生生物課(編). 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.

D3：宮城邦治・嵩原建二．1992．北大東島の鳥類と哺乳類．ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書．pp.53-62．沖縄県教育委員会，那覇．

D4：安部直哉．1993．特異な「リュウキュウコノハズク」．Birder 7(8):18-21.

D5：大沢夕志・大沢啓子．1995．オオコウモリの飛ぶ島．山と渓谷社，東京．

D6：McWhirter,D., Ikenaga,H., Iozawa,H., Shoyama,M. & Takehara,K.. 1996. A Check-list of the Birds of Okinawa Prefecture with Notes on Recent Status including Hypothetical Records. Bulletin of the Okinawa Prefectural Museum (22): 33-152.

D7：嵩原建二・久貝勝盛・大城亀信．1996．最近（1995年４月から1996年３月）沖縄県で目撃された興味深い鳥類について．沖縄県立博物館紀要（22):173-178.

D8：佐伯昌彦．1996．最近何か出てますか？－野鳥情報ネットワーク－35 沖縄県南大東島．Birder 10(10):97.

D9：Birder編集部．1997．1996年日本に舞い降りた珍鳥たち．Birder 11(6):44-49.

E1：沖縄県環境保健部自然保護課(編)．1997．特殊鳥類生息環境調査 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編．沖縄県環境保健部自然保護課，那覇．

E2：大沢啓子．1997．最近何か出てますか？－野鳥情報ネットワーク－116 沖縄県島尻郡南大東村．Birder 11(3):93.

E3：日本野鳥の会研究センター．1998．ホウロクシギの衛星追跡調査．野鳥 63(5):44.

E4：大沢夕志・大沢啓子．1997．南大東島自然ガイドブック．ボーダーインク，那覇．

E5：――――．1998．南大東島自然ガイドブック（第２刷）．ボーダーインク，那覇．

E6：茂田良光．1999．メジロ(2)－日本産と外国産の亜種の識別．Birder 13(3):46-53.

E7：嵩原建二・姉崎悟・高木昌興・奥土晴夫・金川雅之．1999．南大東島で最近新たに記録された鳥類について．沖縄県立博物館紀要（25):75-93.

E8：奥土晴夫．2000．南大東島の自然．ニライ社，那覇．

E9：高木昌興．2000．南大東島に生息するモズの羽色および形態の記載，島内の分布状況と繁殖生態．山階鳥類研究所研究報告 32(1):13-23.

南大東島産鳥類目録

カイツブリ目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
001. カイツブリ *Tachybaptus ruficollis* [希少]	1922									●	●			A2	亜種ダイトウカイツブリ *kunikyonis*（基産地）／A5
	1924										●			A3	亜種カイツブリ *poggei* に分類されたこともある／B3B4B5B7B8B9E1
	1926					●								A5	巣・卵・ヒナ確認／B9C5D1E1E7
	1928		●											B4	白色型確認／B9C5D1E1E4E7E8
	1936											●		B4	1891年9～10月に「ヘキコ」確認の記述あり／C8(p.920)
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1979			●										C5	
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		●										D5,E7	
	1996							●					●	D8,E1	
	1997	●	●	●	●									E1,E4,E7	
	1999						■	■						PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
002. ハジロカイツブリ *Podiceps nigricollis*	1998											●		E7	
003. カンムリカイツブリ *P. cristatus* *	1996												●	E7	1980年代に大東諸島で記録あり／C7

ミズナギドリ目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
004. コアホウドリ *Diomedea immutabilis* [EN]	1980				●									C4	島民によれば1900年まで繁殖／C4
005. カワリシロハラミズナギドリ *Pterodroma neglecta*	1931								●					C3	日本初記録
006. シロハラミズナギドリ *P. hypoleuca* *	1994										■			センター標本	
007. アナドリ *Bulweria bulwerii* *	1936						●							B4	
	1937							●						B4	
008. オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* *	1994					記録月不明								センター標本	
009. オナガミズナギドリ *Puffinus pacificus* *	1995					記録月不明								センター標本	

ペリカン目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
010. アカオネッタイチョウ *Phaethon rubricauda* *[EN,希少]						記録時期不明								C6	
011. カツオドリ *Sula leucogaster* [希少]	1928							●						B4	
012. カワウ *Phalacrocorax carbo*	1936											●		B4	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1990												●	D5	
	1991	●												D5	
	1996												●	E1	
	1997		●											E1	
013. ウミウ *Ph. Capillatus* *	1996												●	E7	
	2000	■		■										PS	
014. コグンカンドリ *Fregata ariel*	1931								●					A7	
コウノトリ目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
015. ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis*	1928		●											B4	亜種ヨシゴイ *sinensis*／B4
	1974					●								B9	
	1989							●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1994				●								●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996							●					●	D8,E1	
	1999						■	■						PS	
	2000	■				■				■				PS	
016. オオヨシゴイ *I. eurhythmus* [EN]	1922										●			B4	
017. リュウキュウヨシゴイ	1922									●	●			A2	秋期に幼鳥確認／A2
I. Cinnamomeus [希少]	1923										●			A2	
	1928		●											B4	
	1936										●	●		B4	
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996							●						D8	
	1997		●											E1	
	1999						■	■						PS	
	2000	■				■				■				PS	
018. ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*	1988												●	D1	
	1989					●					●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	

	1994	D5	
	1995	D5,PS	
	1997	E1	
	1999	PS	
	2000	PS	
019. ササゴイ *Butorides striatus*	1922	A2	
	1928	B4	
	1936	B4	
	1989	D1	
	1990	D5	
	1991	D5	
	1992	D5	
	1999	PS	
	2000	PS	
020. アカガシラサギ *Ardeola bacchus* *	1998	E7	
021. アマサギ *Bubulcus ibis*	1923	A2	
	1936	B4	
	1974	B9	
	1989	D1	
	1990	D5	
	1991	D5	
	1992	D5	
	1993	D5	
	1994	D5	
	1995	D5	
	1996	D8	
	1997	PS	
	1999	PS	
	2000	PS	
022. ダイサギ *Egretta alba* *	1988	D1	亜種チュウダイサギ *modesta* を確認／PS
	1989	D1	
	1990	D5	
	1991	D5	
	1992	D5	
	1993	D5	
	1994	D5	
	1995	D5,PS	
	1996	E1	
	1997	E1,PS	
	1999	PS	
	2000	PS	
023. チュウサギ *E. intermedia* [NT, 希少]	1936	B4	
	1988	D1	
	1989	D1	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996												●	E1	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■	■						PS	
	2000					■				■				PS	
024. コサギ *E. garzetta*	1989					●		●						D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■	■						PS	
	2000			■		■				■				PS	
025. カラシラサギ *E. eulophotes* * [DD]	1996									●				D9	
026. クロサギ *E. sacra* *	1991	●												E4	
027. アオサギ *Ardea cinerea*	1988												●	D1	1975年以前に大東諸島で記録あり／C1
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996												●	E1	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■							PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
028. ムラサキサギ *A. purpurea* * [危急]	1974					●								B9(標本記録)	
	1998			●										E7	
029. ヘラサギ *Platalea leucorodia* [DD]	1995												●	D7	
030. クロツラヘラサギ *P. minor*	1997												●	E7	
[CR, 希少]	1998		●	●	●									E7	
カモ目															
031. コクガン *Branta bernicla* [VU]	1998			●										E7	
032. サカツラガン Anser cygnoides * [DD]	1997	●	●											E1,E2	
033. オシドリ *Aix galericulata* [危急]	1936											●		B4	
	1999		●											E7	
034. マガモ *Anas platyrhynchos*	1922									●	●			A2	卵・ヒナ確認／A2A4

	1923	A2	自然分布を疑問視する意見あり／A4
	1928	B4	自然分布と推察／B1
	1936	山階標本	大東諸島産♂は羽色が地味な傾向にある／C2
	1972	B7	
	1988	D1	
	1989	D1	
	1990	D5	
	1991	D5	
	1992	D5	
	1993	D5	
	1994	D5	
	1995	D5,PS	
	1996	E1	
	1997	E1,PS	
	1999	PS	
	2000	PS	
035. カルガモ *A. poecilorhyncha*	1928	B4	
	1936	山階標本	
	1988	D1	
	1989	D1	
	1994	D5	
	1995	D5	
	1996	E1	
	1997	E1	
	1999	PS	
	2000	PS	
036. コガモ *A. crecca*	1928	B4	亜種コガモ *crecca*／B4
	1936	B4	
	1993	D5	
	1996	E1	
	2000	PS	
037. オカヨシガモ *A. strepera*	1993	D5	
	1996	E1	
	2000	PS	
038. ヒドリガモ *A. penelope* *	1996	E1	
	1997	E1,E4	
	2000	PS	
039. オナガガモ *A. acuta*	1936	B4	
	1988	D1	
	1994	D5	
	1995	D5	
	2000	PS	

タカ目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
040. シマアジ *A. querquedula* *	1993										●			E7	(奥土私信)
041. ハシビロガモ *A. clypeata*	1931	●												A7	
	2000	■		■										PS	
042. ホシハジロ *Aythya ferina*	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	1997		●											E1	
	2000			■										PS	
043. キンクロハジロ *A. fuligula*	1928		●											B4	
	1936											●		B4	
	1988												●	D1	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	2000	■												PS	
044. スズガモ *A. marila* *	1996												●	E7	
	1999						■							PS	
045. ミサゴ *Pandion haliaetus* [NT, 危急]	1928		●											B4	
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	1996												●	E1	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■							PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
046. トビ *Milvus migrans*	1994												●	D5	1975年以前にも記録あり／C1
	1995	●		●									●	D5,D7,E7	
	1996												●	E1	
047. オオタカ *Accipiter gentilis* * [VU]	1993				●									D5	
048. アカハラダカ *A. soloensis* *	1998									●	●			E7	
	2000									■				PS	
049. ツミ *A. gularis*	1928											●		B4	亜種ツミ *gularis*／B4
	1936											●		山階標本	
	2000	■		■										PS	
050. ハイタカ *A. nisus* [NT]	1936											●		B4	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
051. ノスリ *Buteo buteo* [ダイトウノスリ:CR, 危惧]	1964					●								B6	亜種ダイトウノスリ *oshiroi*(基産地)／B6
	1997				●									E7	巣・卵・ヒナ確認／B6

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1998	●	●											E7	模式標本は生体で、のちにカゴ抜けした／D2
	1999						■							PS	大東諸島産の本種の標本はない／D2 亜種の検討が必要／D2
052. サシバ *Butastur indicus*	1936											●		B4	
	1988												●	D1	
	1996												●	E1	
	2000			■										PS	
053. ハイイロチュウヒ *Circus cyaneus* *	1998	●												E7	
054. チュウヒ *C. spilonotus* [VU]	1936											●		B4	
	1990												●	D5	
	1991	●												D5	
055. ハヤブサ *Falco peregrinus*	1923										●			A2	亜種ハヤブサ *japonensis*／A2
[亜種ハヤブサ：VU，危急]	1989										●			D1	
	1997				●									E7	
	1998	●												E7	
056. チョウゲンボウ *F. tinnunculus*	1988												●	D1	
	1990												●	D5	
	1991	●												D5	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	1996												●	E1	
	1999						■							PS	
	2000	■		■						■				PS	
ツル目	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
057. マナヅル *Grus vipio* [VU]	1983-84冬													D6	
058. ヒクイナ *Porzana fusca*	1922									●	●			A2	亜種リュウキュウヒクイナ *phaeopyga*／A2
[リュウキュウヒクイナ：希少]	1989							●						D1	亜種ヒクイナ *erythrothorax* も大東諸島で記録あり／B8
	1996							●						D8	ヒナ確認／E4
	1999						■	■						PS	
	2000					■				■				PS	
059. バン *Gallinula chloropus*	1922									●	●			A2	ヒナ確認／B9
	1928		●											B4	
	1936									●	●	●		B4	
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	

	1996							●					●	D8,E1	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■	■						PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
060. ツルクイナ *Gallicrex cinerea* *	記録時期不明													E4	
061. オオバン *Fulica atra* [希少]	1928		●											B4	
	1988												●	D1	
	1990												●	D5	
	1991	●												D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996												●	E1	
	1997		●											E1	
	2000	■		■										PS	

チドリ目

ミヤコドリ科	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
062. ミヤコドリ *Haematopus ostralegus*	記録時期不明													B4	

チドリ科	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
063. コチドリ *Charadrius dubius*	1936											●		山階標本	1936年産のラベルには亜種ミナミコチドリ *dubius* と記載
	1989										●			D1	
	1997		●											E1	
	2000									■				PS	
064. シロチドリ *Ch. Alexandrinus* [希少]	1995												●	E7	
065. メダイチドリ *Ch. mongolus*	1923					●								A2	亜種メダイチドリ *stegmanni*／A2
066. オオメダイチドリ *Ch. leschenaultii*	1992					●								D5	
	2000					■								PS	
067. ムナグロ *Pluvialis fulva*	1922									●	●			A2	
	1928		●											B4	
	1936											●		B4	
	1988												●	D1	
	1989										●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1997				■									PS	
	2000	■				■				■				PS	
068. タゲリ *Vanellus vanellus*	1990												●	D5	1942年以前にも記録あり／B3
	1991	●												D5	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	

シギ科	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1998			●										E7	
069. キョウジョシギ *Arenaria interpres*	1923										●			A2	
	1936											●		山階標本	
	1991					●								D5	
	1992					●								D5	
070. ヨーロッパトウネン *Calidris minuta* *	1998									●				E8	(奥土私信)
071. トウネン *C. ruficollis*	1923					●								A2	
	2000					■								PS	
072. ヒバリシギ *C. subminuta*	1922										●			A2	
073. オジロトウネン *C. temminckii*	1922										●			A2	
074. アメリカウズラシギ *C. melanotos* *	1998									●				E7	
075. ウズラシギ *C. acuminata*	1922										●			A2	
	1936										●	●		B4	
076. ハマシギ *C. alpina*	1936											●		B4	
077. エリマキシギ *Philomachus pugnax* *	1998										●			E7	
078. オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* *	1998											●		E8	(奥土私信)
079. ツルシギ *Tringa erythropus*	1998			●										E7	
080. アカアシシギ *T. totanus*	1974					●								B9	
[VU, 希少]	1989							●						D1	
081. コアオアシシギ *T. stagnatilis* *	記録時期不明													E7,E8	
082. アオアシシギ *T.nebularia*	1936											●		B4	
	1988												●	D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	2000					■								PS	
083. クサシギ *T. ochropus*	2000									■				PS	1999年以前にも記録あり／E7
084. タカブシギ *T. glareola*	1928					●								B4	
	1936											●		B4	
	1972										●			B7	
	1989							●						D1	
085. メリケンキアシシギ *T. incanus*	1974					●								B9	1974年以前にも記録あり／B8
086. キアシシギ *T. brevipes*	1928					●								B4	
	1974					●								B9	
	1989					●								D1	
	1991					●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	2000					■								PS	
087. イソシギ *T. hypoleucos*	1936											●		B4	
	1974					●								B9	

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1993				●									D5	
	1997				■									PS	
	1999							■						PS	
	2000					■				■				PS	
088. ソリハシシギ *Xenus cinereus* *	1998									●				E7	
	2000					■								PS	
089. オグロシギ *Limosa limosa* *	2000					■								PS	
090. オオソリハシシギ *Limosa lapponica*	1997				●									E7	
091. ダイシャクシギ *Numenius arquata*	1988												●	D1	
	1989										●			D1	
092. ホウロクシギ	1932												●	B1	1998年の個体は沖大東島から本島を経由後吉野川河口へ北上／E3
N. madagascariensis [VU]	1998					記録月不明								E3	
093. チュウシャクシギ *N. phaeopus*	1922											●		A2	
	1989										●			D1	
094. ヤマシギ *Scolopax rusticola*	1936											●		B4	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	1997		●											E1	
	2000	■												PS	
095. タシギ *Gallinago gallinago*	1928		●											B4	
	1936										●	●		B4	
	1989					●								D1	
	1991					●								D5	
	1997				■									PS	
	2000									■				PS	
096. ハリオシギ *G. stenura*	1928		●											B4	
097. チュウジシギ *G. megala*	1922										●			A2	
098. オオジシギ *G. hardwickii* [NT]	1928		●											B4	
	1936											●		B4	
セイタカシギ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
099. セイタカシギ	1990												●	D5	亜種セイタカシギ *himantopus*／E7
Himantopus himantopus	1991	●												D5	
[亜種セイタカシギ:EN, 希少]	1998									●				E7	
	2000					■								PS	
ツバメチドリ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
100. ツバメチドリ *Glareola maldivarum*	1997				●									E7	
[VU, 危急]															
カモメ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
101. ユリカモメ *Larus ridibundus* *	1998	●									●			E5,E7	
102. セグロカモメ *L. argentatus*	1936											●		B4	
103. ウミネコ *L. crassirostris* *	1991	●												E4	

104.	ハジロクロハラアジサシ	1928					●								山階標本	
	Chlidonias leucopterus *	1996												●	E1,E2	
		1997	●												E2	
		1999						■							PS	
		2000	■												PS	
105.	クロハラアジサシ *Ch. hybridus* *	1999							■						PS	1999年以前にも記録あり／E7
		2000									■				PS	
106.	オオアジサシ *Thalasseus bergii*	1923					●								A2	卵確認／A2
	[VU, 希少]															
107.	ｾｸﾞﾛｱｼﾞｻｼ *Sterna fuscata* [希少]	記録時期不明													B1	
	ハト目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
108.	リュウキュウカラスバト	1922									●	●			A2	秋期に幼鳥確認／A2
	Columba jouyi [EX, 絶滅]	1936											●		B4	開拓初期にカラスバト類生息の記述あり／C8(p.933,948,990 etc.) 「黒鳩」の鳴き声の記述あり／C8(p.1008-1009)
109.	キジバト *Streptopelia orientalis* *	1995												●	E7	1980年代に大東諸島で記録あり／C7
110.	キンバト *Chalcophaps indica* *	記録時期不明													D3	
	[EN, 危惧]															
	カッコウ目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
111.	ジュウイチ *Cuculus fugax*	1989					●								D1	
112.	カッコウ *C. canorus*	2000					■								PS	1989年5月，10月にらしき個体の観察例あり／D1
113.	ツツドリ *C. saturatus*	1922										●			A2	
		1991					●								D5	
114.	ホトトギス *C. poliocephalus* *	2000					■								PS	1903年6月に確認したとの新聞記事あり／C8(p.1109)
	フクロウ目	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
115.	リュウキュウコノハズク	1922										●			A1	亜種ダイトウコノハズク *interpositus*(基産地)／A1
	Otus elegans	1923										●			A2	6月に幼鳥確認／山階標本
	[ダイトウコノハズク:危惧]	1937		●	●		●	●			●				B4,山階標本	亜種の独立性を疑問視する意見あり／D4
		1938				●									B4	コノハズク *Otus scops* に似た三拍子の鳴き声を確認／B9
		1972										●			B7	開拓以前・初期に「梟」生息の記述あり／C8(p.923,990)
		1974					●								B9	
		1989					●		●			●			D1	
		1990											●	●	D3,D5	
		1991	●				●								D5	
		1992					●								D5	
		1993				●									D5	
		1994												●	D5	
		1995	●		●									●	D5,D7,E7	
		1996							●						D8	
		1997				●									E7	
		1998			●										E7	
		1999						■							PS	
		2000	■		■		■								PS	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
116. アオバズク *Ninox scutulata*	1922										●			A2	亜種アオバズク *japonica*／A2
	1936											●		B4	亜種チョウセンアオバズク *macroptera* も分布／B5
	1998												●	E7	
	2000	■												PS	
ヨタカ目	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
117. ヨタカ *Caprimulgus indicus*	1928											●		B4	
	1936											●		B4	
アマツバメ目	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
118. ハリオアマツバメ *Hirundapus caudacutus*	1989					●								D1	
119. ヒメアマツバメ *Apus affinis* [希少]	1929						●							A6	日本初記録
	1999							■						PS	
ブッポウソウ目	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
120. アカショウビン *Halcyon coromanda* *	1998									●				E7	亜種アカショウビン *major* と思われる写真あり／E8
121. カワセミ *Alcedo atthis* [希少]	1924												●	A3	
	1936											●		B4	
	1990												●	D5	
	1991	●												D5	
	1996												●	E1	
	1997		●											E1	
	2000	■								■				PS	
122. ヤツガシラ *Upupa epops* [希少]	1998									●				E7	1989年以前にも記録あり／C8
スズメ目															
ヒバリ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
123. ヒバリ *Alauda arvensis* *	1998		●											E5	
ツバメ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
124. ショウドウツバメ *Riparia riparia* *	2000	■												PS	
125. ツバメ *Hirundo rustica*	1922										●			A2	亜種ツバメ *gutturalis*／A2
	1936											●		山階標本	
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1989					●					●			D1	
	1991					●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1997				■									PS	
	1999						■	■						PS	
	2000	■				■				■				PS	
126. リュウキュウツバメ *H. tahitica*	記録時期不明													B8	1980年代に大東諸島で記録あり／C7
127. イワツバメ *Delichon urbica*	1997				●									E7	
セキレイ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
128. イワミセキレイ *Dendronanthus indicus* *	1936											●		B4	
129. ツメナガセキレイ *Motacilla flava* *	1998									●				E7	亜種マミジロツメナガセキレイ *simillima* を確認／PS
	2000									■				PS	
130. キセキレイ *M. cinerea* *	1922										●			A2	
	1936											●		山階標本	
	1972										●			B7	
	1988												●	D1	
	1989										●			D1	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996												●	E1	
	1997		●											E1	
	2000	■		■										PS	
131. ハクセキレイ *M. alba*	1936											●		B4	亜種ハクセキレイ *lugens*／B4
	1990												●	D5	亜種ホオジロハクセキレイ *leucopsis* も分布／E7
	1991	●										●		D5,E7	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	1996												●	E1	
	2000	■								■				PS	
132. マミジロタヒバリ *Anthus novaeseelandiae* *	1936											●		B4	
	1998			●										E7	
133. ビンズイ *A. hodgsoni*	1936												●	B4	亜種ビンズイ *hodgsoni*／B4
134. ムネアカタヒバリ *A. cervinus* *	1936											●		B4	
サンショウクイ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
135. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* * ［亜種サンショウクイ：VU］	1989					●								D1	亜種サンショウクイ *divaricatus*／E4
	2000									■				PS	
ヒヨドリ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
136. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*	1922									●	●			A1,A2	亜種ダイトウヒヨドリ *borodinonis*（基産地）／A1
	1928		●											B4	古巣確認／B7
	1936											●		B4	開拓以前・初期の分布を示す記述あり／C8(p.912,923,933,948 etc.)
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1996							●					●	D8,E1	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■	■						PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
モズ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
137. モズ *Lanius bucephalus*	1973					●								C9	巣立ち後の幼鳥確認／C9
	1974					●								B9	繁殖確認(詳細不明)／D3
	1977				●									D3	巣・卵・ヒナ確認／E9
	1988												●	D1	次種との中間的個体を観察／B9
	1989					●		●			●			D1	現在の個体群はモズのみの特徴を持つ／E9
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996							●					●	D8,E1	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■	●						E9,PS	
	2000	●	●	■	●	●				■				E9,PS	
138. アカモズ *L. cristatus*	1929									●				A6	亜種シマアカモズ *lucionensis*／A6
	1972										●			B7	伝聞により繁殖と記述／B7
	1974					●								B9	前種との中間的個体を観察／B9
レンジャク科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
139. ヒレンジャク *Bombycilla japonica* *	1999			●										E8	(奥土私信)
ミソサザイ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
140. ミソサザイ	1938	●												山階標本	亜種ダイトウミソサザイ *orii*(基産地)／B2
Troglodytes troglodytes															標本は1体のみ／D2
[ダイトウミソサザイ:EX, 絶滅]															亜種ミソサザイ *fumigatus* が迷行した可能性あり／D6
ツグミ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
141. ノゴマ *Luscinia calliope*	1937											●		B4	
	1938				●									B4	
142. ルリビタキ *Tarsiger cyanurus* *	1996												●	E4	
143. ジョウビタキ	1990												●	D5	1980年代に大東諸島で記録あり／C7
Phoenicurus auroreus	1991	●												D5	
144. ノビタキ *Saxicola torquata* *	2001		■											PS	
145. イソヒヨドリ *Monticola solitarius*	1972										●			B7	亜種イソヒヨドリ *philippensis*／B8
	1974					●								B9	開拓初期に「鳥類には赤腹鴫最も多く」との記述あり／C8(p.990)
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996							●						D8	
	1997				■									PS	
	1999						■	■						PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
146. トラツグミ *Zoothera dauma*	1991	●												E4	
	1999		●											E7	
147. アカハラ *Turdus chrysolaus* *	1998			●										E7	
148. シロハラ *T. pallidus* *	1988												●	D1	1980年代に大東諸島で記録あり／C7
	1990												●	D5	
	1991	●												D5	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
	2000	■												PS	
149. ツグミ *T. naumanni* *	1988												●	D1	亜種ツグミ *eunomus* を確認／PS
	1991					●								D5	1980年代に大東諸島で記録あり／C7
	1993				●									D5	
	1995			■										PS	
ウグイス科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
150. ウグイス *Cettia diphone* [ダイトウウグイス:EX, 絶滅]	1922										●			A1	亜種ダイトウウグイス *restricta*(基産地)／A1
	1937		●									●	●	B4	ダイトウの標本は1922年の2体のみ、戦災焼失／D2
	1938	●	●	●										B4	開拓以前・初期の分布を示す記述あり／C8(p.912,923,933,948 etc.)
	1972										●			B7	亜種リュウキュウウグイス *riukiuensis* も分布／B5
	1988												●	D1	リュウキュウは人為分布とされる／B5
	1989										●			D1	人為分布に疑問あり／B8
	1990												●	D5	現在の個体群は亜種の検討が必要／B8
	1991	●												D5	渡りをしている可能性あり／D3
	1999						■							PS	
	2000			■		■								PS	
151. オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus*	2000					■								PS	1974年以前にも記録あり／B8
152. ムジセッカ *Phylloscopus fuscatus*	1991											●		E7	
153. キマユムシクイ *Ph. Inornatus* *	1998			●										E7	
	2000	■		■										PS	
154. メボソムシクイ *Ph. borealis*	1922										●			A2	亜種メボソムシクイ *xanthodryas* とｺﾒﾎﾞｿﾑｼｸｲ *borealis* が分布／A2
	1936											●		B4	
	1937											●	●	B4	
	1989										●			D1	
155. キクイタダキ *Regulus regulus*	1988												●	D1	
ヒタキ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
156. キビタキ *Ficedula narcissina*	1924											●		A3	亜種キビタキ narcissina／A3
	1936											●		B4	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
157. オオルリ *Cyanoptila chanomelana*	1993				●									D5	
158. サメビタキ *Muscicapa sibirica*	1936										●			山階標本	
159. エゾビタキ *M. griseisticta*	1922										●			A2	
	1989										●			D1	
	1995												●	E7	
160. コサメビタキ *M. dauurica*	1989										●			D1	
シジュウカラ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
161. ヤマガラ *Parus varius* [ダイトウヤマガラ:EX, 絶滅]	1922									●	●			A1,A2	亜種ダイトウヤマガラ *orii*(基産地)／A1 1885年8月に「山雀」生息の記述あり／C8(p.912)
メジロ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
162. メジロ *Zosterops japonicus* [ダイトウメジロ:希少]	1922									●	●			A1,A2	亜種ダイトウメジロ *daitoensis*(基産地)／A1 卵確認／A2 開拓以前・初期の分布を示す記述あり／C8(p.912,923,933,948 etc.)
	1928		●											B4	
	1936										●	●		B4	
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1979			●										C5	
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■				●						D5,E6,PS	
	1996							●						D8	
	1997		●		■							●		E1,PS,山階標本	
	1999						■	■						PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
ホオジロ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
163. アオジ *Emberiza spodocephala* *	1996												●	E4	
アトリ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
164. アトリ *Fringilla montifringilla*	1988												●	D1	
165. イカル *Eophona personata*	1994												●	E4	
166. シメ *Coccothraustes coccothraustes*	1989										●			D1	
ハタオリドリ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
167. スズメ *Passer montanus*	1922										●			A2	巣・ヒナ確認／PS 人為分布とされる／B1 自然分布と推察／C7 開拓初期には分布していなかったとの記述あり／C8(p.990)
	1936											●		B4	
	1972										●			B7	
	1974					●								B9	
	1981												●	C7	
	1982	●												C7	
	1986						●							C7	

	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文献	備考
	1988												●	D1	
	1989					●		●			●			D1	
	1990												●	D5	
	1991	●				●								D5	
	1992					●								D5	
	1993				●									D5	
	1994												●	D5	
	1995	●		■										D5,PS	
	1996							●						D8	
	1997		●		■									E1,PS	
	1999						■	■						PS	
	2000	■		■		■				■				PS	
ムクドリ科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
168. コムクドリ *Sturnus philippensis*	1922										●			A2	
	1989										●			D1	
	1991					●								D5	
	1997				■									PS	
169. ホシムクドリ *S. vulgaris*	1991											●		E7	
170. ムクドリ *S. cineraceus*	1936											●		B4	
	1994												●	D5	
	1995	●												D5	
カラス科	**年**	**1**	**2**	**3**	**4**	**5**	**6**	**7**	**8**	**9**	**10**	**11**	**12**	**文献**	**備考**
171. ミヤマガラス *Corvus frugilegus*	1932											●	●	B1	
172. ハシブトガラス *C. macrorhynchos*	1924												●	A3	亜種ハシブトガラス *japonensis*／A3 タイワンハシブトガラス *colonolum* に分類されたこともある／A8A9 タイワンハシブトガラスに最も近いと記述／B1 多かったが有害駆除で激減したとの記述あり／A3 開拓以前・初期にカラス類生息の記述あり／C8(p.912,920,933 etc.)

沖縄県立博物館紀要　第27号　77－112，2001

『ウルマ（うるま）新報』にみる 戦後の文化財保護胎動期における関係記事について

園原　謙
（沖縄県立博物館）

In relation to articles as to Okinawan cultural properties on "Uruma Shinpo" newspaper published in Ishikawa after World War II

KEN SONOHARA
(Okinawa Prefectural Museum)

1はじめに

沖縄県は、沖縄戦において住民を巻き込んでの地上戦を経験した唯一の県である。1945年４月１日から火ぶたを切った地上戦闘は、沖縄本島の北谷・読谷海岸一帯から連合軍の無血上陸によって開始された。一般的な戦闘形式において上陸戦は死相を究める戦闘であることが常である。しかしながら、この戦闘においては、日本軍守備隊は無防備の状態で上陸を許したのである。ここに沖縄戦が長期戦になったことを示唆する論拠がある。後方支援部隊をあわせて55万の米軍（連合軍）に対して日本軍は全国各地から召集された兵士が65,000人、加えて、沖縄現地で調達された満17歳から45歳の男子で組織された防衛隊約22,000人を加えても９万人足らずの戦力の下で、５倍強の戦力と立ち向かうことになった。

その結果は、米兵・日本兵に加えて住民を巻き込んだ死者の総数は、20万余にのぼることとなった。米軍においては、太平洋戦争最大規模の犠牲者は12,520人を数えた。日本兵は、65,908人の犠牲者。そして最大の犠牲は、15万人ともまた、一説によると、20万人ともいわれる一般住民の犠牲であった。

石川を中心とする本島中部では戦時中から戦後の胎動がみられる。戦後の沖縄の人々の生活は、収容所生活から始まることとなった。本島内には13の収容所ができた。北部を中心とした収容所で、北部に避難・疎開した住民の人口は爆発的に増加することになる。人々はそこでの居住することが強要されることになった。人々が自分のムラに帰郷できるのは、半年から一年の歳月を要した。1945年10月から翌年の６月にかけて移動が実現することになる。

多くの尊い人命に加え、日本とは異質の歴史と文化の中で育まれてきた王国を偲ばせる

多くの有形・無形の文化財は、その殆どが焼失、喪失してしまうことになった。無形文化財を支えた多くの人々が亡くなることになった。辛うじて生きていても多くの人々は、自失の中にいたといえよう。

本稿では、そのような状況下収容所の中で、1945年７月25日に創刊された「ウルマ新報」に着目し、同紙に掲載された文化財関係記事を取り上げてみたい。筆者は、大正期から復帰以前までの文化財保護の歴史を大きく３つのエポックがあると考えている。（注１）１つ目は文化財保護の啓蒙運動の時期（大正14～昭和13）。２つ目は終戦直後から文化財保護法制定までの時期。３つ目が保護法制定による時期である。ここでは、２つ目の公立博物館の収集活動による文化財保護の時期、すなわち米軍政府によって戦後初めて設立された博物館である「沖縄陳列館」や首里市文化部を中心として設立された首里市立郷土博物館の時代と重なる時期を取り上げる。

本稿では、琉球政府における文化財保護法が制定される終戦から1954年までを、戦後の文化財保護に関わる「胎動期」と位置づけ、ウルマ新報の記事から米軍の沖縄文化に対する関心や、戦後混乱時から復興時にかけての文化財の状況を確認してみようと思う。これらの記事は戦後まもない文化財を取り巻く状況について断片的ではあるが、当時の状況を雄弁に語る基礎的資料を提供するものと考えられるからである。

２『ウルマ（うるま）新報』について

「ウルマ新報」は、米軍政府による軍政の円滑な実施を図るため日本語の「広報紙」の必要から刊行されたものである。したがって、当然米軍によって言論統制された新聞であることを前提として読まなくてはならない。このことは記事として掲載されることが、米国軍政の編集方針に則した内容でなくてはならないということを意味する。

記事の内容の中心は、①戦況を伝えること、②軍政本部（米軍政府）から伝達事項、であった。『琉球新報百年史』（1993）によると、「記事はすべて、米軍の検閲うけたものしか掲載できなかった。地元提供のニュースは、一応英訳させ、チェックをして許可したものだけ掲載された」とされる。発行地は、住民の捕虜収容所の一つである美里村石川（現石川市）。新聞の体裁は、ガリ版刷り２頁、初号は新聞名がないまま、２号から「ウルマ新報」と名付けられた。また、６号からは活字印刷となる。

ウルマ新報は、1946年６月７日付けの社告で、「本紙は、５月22日付けを以て米軍政府並びに沖縄民政府の機関紙として指定されました」と記載されている。同紙は、46年５月29日に紙名の表記をカタカナの「ウルマ」から「うるま」に変更した。1949年８月からは、週２回の発行、そして同年11月からは日刊になる。約５年後の1951年９月10日の『琉球新報』に紙名を変更するまで「うるま新報」は866号の紙面を重ねた。

この米軍と民政府の機関紙とは、別に沖縄の人々による新聞の発行が始まった。1948年7月1日に『沖縄タイムス』のガリ版刷が週2回の発行で開始される。発行部数は、6千部。また、翌月の8月には『沖縄毎日新聞』も創刊された。

このような中で、これまで無料配布していた「うるま新報」は、財政的に脆弱化し、購読料の徴収する商業紙として体質を変更していく。48年11月19日の紙面には、うるま新報、沖縄タイムス、沖縄毎日新聞の三社による協定によって、同年12月1日より月極の購読料を10円とする旨の社説が掲載されている。

戦後の混乱の中、極度に情報が不足していた状況は容易に察しがつく。九死に一生を得た沖縄の人々にとっては、極限状況下のストレスにより重度の虚脱感に苛まれていたであろうが、それでも一番の関心事は、親、兄弟、子どもなど身内の消息であったであろう。初期のうるま新報には、「収容所からの便り」の欄で「尋ね人」が紙面の片隅を占めている。

この広報紙こそは、人々が自からの関係者の生死を確認することのできる一縷の望みであり、唯一の情報源であった。同紙がその編集者の元締めや編集方針に係わらず、島の人々が生きていく上で有益な情報を発信したことは、人々にとって大いなる希望であった。このことは、戦後発刊された新聞の先駆けとしてその種の紙面提供は、新聞の公益性を教える上で特筆される。

3『うるま新報』にみる文化財関連記事について

戦後、琉球政府による初の指定文化財が誕生したのは、1955年（昭和30）1月7日のことであった。当然ながらこの指定には根拠となる法令の整備が必要であった。琉球政府は1954年（昭和29）6月29日に文化財保護法を制定した。この法律に基づき、琉球政府初の指定文化財が特別重要文化財、重要文化財として指定されたのである。日本における文化財保護法の制定から4年後のことであった。

文化財の取り扱いについて、時の権力者米軍はどのように考えていたかを記事を通して検証してみたい。その扱い方になんらかの傾向や方針などがあるのであろうか。ここでは866号の紙面のうち、創刊以来米軍政府・沖縄民政府の情報紙として半官半民のいわば「御用紙」的立場から自立的商業紙として歩みだした1949年末までを対象にする。うるま新報の商業紙としての歩みは、1948年7月1日に創刊された『沖縄タイムス』（ガリ版刷り、週2回、6千部）や同年8月に創刊された『沖縄毎日新聞』、また1949年秋には『琉球日報』や『沖縄ヘラルド』などの創刊により独占紙として地場が揺らぎ、新聞競争が激化するようになった49年頃と考えてよい。したがって、便宜上ここでは、創刊の1945年7月から1949年末までの約4ヶ年と半年間の288号にわたる紙面を対象にして検証すること

にした。

ここで規定する「文化財」とは、有形・無形文化財、有形・無形民俗文化財、史跡・名勝、天然記念物を含む記念物で、現在の文化財保護法で規定される文化財に係わる記事を基本にする。また、軍政府や民政府政策に係わるもので、特に「文化財」という用語は用いられないが、脈絡的に文化財に係わりがあるものは含めることとした。以上の２点の選出基準に依拠し、選出した。

うるま新報については、不二出版の『縮刷版うるま新報』に収録された「うるま新報」を用いた。選出したものの号数、発行年月日、見出しは以下のとおりである。みだしの表記は、原本によらず新漢字表記及び発行年月日は算用数字を用いた。□は判読不能な箇所である。下線部は筆者による。

1　第５号　45年８月22日

仮沖縄諮詢会設立と軍政府方針に関する声明

ホ、労働（三）沖縄古来の特殊技能を継続す事業を奨励し沖縄の新生活状態に相応しき新技能を啓発する事

チ、教育（二）後日高等の教育特に職業及び工芸教育制度を設ける事

2　第26号　46年１月16日

期待さる壺屋の復興

本島唯一の陶器の製産地たる壺屋再興の為、城間邊野喜両氏は工員を伴ひ先発隊として建設工作に従事しているが、昨今相当量の資材を入手、第一　各種陶器製作を試みたところ予期以上の好成績を収め地区隊長も優秀の折紙をつけ賞賛した　今後元住民の移動完了次第民需品製作に当るべく張切っている

3　第27号 46年１月23日

沖縄教育部設立

軍政府本部係将校監督の下に沖縄人の手に依る沖縄教育部が設立された旨米国海軍々政府当局から発表された　此の教育部が今後諸学校の実際的運営、教育課程の立案、教科書編纂、学校長及教職員の任免、学校視察、教職員の配置、記録及一般教育行政細目の保管等の任に当たることになった　各地区軍政府将校は地区学校長を援助して適当な校舎を確保し、教育運営に協力し、職員生徒の保健上必要な物資の補給を世話し、日課以外の凡ての教育的事象の報告を受けることになっている　現存する校舎にして之より重要でない他の用途に充当されているものは事情の許す限り速かに再び校舎として使用し、駐屯部隊

引揚げにより軍政府に移管された円形屋根その他の家屋も、地区軍政府将校の認可を得れば校舎転用が許され、他に適当な校舎が得られなければ木造テント張仮小屋を与えられる

軍政府普通教育方針は本部発表指令に次の如く述べられている「現在の教育計画は六才より十四才までの児童に八年制初等教育を施し、学校施設が全学童収容可能の状態にまで完備せられたる際之を義務制となし、毎週六日、一日三時間を最低授業時数とし、読方算術を教授することになっている」　軍政本部に於て適当な教材の準備及徐々に課目の増加を計り、更に上級に及す準備を進めつつある　幼稚園及上級学校も設立の予定で、現在建設中のものもある

4　第29号　1946年2月6日

舞踊と米将兵

諮詢会文化部の肝入で成立した舞踊団は目下各地の米軍将校と住民を慰問巡演中である

記者はその状況を見るべく現場に赴き将兵の中に混ざって観覧をなし　口笛を鳴らし拍手を送って喜ぶ様をながめ「文化に国境なし一の名言を味わった特に歌劇バザン川のユーモアとを感得するのも全く沖縄人同様であった」　物質的に総てを失い、表面未開人の如き生活状態を余儀なくされている現在の姿をみてそれが本姿であるかの如く映られがちな時、舞踊を通じて本島の持つ文化の高さに接し寧ろ度肝を抜かれた態である　蓋し今回の催しは時宜を得たものであり稍や成功と評すべきであろう　沖縄は国際的問題を多量に含む島として国際的舞台に押し出されるに至った　政治、教育、文化総てその基底よりながめ出発すべきは論をまつまでないが、果たしてしかる意味に於て国劇的文化の紹介に遺憾なきや　否や其点記者は疑いなきを得ぬ音楽の貧困さ、□団の無組織化等は早急に補正すべき問題であろう

5　第34号　1946年5月15日

親川の獅子舞

羽地村田井良親川の獅子舞は郷土芸能として村に伝わっていた□最近文化部の招聘により石川市で上演した所好評を博した

6　第48号　1946年6月21日

糸満名物爬龍船競漕盛況　　（糸満発）

くん風そよぐ好天に恵まれて糸満名物の「海神祭り」恒例のはりう船競漕は二日午前八時半より同町海岸に於て花々しく展開　久しく中断されていた年中行事も漸く復活されたので町民の血潮は高鳴りお祭り気分をあおった、定刻前より近村からも見物人が押しかけ

護岸一帯は黒山を築いた　朝潮にゆれて数隻の舟艇が海幸を祈るかの如く気勢を挙げた、来賓に民政府から志喜屋、又吉正副知事以下多数を迎え合図のかねと共に御願はりうを皮切りに当日の代表□呼物たるくり舟転覆競争は日頃の錬磨の□を見せた、当日の戦績は次の通り

△御願はりう　一着南　二着中村　三着新島　　△水泳競技　一着大城英仁（新島）二着金城成喜（町端）三着玉城紀盛（町端）　△職域対抗競漕　一着学校、二着水産組合、三着配給所、四着町役場　△上りはりう　一着新島、二着町端、三着南

7　第54号　　1946年8月2日

沖縄演技いろいろ　五日の米独立祭を飾る

米国独立祭をかざる多彩な行事が四、五、六日の三日間に亘り中城村屋宜原演芸場に於て繰り展げられたが、そのメンバーに加えられた唐手の宮城長順、久志助恵両氏外弟子の面々、サイの喜屋武眞榮氏、棒術の神谷仁清氏、妙技の花城兼盛、宮城嗣吉両氏、角力の金城正幸氏以下各選手、柔道の照屋唯松、濱川智弘両氏外各選手一同は沖縄武道紹介の重責を握って勇躍出場、熱技妙技を演じて満場の観客を熱狂させ大いに沖縄武技の真価を発揮した　スポーツを愛好する米国人は沖縄独特の唐手、棒、サイ等にも興味を覚えたらしく演技中常に拍手と声援を送り、特に沖縄レスリングとして彼等の趣味と共通点を持つ角力及び柔道の試合には終始声援を送り熱狂ぶりを見せ、時に勝負なしの判定”レッド、レッド”の物言いが飛び出し結局審判赤勝ちの判定を下すやワツと歓声が揚がり拍手喝采のどよめきは七月の大空にこだまする　斯くして四、六の二日間に亘って演ぜられた演技は熱狂裡に終了、演舞を通じての沖縄紹介のこころみは上成績の成果を収めて幕を閉じた。
慰問に余興に時ある毎に紹介の労を執って来た沖縄芸能連盟に於ても独立節祝賀行事に参加四六両日屋宜原演芸場に三回興業を以て開演、延約五、六百の観客将兵を喜ばせたが感傷的、哀愁的メロデーにつれて織り出される古典舞踊に興味を覚える人は少く、ジヤズの国だけにテンポの早い快活なジユリ馬、谷茶前等は大受けで拍手のどよめきに場内も割れんばかりで何かそこに沖縄演芸の行き方を暗示するものがあり、兎に角独立祭に一異彩を放って盛況裡に終了した

8　第62号　　1946年9月27日

華麗なクリスマスカードで沖縄郷土色を紹介―軍政府委託で二万枚製作

米将兵に取って何より楽しいクリスマス！終戦後二度目のクリスマス迄もう間近かに迫っている、昨年は終戦後、気もそぞろにクリスマスを迎えたのであるが今度は一つ計画的に将兵を悦ばせてやろうという親心からのこれまたわれわれ沖縄人にも愉快なニュースであ

る。クレイグ副長官ぢきぢきのお肝入りで二萬枚のクリスマスカード　美しい沖縄の風土蒼空にくっきりと抜き出る棕梠に沖縄独特の草花を配したものや郷土玩具のチンチン馬小、ウツチリクブサー、今は思い出となった首里城の守禮門などを描きだしたカードで米将兵になつかしの郷土の人々へクリスマスの挨拶を送らせようというのである

初め米軍ピー、エックスではクリスマスカード三十萬枚を本国に注文する筈のところクレイグ副長官の口添えでその中二萬枚を沖縄の地方色が豊かで風雅なものを、ということになり文化部に交渉して来た所結局山田眞山、大城皓也、大嶺政寛、山本恵一、金城安太郎氏らで原画をえがいてこれを工業部の方に一事業としてひきうけさせることになったものである　なほこれはクリスマスに限らず元旦、母の日、愛の日、復活祭の際使われるカードなどにも将来は企画されるらしく一つの事業になるばかりでなく　求めて得られぬ立派な米琉親善の美しい使者ともなるのである　これに就いて文化部部員は語る　クレイグ副長官の御行為で我々の方にこの仕事を廻って来たようですが、年五回もこれに似たカード作製の機会が与えれていて沖縄の美術工芸運動、失業救済、家庭副的趣味の向上等の点から見ても□□なかなか有効です　今回の二万枚は十月末日までに仕上げねばならぬもので一日六百枚を頑張っています　用具と人が不揃いで困っているが、仕ごとは我々の描いたのを見て模写すればよいから希望者は民政府工業部宛申し込んでいただきたい

9　第66号　1946年10月25日

芸能団確立し―三劇団俳優に審査制

沖縄芸能連盟では昨年民文化部指導の芸能家の一部を糾合して軍慰問を重ねて郷土芸能紹介に努めて来たが今般新たに芸能詮衡委員会を設置し去る九月二十六日十月六日の両日に亘り沖縄芸能家に対する審査を持ち俳優声楽家の適任者を決定　十六日民政府文化部長より記の五十名の芸能音楽家に対し各々責格証明書を交付した　尚劇団を知念、石川、田井等の三地区に常設し郷土芸能の向上と民衆慰安に乗り出すことになった

梅劇団（知念）△印団長　　△伊良波尹吉、名城與助、大見謝□幸、玉城盛義、儀保哲也、花城ツル、慶世村清、比嘉□男、儀武スミ、宮城ヨシ、比嘉文子、比嘉照子、□間輝子、大嶺重□、與那嶺□信、高江洲高哉

松劇団（石川）　△島袋光ゆう、鉢嶺□次、比嘉正義、親泊□照、備瀬知源、比嘉正光、親泊源清、玉城敏彦、伊波キヨ、嘉手川初子、小波津キヨ、渡慶次秋子、板良敷朝賢、幸地亀千代、川平恵永、渡慶次賀得

竹劇団（羽地）　△平良良勝、濱本有保、上間昌成、宮城能造、新垣繁、高嶺□雄、吉本實、新垣盛松、屋宜宗勝、多嘉良カナ、新垣ヨシ子、濱本澄子、平良ヨシ子、岸本キヨ、宮平政美、小那覇太郎、な□親泊良安、我如古安子は都合に依り未記

10　第67号　1946年10月1日

嬉しや書籍一千冊　隣邦中国より寄贈　上海市教育局の厚情

”太平洋戦争終結の記念にわが琉球同胞に日文書籍一千冊を奉贈す”と最近隣邦支那から和書一千冊がとどけられたが、この贈り物は先の軍政府教育係将校ハンナ少佐の斡旋に依るもので本年一月に少佐が上海に立ち寄った際に、総ての文化施設を喪失した沖縄住民の為にと中国に書籍の寄贈を申入れたところ上海市教育局が喜んで引受け送付したもので（大〇海）をはじめ富山房並びに平凡社版百科大辞典、岩波版（法律学辞典）（日本文学大辞典）（東洋歴史大辞典）（金触大辞典）（日本語名大辞典）等の辞典類の他（発明家及び技術家としてのレオナルドダヴンチ）等文学、歴史、経済、科学等各部門に関する書籍一千冊で民政府文化部で保管することとなったが先程九州の疎開先からも（新□報）の親泊政博氏や沖縄縣事務所北内歌部長等の肝入りで書籍に渇えた郷里の其を贈ろうとその準備を進めているとの情報もあり、此等寄贈本はいづれ一元的に管理され、ささやかな図書館も用意して”現在何らの文化施設に恵まれぬ住民の為に”心の糧”となり（オアシス）となり得るやうにとの各方面から待望されているが、これらの書物もこれに応えて手早いところ一般に利用させ□いもの楚、寄贈本には一冊毎にていねいにその見返しに（琉球同胞留□）と冒頭に朱刷傳単□が貼付されてあり、□て沖縄が支那の册封を受けた時代から説き□び、その昔（黄色い軍艦）の援軍を待望した久米村の頑固等に随喜されそうな漢文が綴られており、文教部でも持て余し気味のいささかこはゆい檄ではあるが、いずれにせよ仲良くすべき隣邦からの贈物だ多謝多謝と虚心たん□に受け取って然るべきあろう

檄文の要旨は　（前略）洪武五年明ノ太祖琉王ヲ册封シ中山王ト為シ国ヲ中山ト號セシム我国ノ正朔ヲ奉ジ五百年を歴テ貢□タエズ（前略特ニ日文書籍一千冊を奉贈シ藉ニ断念に資ス今後□□連繋ノ□□ナヲ洞察ス　未ダ□□ノ又学ヲ習ワザル前ニ在リ、権ニ研究資料ニ充ツ有意□為　　中華民国上海市教育長敬贈　三五年七月

11　第82号　1947年2月14日

記者団沖縄へ　郷土古典芸能舞踊で歓待

記者で且つ有名な出版業経営者であるロイ　ダブリユ ホワード氏など九名の米有力新聞記者団一行が二月十三日　日本　朝鮮　よりの帰途沖縄に来島することは既述の通りであるが、二月四日政治部長レイトン中佐は民政府に志喜屋知事を訪問　右新聞記者団一行は米陸軍の斡旋によってこん度の旅行を試みたもので日本朝鮮よりの帰途は沖縄本島戦禍をうけた農村の復興状態及び教育状況を視察すると共に学校　民政府等を訪う予定になっていると語った　なお民政府では同記者団一行の来訪を機に沖縄古典舞踊並に美術工芸品等を観覧に供し歓迎する筈である

12　第85号　1947年３月７日

沖縄を理解せよ！各部隊に講座解説　意気込む米陸軍情報教育部

沖縄に新参の米兵達に沖縄の正しい歴史、地誌の知識を与えるために米陸軍沖縄基地司令部の情報教育部では３月１日から各駐屯部隊で沖縄案内講座を開いているが講座の内容は”沖縄の戦闘”琉球の地誌、琉球人、琉球の政治経済、沖縄の名所旧蹟、等が含まれて五週間で完結することになつている　”沖縄の戦闘”講座では前第十軍所属の将校が嘉数、浦添戦線、首里与那原戦線の戦闘、喜屋武掃討戦真相などの講わがあり又マリン部隊や前二十七師団将校を招へいして那覇及び北部沖縄戦闘のさせこれらの講座で太平洋戦争最も重要な戦闘の一つであった、沖縄作戦の詳細な説明がなされる筈である　沖縄地誌の講座には新しく沖縄に来た兵隊だけでなく古参兵にも又興味深い沖縄の地質、植物、動物等の講義が含まれ琉球の住民についての講座は沖縄にいる米兵に深い理解をもたせ効果的島民と協力するように仕向ける努力が払われ琉球の政治経済の講義は受講者の沖縄に対する蒙を啓き且つ沖縄の頼もしい将来を論ずるに最もよい機会を提供するものとなる筈で最後の沖縄の名所旧蹟の講座は余暇を利用し沖縄風景の写真をとろうと意気込んでいる米兵たちにとって極めて好都合のものである

13　第85号　1947年３月７日

沖縄占領初の報告　マ総司令部から発表

総司令部は三日琉球に関する最初の占領報告を発表した　昭和二十一年七月から十一月に至る五ヶ月間米軍政府が琉球で行った活動をまとめたもので□盲次の通り

総論　戦争が終わってから沖縄人は米軍政府指揮の下に急速に自ら□を処理するようになった　経済復興は各地からの市民の引き揚げと再定住により戦争で九十％まで破壊した住宅建設貿易及、製造業の再□計画を進め始めた　特産物工場復興二ヶ年計画は着々進行し農業経済、土木建築及び工場施設再建のための特別予算が八月に承認された　引揚げで人口は増加し六月の六十八万九千百六十翌十一月には八十一万七千百六十人となり出生率は一万人につき七、五人　死亡率は同じく四、四人である　沖縄の指揮権は昭和二十年九月二十一日海軍が陸軍から責任を引き継いだが昭和二十一年七月一日にはまた陸軍へ戻された　軍政府の管轄地域は沖縄島とその西方久米島までの諸島に限られていたが昭和二十一年一月六日三十度線以南の琉球列島へ拡大した

政治　民政は昭和二十年九月市長及び市議を選挙し十五名よりなる沖縄諮詢会が任命されたがこれは昭和二十一年一月二日に中央行政機関に発展した四月に知事が選ばれ五月二十三日知事は沖縄議会を召集し月一回会議を開くことを認可された　軍政府の設置に伴い現行法は改訂を要するものを除き総て有効であるとの布告を発した　旧日本法規は多くが

修正と廃棄を必要としたがその検討は法律家が少なかったてめ遅れている　財産権は市民の多くが戦時に分散したので完全に混乱状態にあった　裁判組織及び各種法廷の管轄なども困難な問題であった　最下級の刑事裁判所が昭和二十一年四月十五日開始された　警官養成所は昭和二十年十二月十日設立　又翌二十一年十二月一月に沖縄警察部が創立された

経済　農業　戦前の水準への急速な回復は戦争の被害の外約三万エーカーの耕地が軍用地にとられた結果耕地不足のため阻害されている　他方耕作隊の手で三千エーカーを開拓農耕具と肥料六百三十四トンを配給した　十月から大東島の燐鑛石十五万トン採掘計画をたてて調査を始めた　これは沖縄の需要を充たすだけでなく一部は輸出される

漁業　出漁期に入った四月から全面的に活発となり業具の不足にも拘わらず漁獲は相当な成績を挙げた　但し十一月は季節風関係で八十七メートルトンにおちた

工業　沖縄人の工業専門家からなる工業部は繊維□（芭蕉繊維）、染色（藍）、セメント、木工（下駄、家具、織機）などを生産して市場に出させている　住宅資材の生産には特別に努力されている

製糖　現在の政策が島内の需要を目標としているので戦前に比べると大して復活していない　製塩業も薪の値上がりで苦境にあるが、どうにか再開された　糸満□工所にに□物工場が近く出来るはずで打穀機六万の製造を目標に操業を始める　住宅問題は組立式の簡単な標準家屋の設計ができてから緩和された

労働　十一月の就業率は終戦以来の高率で琉球人の就業者十五万五千四十七、失業者一万四千九百六十二を記録した　八月の統計は就業者十一万九千八百□十九、失業者一万七千十三であった

貿易　外国貿易は占領初期には停止されていたが各商品の島内需要が充たされた暁んは再開促進される予定　現在行われている島内通商は拡大の見込みで一方台湾は貿易の再開を望んでいる　燐鑛石の対日輸出は月平均七百五十メートルトンに達する見込みで代金は日本からの輸入品の支払いに當てられる輸入品のうちには過リン酸□一千メートルトンがあり今後三ヶ月以内に積み出される予定

金融　昭和二十一年五月一日から貨幣経済を再開七月三十一日第一回公定物価表を公表した　銀行は昭和二十年三月閉さいしたが二十一年六月再開した　沖縄中央銀行は同年□月一日に創立された

財政　沖縄ではまだ課税は行われていない　唯一の歳入財源は各政府機関によって運営されている諸工場である　予算に□する新法律は沖縄財政部で起草され八月に軍政府の承認を得た　承認された予算中には沖縄民政府を維持するための給料、賃金の外戦争で困窮状態の者を補助するに必要な食糧、補給物資、施設などの費用も含まれる　なお別に同島の経済復興計画のための予算も承認された　一方特別予算の運用で食糧増産、米国からの食

糧輸入削減、就職増加による救済費用の縮小などが実現するとみられる以上更に西表島の木材生産促進の予算も十一月承認された

社会　一ヶ月二千□百の住宅が過去三ヶ月間に建設されたが少なくとも七万戸が必要とされた　十一月末には厚生機関が七つ出来、公衆衛生部が創設された　七月一日以後沖縄へ引揚げた数は日本から八万八千七百六十六名、朝鮮から五千六百九名、マリアナから三百十九名、ハワイから四百三十一名で日本人捕虜三千六百名以上が十月に三千五百名が十一月に日本に帰還した　一月に設置された沖縄公衆衛生部には六月末には沖縄人医師六十名、病院関係者合計一千一百名　診療所百二十が所属していた　十一月までには琉球諸島を通じ医師八十名、歯科医二十三名　産婆百六十三名、薬剤師五名となった　マラリアとトラホームは増加しているが衛生方面の努力は継続された　出産率は十月以降ほとんど百五十パーセント増加した　教育方面では校舎、教科書、有能な教員の不足が障害となっているが、入学率は上昇し十一月末までには学童は全部で十万八千五百一名となった　文化施設は首里市の博物館再開を初め逐次拡張されている　琉球諸島全部を通じて唯一の現地人新聞は（うるま新報）である

14　第86号　1947年３月14日

芸能界自活へ　芝居は四月から興行

文化部所管の芸能団はその給料を民政府予算から支給されているが、一月以降入場料を徴収し月約五回興行で二万八千八百十七圓七銭を稼ぎ自立企業の見透しもつき且き芸能団員の生活も興行収入で維持できる見透しがついたので、軍政府では三月六日知事宛芸能団員の給料を四月一日以降民政府予算から削除するよう指令した　これによって沖縄芸能団は民政府文化部から独立　個人経営となり民間娯楽面を引き受けて今後の活躍が注目されている　なお軍指令は□時に今まで文化部技官として民政府予算で賄われていた文化部美術部員に対してもその作品を頒布することにより生活を維持できるものとして四月以降民政府予算より某俸給支払いを打切ることになった

15 第90号　1947年４月11日

よきかな、郷土芸術　紅型陶器舞踊紹介　米人側から好評博す

美術家グループでは米人家族に対し沖縄文化の紹介を期し去る二月十五日より約十日間知念ハイスクールで美術展覧会を開くと共に選り抜きの郷土舞踊家を集め米軍家族のために公演したが、この展覧会では紅型、花織、芭蕉布、麻織の華麗な琉球古来の服しょくが展示され、外に数点の見事な琉球陶器なども陳列され歌舞音曲と共に沖縄固有の芸術のついて寧ろ米軍将校側から深い関心と高い評価を買い近来にない有意義な催しであった　出

品絵画は名渡山、大城、大嶺、山本、金城、糸数氏らの人物風景であった　この展覧会について普天間で発行されているデリーオキナワン紙主筆ポータ氏は二月十八日の同紙上で次ぎのように紹介した

目下知念で開かれている展覧会には沖縄人が戦前につけていた華麗な数十点の着物や数名の沖縄の画家の傑作が陳列されている沖縄人は戦争のため現在のようｒな粗末で単調な服装で生活しているのを非常に恥ずかしがっているように思われる　彼等は戦前自分たちが持っていたものをわれわれアメリカ人に知ってほしいと希望している　陳列されている写真や書家の絵からみると沖縄人の家はずべて見事な庭園を持ち四季の草花が植えられていたことがわかる　沖縄人は過去に於て彼等が作った傑作に強く誇りをもっているが、この展覧会の陳列品をみた人は何人も沖縄人が誇るのを尤もだと見るであろう　払い下げられた米軍服をつけ見苦しい掘立小屋に住んでいる沖縄人を見てきた吾々アメリカ人がこれを彼等の平常の生活姿勢だと思うのは無理もないことだが、しかし折角アメリカから遙々沖縄を訪ねた大多数の吾々アメリカ人が本当の沖縄の姿を知らないでいるとすれば、これは全く残念なことである　沖縄を本当によく知る唯一の最良の方法は知念まででかけていってこの展覧会をみることである

16　第99号　1947年６月13日

高級美術作品初め　土産品販路を拡充　追々輸入雑貨なども取り扱う

手工芸品等沖縄土産品は従来軍売店を通じ又はあの手この手の非合法で米軍人に販売されていたが、去る五月十五日付軍指令を以てこれらの制度は廃止又は禁止され、今度新たに軍政府監督のもとに民政府工業部経営による土産品販売店が軍政府、ライカム、泡瀬、嘉手納の四カ所に、追々牧港、石川、奥間、那覇等都合九カ所に設置されてこれら諸売店を通じてのみ郷土色豊かな陶器、漆器、竹細工等凡ゆる沖縄土産品が米軍人の手に売られることになるが、軍政府クレイグ副長官は次指令を通じて安谷屋工業部長に対しこれらの販売店で取り扱う製品をもっと潤沢豊富ならしめるよう必要な措置を講ぜよ、とうながしている、沖縄の画家達の作品もこれらの諸販売店にしつらえたギャラリーにおいて展覧し、博くはん布されることになる　これら諸売店の通じてあがる利潤は民政府予算に納入されるが、経済部長ウイルソン中佐は四日の連絡会議で次ぎの如く志喜屋知事に語っている

これらの販売店は現在は米軍人を対象にしたものであるが将来は各村に設置してアメリカ輸入雑貨等を住民に販売する位に強力なものに進展せしめ度い

なお販売店管理人んは當眞し徳氏が五月三十一日任命された

17　第102号　1947年7月4日

飛ぶように売れる　賑おう軍政府美術手芸品売店

米軍関係への販売を目的とする民政府工業部経営の土産品売店は去る十六日月曜日から軍政府、泡瀬、嘉手納の三ヶ所で展開され、絵画、花壺、灰ざら、カラカラー、茶セット、獅子像などの陶器や阿旦葉製のハンドバック、シガレットケース、草履、オハヨウ（コツブ袴）或は竹シダ製の花籠、フルーツ籠、□□セット、屑かご、貝細工のくびかざりやボタン其の他人形切花など千余点がかざられどちらもすばらしい人気で開店初日の売れ行きだけでも数百弗に及んだようである　クレイグ副長官もそのすばらしい成績を喜び開店当日　知事と工業部長を軍政府に招致し技巧もなかなか優秀だから是非奨励してほしいと次ぎのように語った

土産品販売は沖縄の大きい財産だから知事は責任をもって増産の奨励に當り将来は軍相手だけでなく民需にまで拡充してほしい　砂糖とパイナップルと牛と御土産品によって栄えたハワイと気候其の他で沖縄は最もよく似ておりしかも沖縄人は手先も器用だから特に奨励に努力するよう

更に工業部では新しい工芸品の物産を奨励する一方で販売希望の向は同部と連絡をとりいつでも出品してもらうように各関係筋に呼びかけているが、土産品にはそれぞれ軍政府の関係□と工業部で協議の上決定した定価を附し民最高価格とは全く別個に取扱いその差額は現在のところ軍指令により民政府の収入に繰入れられることになっているが、その価格は民最高価格の六割から十割位までの増になっており将来工業施設の整備と技術向上を問わず土産品販売は沖縄唯一の収入源として大きく期待されている　なお民最高価格と売店価格との比較は左のとおり △阿旦葉製品　民最高値、（民売店値）　スリツバ三圓六三銭（七圓五十銭）、煙草ケース　六、五六（一二、五〇）、ハンドバック一四、〇四（二二、五〇）、カゴ一二、五〇（二〇、〇〇）、テーブル掛一二、五〇（二〇、〇〇）、茶わん入れ二、八二（五、〇〇）　△竹製品　果物かご　一七、一六（二五、〇〇）、同（小）七、□九（十五、〇〇）、裁縫箱七、一〇（一二、五〇）、整理箱一〇、二三（一七、五〇）、同大二二、一一（三五、〇〇）、紙屑入れ二七、〇六（四二、五〇）、同小一四、一九（二二、五〇）、煙草セット四六、八六（七□、〇〇）、化粧品入れ一三、五三（二〇、〇〇）△しだ製品　かご小六、六〇（一〇、〇〇）同大八、一四（一一、五〇）△陶器類 花壺五、二八（十〇、〇〇）、□上製品　一〇、六一（一七、五〇）、灰さら　八、〇五（一二、五〇）、コマ犬二〇、一三（三〇、〇〇）同色付け二二、七七（三二、五〇）、同小型七、五七（一五、〇〇）、キュース四、一六（一二、五〇）、酒セット三、〇五（一二、五〇）　□立　三四、七六（六〇、〇〇）　△雑之部　貝ボタン一、五〇（二、五〇）、貝製くびかざり六、八五（一〇、〇〇）、ゴザ二四、〇〇（三七、五〇）、人形一九、七九（三二、

五〇)

18　102号　1947年7月4日

大宜味芭蕉布も復活

大宜味村に於ては六月二十一日午前十時より大宜味村実業高等学校において戦後初の各種品評会を開催　名にし負う芭蕉布を筆頭に木工、竹工、棕梠、阿旦、蘭草、鍼力工作品其他実類など多数展示し、午後二時より審査報告賞品授与式を挙行した　當日出品の芭蕉布は染色材料機具等の困難に打ち勝って絣物縞物など見事な出来榮を見せ戦前に劣らぬ優秀品が出揃ったことは大宜味芭蕉布今なお健在であることを思わせるものがあった　その他の手芸品も土□材料を利用し創意を生かしたものでいずれも立派な手際を見せた　なお式後村民角力大会並に競漕があって六月御祭の賑やかな行事を終わった

19　第105号　1947年7月25日

脚本募集　賑わう劇界

演劇の衰微沈滞は一般常識の憂えるところであるが、これも結局は脚本のひん貧からきているものとして　民政府文化部では今度賞金付きで新しい脚本を募集することになった募集事項は次のとおり

脚本募集要項　△題材随意　再建沖縄を表現し民主主義なるもの　軍国主義的封建主義的なもの敵国人権の不平等卑猥なものは不可　　△当選作品は来る十月（予定）第一回芸術祭に於て三劇団並びに演劇研究団体の競演用脚本に充てる　△賞金一等　千圓　二等五百圓、三等二百五十圓　△来る九月三十日迄に民政府文化部宛に原稿を送ること

20　第105号　1947年7月25日

梅劇団の美学

戦禍をまぬがれ戦前の姿のままをとどめていた羽□□の整頓された学園は見る人に心強い思いを与えていたが去る二月の失火で烏合に帰し千名の学童は分散教育の悲惨な目にあっていたが、梅劇団は那覇人会の世わにより去る六月二十五日より四日間、学校建築資金募集のため田井等劇場に於て演劇会を開催　総額一万五百四十二圓の入場料を全額村当局に寄贈し、演劇に要した経費は無論御禮も一切拒絶してアッサリ引揚げたが、この義挙に感激した同村では校舎再建に全力を挙げ真喜屋我部祖嘉初□も九分通り完成した

21　第106号　1947年8月1日

見事落第　新切手の図案に苦心

六月十七日民政府郵務課から軍へ提出した郵便切手郵便葉書の図案は全部が時勢にそぐわぬ人民とは無縁のものだとばかり何れも落第　こともあろうに左三ツ巴や王冠、黄金のかんざし等首里王朝に因んだものばかりで守禮の門の図もはねられてしまった（封建復古は真平御免）だと（民主主義沖縄の誕生）を期待する米軍の拒否の言い分が面白いと同時に多くの示唆するものがある　△凡ての提出図案は十二世紀から一八七九年まで琉球を支配した王朝（尚家）の象徴である　琉球王国は日本に合併され沖縄縣として組織された王の子孫は東京に住み日本の華族に列せられている　△左三ツ巴紋の紋章は琉球王朝の象徴である　△守禮の門は琉球の全王宮前に立った門の絵である　△王冠かんざしは多分琉球王のものであろう　△提出図案は芸術家によって考案されたかどうかわからぬが　琉球王朝の子孫の宣伝手段として役立つであろう　といったわけで民主主義に遠いものがあるとし変更を勧告されたものである　そこで郵務課では早速梯梧の花　蘇鉄、百合等沖縄のフローラを表現したものや沖縄□図に鳩を配したものを出したら見事パス　近く七種の切手デザインを決定することになった

22　第108号　　1947年８月15日

圓覚寺の巨鐘　比島から還る

今は昔　首里はうつ蒼たる繁多山に四百余年来の建築を誇った名さつ　国宝指定の圓覚寺は首里城と共に烏有に帰し　今は文字通りその片鱗を首里博物館に残すのみとなったが圓覚寺のぼん鐘はどうなったのか　沖縄一と称された巨鐘は焼け残った筈だが、その行方は何処か　去る二十二日政治部長レイトン中佐の段（談）に依れば　この巨鐘は現在フイリピンに健在し、米海軍軍政府管下時分に腕に錨を入墨した海兵隊が戦利品としてフイリピンに持って行ったが　今度軍政府の斡旋により郷里沖縄に帰り　住民と相見えることになるとのことだ　民政府では大典寺跡に残存する鐘楼を民政府庁舎前のロータリーに移し、この巨鐘を吊し時鐘にするとのはなしである　嘗ては首里城下に朝な夕な諸行無常の響きをつたえたこの鐘も戦争の洗礼を受け遙々海を渡ってフイリピンくんだりまで修行にゆき更生した　今や必ず沖縄の蘇生を世界に告げる暁鐘でなくてはなるまい

23　第115号　　1947年10月３日

各界の学究を糾合沖縄文化協会生る　近く東京で”沖縄民芸展”を開く

米本土及びハワイに沖縄友の会や沖縄救済財団が結成されて側面から沖縄復興に援助を与える運動が興されつつあることは本紙□報の通りであり、日本本土に於ては沖縄人連盟及び沖縄人会が結成されて日本在住六万同胞の生活援護運動を展開すると共に遠く郷土復興に声援を送っていることはすでに（自由沖縄）及び（□民報）を通じて我々が知る通り

であるが、今般東恩納寛じゅん氏や仲原善忠氏等東京在住の沖縄出身著名文化人が中心となって、柳田国男、折口信夫、新村出、田辺尚雄、柳宗悦、稲垣国三郎氏など沖縄研究の権威を網羅して沖縄文化協会が設立された旨会長仲原善忠氏からこの程志喜屋知事宛便りがもたらされた　同会は沖縄古典の蒐集にあたり、（球陽）の復刻ももくろまれているが、十月頃折口信夫氏の講演を開催する□、柳宗悦等が沖縄民芸関係の展覧会を催し沖縄文化の紹介に乗り出すことになっている　なお同会は司令部の了解を得て、貿易庁を通じて雑誌六万五千冊鉛筆七万五千本及下村湖人著（次郎物語）八十冊を郷土沖縄に寄贈すべく手続を終えたとあるから、これらの温い贈りものがとどくのも遠くなかろう

24　第115号　1947年10月3日

資料を蒐集 古美術工芸品も登録

民政府文化部では先に首里博物館による首里城跡に琉球古文化を再現しようとの総合博物館に就いて又吉康和、島袋全発、山田有幹、原田貞吉等の諸氏を招いて研究をなしたが、さしあたり現在の首里博物館を移転改築することと民間に散逸している沖縄文化資料の蒐集がまず急務であるとし、例えば浦添城しのゆうどれ等の古ふんの発掘は保存を考えると共に日本に渡っている沖縄文化資料の買戻しを計ることになり、既に軍政府に正式手続□であるが博物館課ではまず民間に散らかっている沖縄文化資料の蒐集と保護を計るべく、今般ひろく一般の古美術工芸品の所持者に呼びかけて協力を求めその所在を明らかにするためそれら文化資料の登録を実施することになった　即ち登録を要する文化資料は沖縄歴史に関する古文書、紅型、織物、書画、漆器、陶器、彫刻その他古代工芸品等であるが登録の実施方法は文化部博物館課から一般所持者に従慂する外　ひろく所持者が積極的にこれらの文化財を持っていることを申し出るようにして貰えば同課が出張してその価値を鑑定のうえその資料を登録する　登録された物件は博物館課がその保存につき出来るだけの便宜をはかるようにするがいずれ重要美術指定の制度を設けて再調査のうえ沖縄重要美術品として指定し正式に登録されて永久的保存方法が考究されることになる　なお登録された美術工芸品等についてはこれを文化部が強制的に取り上げたり、又は買い上げたりする前提ではなくせっかく祖先が遺し危く戦禍をくぐり抜けて沖縄の文化財だ　その所在を明らかにして万一の破損や島外への流出を防いで永久的保護を加えると共にひろくその真価を再認識して一般所持者は沖縄文化寶財保存の誇らしい気持から率先してその所在を明らかにして登録を申し出るように同課では希望している　なお現在のところ判明している有名品は首里米須家所蔵の自了の他　浮織打掛、那覇□吉良健氏所蔵の沈金手文庫、知念田□氏蔵　名工仲村渠の抱瓶等であり會ての沖縄図書館所蔵のいん元良（うずら図）も中頭某村に所在が判明しているとのことである。

25　第117号　1947年10月17 日

売れる売れる沖縄みやげ

土産品売店は現在民政府内の土産品取扱所を根拠にして軍政府、泡瀬、嘉手納、ライカム移動売店を通じてクレイグ副長官のいわゆる沖縄、大島、宮古、八重山の自由貿易再開の第一歩であるとの建前で米人のし好勘案の上各島の製品を各々陳列取引させて漸次好調を示しているが、沖縄□本島の売品では矢張り壷屋の陶器が売行きの筆頭を示し、獅子小、ティポット（チューカー）酒セット、□□□、花瓶等、石川市□□□区で出しているグラスマット（ニクブク）も仲々の人気で製品がとても間に合わず紅房の漆器、屋慶名の阿旦葉製品、羽地の人形等の相当の売行きを見せているがパナマ帽子が意匠や色彩に欠点があるのか意外に人気薄のようだ。注目すべきは大島の紬き□で　例えば戦前日本全国を風びした古い伝統を誇るあの大島つむぎが惜し気もなく在来の柄を捨てて軍政府あたりで働いている婦人のスカートなどにみられるような派手な格子柄に転じているのは流石に目のつけどころが早く九月十六日のエムデー売店に於ける売出し初日の如きは反六百七十五圓の繋柄が飛ぶような売行きだ　一方竹製品の死す、本棚、茶箪笥卓子等の実用家具類が又しっかりした細工でこれが入荷と売切れが一緒であるというぐらい引っ張り凧の有様である
宮古からは独特の久葉団扇、阿旦メリツバ等、八重山品ではワラビ製品のランチ、バスケット、マーニ製のフルーツ籠等が飾りものとして珍しがられている

26 第119号1947年10月31日

中城城址を公園化しては　だが然し経費は民で

中城城しといえば嘗て日本海軍の重要な寄港地であった馬天港や□□□をはじめ中頭島尻一円の眺望を一望に収める名勝の□してのその雄大な景観をたたえられてきたがこの城し一円を公園化したらという軍政府の意向がある。首里城も烏有に帰し昔日の面影を残す沖縄唯一の古城しであり城内の建物は焼失したが城壁はところどころにある弾痕の石崩れのほかはほとんど□□の通り完璧に残り、この由緒ある護佐丸の古城が今は毎週土曜日曜には米軍将兵やその家族の遊行で□か□か賑わいを呈し、”国滅びて山河あり城春にして草木深し”の感傷などは微塵もなくヂープのしげく快適の遊覧地と化しつつあるが、去る15日軍政府将校ロターベッグ少佐は　歴史上由緒ある中城々址一円を沖縄の絶勝地ととし国立公園の樹てられたら如何　との軍政副長官クレイグ大佐の意向を志喜屋知事に通達したが知事がつかさず　沖縄としても由緒ある城古城であり非常に結構なはなしだが肝心の経費は軍の方で考慮していただけまいか　と問えば同少佐は　米国に於いても例えばワシントン誕生の地は一般の寄附金に依って維持しており公費に依る名勝地もなくはないが折角の名勝地由緒ある中城城址を沖縄の国立公園に仕立てるべく一つ貴下において名案を樹

てられては如何　と云うわけである。

27　第120号　1947年11月7日

蚕糸検定所近く設立

農家経済健全化のため蚕糸業の復興はきたいされているところだが現在飼育場も無いので桑園五五七町歩　養蚕戸数三三〇〇戸で年収繭額僅かに一万五千円という遅々たる歩みであり農務部土地生産企画課では将来桑園六千町歩　産繭額一二〇万円を目標にその健全な発達を図っているが十月七日付けで軍の承認を得たので近く真和志村松川の瑞泉社跡に蚕糸検定所を設け蚕業の強敵である蚕病の検査優良品種の普及及び蚕生糸の品質検定等を行うことになっているが蚕業が復興せば単に衣料繊維の自給というのみでなく貿易見返り品としての生糸の生産という点からも期待されている。

28　128号　1948年1月3日

新しき沖縄の年中行事を制定　科学祭その他イロイロと

民政府では先に設定した一年に七日の公休日を含め新たに年中行事を左の通り制定し新年度からひろく一般に奨励することになったが、　文化部編さんの行事表によると農事、宗教等に関する行事の外特に体育を奨励し文化を昂揚する建前から音楽祭、芸能祭、体育祭等を加え機動説のコペルニクス並びに蒸気機関のワット両科学者の誕生日である一月十九日を以て科学祭としており　仲秋の名月、菊の節句等も忘れてはいない。△一月一日年始□△一月七日七種粥△一月十九日科学祭△旧二月十五日麦穂祭△旧二月三十日上巳の節句△三月中旬彼岸△三月下旬音楽祭△四月八日菊花まつり△旧四月中旬害虫駆除日△四月二十四日□□□府創立記念日△五月二十八日復活祭△旧五月五日端午の節句△五月第二日曜日母の日△旧五月十五日稲穂祭△五月三十日霊□祭△旧六月二十五日稲大祭△七月四日米国独立記念日△旧七月七日七夕の節句△旧八月十五日仲秋の名月△旧九月九日□陽の節句△九月中旬彼岸△十月下旬体育祭△十一月中旬芸能祭△十一月下旬感謝祭△十二月二十五日クリスマス

29　129号　1948年1月9日

郷土芸術の誇り　向井文忠氏が沖縄博物館に寄託　自了・田名の逸品帰る

民政府博物館課では沖縄の文化資料蒐集のため課長山里永吉氏が再度大島に出張・調査にあたってたが、名瀬市向井文忠氏の所持にかかる沖縄関係古文書資料に就き沖縄に寄託品を折衝した結果、向井氏は心よく書画、陶器、漆器、彫刻名等八十七点の美術工芸品の寄託を承だく　すでにこれらの品々は□ろう山里氏が持ち帰ったものであるが田名宗経、

自了等の貴重な資料がある。民政府ではこれらの管理に関し去る二十三日の軍民連絡会議に於てこれらの逸品を軍当局に提示して　志喜屋知事からこれら沖縄古文化財に就いては所有者向井文忠氏の好意の通り沖縄で恒久的に保管したい旨を懇願したが　軍当局はこれを諒として大島□□との連絡を約した。なおこれらの資料の重なるものは左の通りである。△書画　神農図　自了筆と推定される　山水　鎮思九筆の推定　駿馬図　馬相筆　鄭嘉訓秘匿ノ書宜湾義保筆　□巻物　鄭元偉　（米ふつ））　△陶器　知花焼四ツ耳壺　古我知焼竹型花生　南南蛮　亀型茶□　△漆器 蒔絵食かご　蒔絵手箱　革製八巻箱　△彫刻りゅう頭観世菩像（梅帯華、田名宗経作）　印籠５個（田名宗経作）　根付（田名宗経作）△雑の□　へん額（源遠流長）　曲玉（四十三個）ひうち石（三個）たんけいの硯　その他

30　130号　1948年１月16日

鐘よ再び響け！　那覇市民に朗話　埋もれた由緒の鐘発見さる

今は昔、那覇見世の前に大がじゆまるや玄関造りの警察署があった頃のこと―警察の鐘楼につるされた鐘は朝晩時鐘としてまた、あの東町の大火、辻の大火の際には早鐘にかわって乱打され　六万市民と長いこと苦楽を共にしてきたがその後那覇署の県庁前移転とともにこの鐘は那覇市に移され、つい戦争直前まで市役所の尖塔に吊され市民にサーヴィスしてきたが、那覇消滅と共にこの鐘はまったく市民の記憶から去って誰ひとりこれを尋ねるものもないが、新春早々この鐘の所在が究明し那覇市民を喜ばしている。

□□那覇電話交換局□訳上間新吉（三十三）君は□□大晦日の午後仕事を終えて那覇市役所の跡を師走の感慨に耽けつつ逍遙しているうち、はからずコンクリートの残がいの隅に昔なつかしい鐘がのぞいているのを発見。はてと周囲の石ころを取り除いたところりゅうのつり牙のついた那覇にとって由緒ある鐘と判明。さっそく那覇市では引き取って朝晩の時鐘にするとのことであるが、幕舎とぬかるみの町で聞く昔なつかしいこの鐘も今次大戦の伊太利アダノの鐘物語の如く一日も早く、平和な美しい町を建設してくれと七万市民に訴えて鳴り響くことであろう。

31　第141号　1948年４月２日

松竹梅合同劇

松竹梅三劇団では昨秋俳優協会の設立をみ　演劇会の刷新を期することとなったが、今回その第一着として三劇団の合同劇を来る六日から那覇中央劇場を振り出し引き続き石川、首里、糸満、金武□の五箇所で興行することとなった。なお出し物は山里永吉制作“首里城明け渡し”と“父帰る”其他で三座俳優八十名が総花式に出演する予定である。

32　第153号　1948年6月25日

沖縄郷土史由緒の地　中城々址を公園化　米人遊覧者殺到、村民が美化作業

勝連半島と知念岬を抱かれ津堅久高を眼下におさめる沖縄郷土史由緒の□中城々跡は殆ど□□のままの面影をとどめておりその勝景と相まって日曜日に二百人と下らないアメリカ人が訪れ戦後沖縄唯一の公園となっている。

戦後米軍が駐屯した関係上今は城し跡の広場まで自動車が入れるようになっている。なお同城しは公園としての管理がなされていないため夏草の茂るがままに荒れ果てていたが、去る十五、六日の両日北中城村の初校中等校並びに役場職員等が一体となって美化作戦に当たり気持ちよい遊園地にしたが更に今後も□□北中城□村が協力して美化のために力を注ぐことになっている。

33　第164号　1948年9月10日

那覇の工芸展　溌らつたり復興色

焼土那覇に再生の息吹もたくましく繰り展げられる那覇市主催復興工芸展は十一、十二日の両日真和志村安里の沖縄製帽社で開催されるが、戦後最初の催しであり一般のメイカの人気をあうｔめて出品殺到陶器漆器においては布袋和尚、四竹踊り等の装しょく用置物や日用品、木工では守禮門の彫刻等の異彩をはなち其の他模様品婦人帽、ハンドバッグ、靴の手芸品はじめ精巧な玩具類にいたるまで多種多様な技を競いさらに即売会やバザーの設備もあり盛況が予想される。なお十日は一般展示に先立ち審査並びに表彰式を行うことになっている。

34　第165号　1948年9月17日

八月綱曳

（糸満）糸満町では旧八月十五日、九月十七日、恒例による大綱引が催される。当日は各団体の旗ガシラを先頭にしてチ□□隊や仮装行列が午後二時より糸満初等校より繰り出され午後六時より綱引に移ることになっており近在よりの見物人が殺到するものと見られている。翌十六日は糸満町青年会主催で全島沖縄相撲大会が午後一時より糸満初等校で催されるが、既に国頭久米島より力士の申し込みがありこれ又賑わいが予想される。

35　第165号　1948年9月17日

那覇工芸展　出品殺到す

郷土産業の復興時において躍進那覇の誇りとする手工業界のすいをあつめた那覇市主催復興工芸展は去る十一、十二日の両日沖縄製帽工場で開催されたが、戦後初の催しに全市

民の人気を呼び復興色に活気みなぎる会場は精魂かたむけた各種製作品に彩られてまさに技巧の祭典さながらの大賑わい。審査員も縫製品千五百四十六点に目をみはるという活況。戦前に劣らぬ優秀な製作品に業界の烈々たる意欲が遺憾なく発揮された。厳選の結果入賞は左の如く決定した。

△陶器一種　一等花瓶　沖陶　二等香炉（琉陶新垣栄吉）三等　飯わん（壺陶新垣栄秀）△陶器二種　一等酒セット（壺陶小橋川仁王）二等　菓子鉢（壺陶高江洲康幸）三等　チョウジ風呂（壺陶島袋常清）△しつ器　一等煙草セット（沖漆）二等カップセット（紅房）三等果物鉢（沖しつ）　△鐵工　一等　蓋付鍋（那鐵）　二等　改良ランプ（国場道かん）三等竿秤（那精）　△木工　一等　京机（那覇市四区大嶺経達）　二等　両袖ランプ（沖木島袋常幸）三等　やしろ（新田宗盛）　△手芸　一等　男子パナマ帽（沖帽）二等ドイリー（沖帽）三等　婦人パナマ帽（球帽）　△雑之部 一等　玩具　（那覇市一一区久場島玩具工作所）二等　織物（沖織）　三等　獅子（那覇市四区国場真一）　四等　人形（兼島玩具工場）　五等　踊笠（那覇市一区嘉陽田朝清）

36　第170号　1948年10月22日

良き哉、芭蕉布

さきに沖縄視察に来島、台風直前東京に帰任したマ司令部琉球局長ウエカリング准将は志喜屋知事より贈られた大宜味芭蕉布を称揚して左の書信を寄せてきた。知事並びに民政府職員各位が自分の滞在中の多大なる援助を与えてくれたことに対し心から感謝します。ことに送って貰った芭蕉布の見本は有難く受取りました。早速これを妻にみせたところ大変喜んでいました。また近く沖縄へ行きたいと思っています。

37　第194号　1949年４月４日

首里城の石奪うなかれ

首里城内の沖縄大学敷地からトラックで石を大量に持出すのを目撃したミード軍情報部文教部長は民政府山城文教部長に対し大学敷地内の石は大学建設に使用する故厳重にこれを取締るように指示した。

38　第197号　1949年４月25日

沖縄文化の温存に在日本有志が大馬力　史料工芸品蒐集に資金募る

既報　マ総司令部琉球課から約一ヶ月の予定をもって派遣された比屋根安定氏はその後連日各団体職域講演座談会を開催し、去る二十一日は岩原盛勝氏同導民政府知事室文化関係□□座談会を開き東京における文化運動につき左の如く語った。

沖縄文化の保存研究宣伝を目的として昨年東京在の沖縄文化研究者網羅して沖縄文化協会が結成され沖なわ文化資料の蒐集について日本は勿論米国にまで範囲を広げるべく野心的な活動を開始している。現在おもろの原本ペルリ日記原書も入手、東恩納寛じゅん氏所蔵の貴重□□史料等の保存等についても慎重に研究、また沖縄に□歴史や書画伯の作□□亜る沖なわを主材した作品、複製頒布、沖縄回顧展の計画も進められており、沖なわ文化研究の権威者をもってする講演会も開催され魚返教授の冠船に関する講演等有意義の示唆をもつものであった。柳田国男氏は同会の活動資金としてその著沖なわ文化叢説の印税を寄附した。なおい江朝助氏を会長とする沖なわ芸能保存会では先に読売ホールで琉球舞踊団発表会を公演、米軍駐軍で賑わい多大な好評を博した。

39　第197号　1949年4月25日

沖縄演劇文化研究所設立

現在職業芸能団体十有余劇場三十二ヵ所を擁して演劇運動の勃興が待望されること久しいが最近ようやくその機運が熱してきた感にありその一つの現れとして元文教校教官中今信氏を中心に沖縄演劇文化研究所が設立されることになった　同研究所は既に敷地を那は新市庁舎の東側に選定し事務所建造の運びにあるが観客二百めい程度収容する試演場　演劇図書室等の建造も計画されている同所では将来演劇人たらんとする研究生の参加を希望しているが今夏第一回の発表を□す予定　同所の事業は左の通り　△研究会日曜日午後二時―五時　木曜日午後六時―九時

40　第202号　1949年5月30日

軍政府主催　全琉球美術工芸展

既報の軍政府主催全琉球美術工芸品コンテストの詳細要項が発表された△右工芸品コンテストは一般と生徒の二種に分け陶磁器　竹製品　藁製品　絵画（油或いは水彩）漆器　玩具及び人形其他の各部に分けて審査を行う△締切　七月十五日　出品場所は各市町村長に依頼中　△原料は純島内産　製作品はアメリカ的スタイルや花模様等をさけ純琉球的な模様が望ましい　△審査は技巧　需要　単純性　特異性を規準とする　△賞品は百圓内五口特賞

41　第208号　1949年7月11日

蚕糸会社復活

戦前沖縄は昭和十一年から十五年までの五ヵ年間に六七二万一三七六瓦　価額一四八万一〇三圓の蚕種を移出、農産品の重要な移出品として農家経済に寄与すること多大なもの

があったが戦後施設並に優良原種を失い現在沖縄経済復興の重要なポストを擔う該業の促進は各方面から期待され且つ蚕種入手の道を失った日本蚕糸会の沖縄蚕種輸入再開の呼応と相まって養種輸出熱の高まっている折蚕糸関係者の結集により資本金三百万圓の沖縄蚕糸株式会社、仮称が七月一杯に発足する運びとなり目下設立準備を急いでおり製造に要する原蚕種薬品、蚕具の中日本より輸入必要分は貿易庁を通じ注文済みであるがなおこれをそく進し輸出目標二十五万瓦製造を達成するために左の事項につき経済部からミラーぐん政官を通じぐん政府へ　△日本より一万八千蛾（五千瓦）の原蚕種及び蚕具、薬品の輸入、その他施設、資材建物敷地の斡旋を申請した

42　第229号　1949年10月４日

糸満町　恒例の大綱引 旧16日相撲大会

旧八月十五日恒例の糸満大綱引は六日午後五時から町端大通りで挙行南北両勢は午後一時初校々庭に勢揃い、旗頭を先頭に各種団体の旗頭と共に二時校庭を出発町内を練り歩いて前景気をつけ白銀堂に勝運を祈願、現場に繰り込む、町内人口一五、三四五　四区まで南八区までが北で南が雌綱北が雄綱、長さは各々五十間、中心よりそれぞれ三間引寄せた方が勝、五時と共に両ぐんシタクを乗せて堂堂出陣、両ぐんに試合開始を宣するカニチ棒係は最も重要な役割であるが今年は南から阿波根よう賢氏、大城英次氏、北から上原牛蔵氏玉城益尚氏が選出された

43　第232号　1949年10月14日

史蹟を護ろう　軍も積極的に援助

成人教育課では史蹟の保存対策について去る十一日民政府会議室で協議したが　ぐん側からぐん情報教育部ブレイク夫人、民政府側から又吉副知事、島ぶくろ官房、山城文教、富名こし情報の各部長、安里成人教育課長　新里教連主事　原田図書館長　民間側から豊平良顕　仲座久雄　名渡山愛順氏が出席　ブレーク夫人は「名所旧跡の保存は沖縄にとって最も重要な仕事で博物館の充実も焦眉の問題でありぐんとしては本事業に対して援助を惜しまない」と首里城其の他の名所旧跡保存を強調　当日出席者一同が名所旧蹟保存会準備会を結成　本月中に保存会を設立する

44　第237号　1949年11月２日

まず石造建築物を保存　沖縄史蹟保存会発足

戦禍に荒廃した郷土の史蹟名勝古文化財並に天然記念物を現状のまま散乱さしては文化沖縄の面目上捨て置けない重大問題として民政府成人教育課の斡旋によって準備をすすめ

ていた沖縄史蹟保存会の結成式は去る三十一日午後二時より那覇市牧志町の沖縄青連本部事務所隣の那覇洋裁講習所で挙行　ぐん政府情報教育部ブレーク女史も臨席斡旋役の山城文教部長外成人教育課職員と民間約36名出席会則を審議決定後左記の通り役員を決定したが、したが、緊急を要する問題として石造建造物としての園比屋武御たけ、宗（崇）元寺石門龍たんれんごもよーどれなどの保存をはかることを決定ただちに事業へ着手する同会事業は会員の会費「年額五十圓」の外ぐん民政府の助成金そのた篤志家寄附によることになっているが同日出席のブレーク女史はいの一番に五十圓の会費を納入し一同を激励するところがあった　なお同会では各市町村に支部を設置しこれを全沖縄じゅう民の文化運動として展開する　△会長沖縄知事△副会長文教部長　美術家協会屋部憲氏　△じょうにん委員島ぶくろ全発氏外九名△委員四十九名△幹事仲座久雄外三名

45　第244号　1949年11月10日

文部省の芸術祭に琉球の“舞踊”と“音楽”　留学生は優秀者を・日越氏帰来談

東京に於て開催された厚生省公衆衛生院での獣医関係講習会にぐん公衆衛生勤務の當山真秀氏と共にぐん政府より派遣された民政府経済部日越國吉氏は一昨日八十日振りに空路帰郷したが講習会の模様につき

日本全国から集まった講習員と共に畜産と関係のある病理学や細菌学、上下水道検査、魚肉の検査等の実習研究及び見学等を行ったが沖縄の施設とは余りにもかけ離れすぎてどう処理するかが問題である

と語ったが、なお同氏は沖縄財団から寄贈された三万五千円分の獣医関係の書籍二百五十冊を持参した　日越氏の談によると文部省しゅ催の芸術祭に「琉球の舞踊と音楽」も参加することになり舞踊渡嘉敷守良氏、三味線池宮喜輝氏その他沖縄芸能保存会が中心となり十一月十五、十六の両日、日比谷公会堂で開催されることになっている更に同氏は沖縄係として外務省勤務の吉田嗣延氏の談として「沖縄からの留学生はもっと優秀なものを送ってほしい、文部省では来春ハイスクール出身者から一五〇名ぐらいを留学生として採用する話がありその世話人早坂氏が或は選抜のため沖縄に派遣されるのではないかと思われる」と語った

46　第248号　1949年11月15日

沖縄文化座談会

史蹟保存会では来る十七日午後二時から首里博物館で沖縄の古文化紹介等の沖縄文化座談会を開催する。

47　第266号　1949年12月６日

中城城址　米人遊園地に

五日午前九時三十分よりぐん政官府でセーファーぐん政官と志喜屋知事との初の事務打合せが行われたが中城々址の公園化について意見のこう換会が行われ中城々址にお土産品売店、休憩所など種々の施設をなし米人の遊園地とする計画で知事もこれが実現を急ぐことになった

48　第280号　1949年12月22日

琉球の唐獅子　近く軍政官府入口に

ぐん政官府では構内入口に琉球古来の名物である三尺ぐらいの大唐獅子をすえることになり工口課を通じ目下壷屋陶きに依頼目下製作を急いでいる　なお戦前首里城その他にどかっと据えていた唐獅子は殆ど全滅し今は語り草のみとなっていたが　再現は一般からさぞかしか親しまれるであろう。

49　第280号　1949年12月22日

名所旧蹟　史蹟保存会が選定

史蹟保存会では来る二十七日午後一時から民政府知事室でぐんより指示された名所旧蹟の選定及び標識についてじょう任委員会を開き具体的に打合せを行う。

50　第283号　1949年12月25日

優勝の金カップは　松田の獅子舞へ

ライカム米婦人会の主催で去る二十三日午後一時半より二時間に亘りクリスマスの行事として全部隊参加の仮装行列大会を開催、此の日沖縄代表としてさきに民政府より推薦された宜野座村松田区青年会の参加し延べ一キロに及ぶ大型車二トン半等の車両に装飾される五十余の各部隊及び米各種団体の腕よりの連中が意匠をこらして華美多彩なる大絵巻を展開したが沖縄代表の松田区青年会　獅子舞のローカルカラーが断然群を抜いて頭角を現し第一位に入賞　同会より金カップが授与され絶賛の拍手を浴びた。

51　第285号　1949年12月28日

新春を彩る　軍政府主催工芸品展　特別賞にミシン機１台

ぐん政府主催の全琉球工芸品展覧会はいよいよ新春一月五日より八日迄四日間にわたって新装なれる首里の琉球大学で開かれる　出品作品は陶器　漆器　織物　編物　ちょう刻　衣服　油画或いは水彩画其他の各部に分けて審査し優秀な出品にはそれぞれ賞品を送る

が各部を通じての最優秀品には特大賞としてミシン一台が贈られる　既に学童や一般からも続々出品があり北琉球から一〇六点　八重山から二十四点　宮古から二百点が送られている出品は一月二日迄に各市町村役所を通じて提出するように要望されており米琉人よりなる審査員の氏名は近く発表される。

52　第286号　1949年12月29日

お化粧いそぐ　中城々址　完成までにあと１年

ユーウェル軍商工部長はシーツ長官並びにセーファー主席ぐん政官の依頼で二十八日比嘉渉外部長を帯同、中城々址を視察したが城内の清掃はあと二週間もすれば完了、雑草を刈り取ったり石をおき変えたりするのに数日かかり子供の遊び場や土産品売店、果樹園、植物園も計画され完成までに一年も要する見込みでぐんの意向は出来上がり次第観光客を誘致する模様　ユーウェル氏は‘実に素晴らしい雄大な眺望で護佐丸愛用の井戸に水をたたえよ　石造門は古代ギリシャ　ローマの建築美に劣らぬ立派なものだ’と最大級の讃辞を繰り返し、称揚した　なお村当局では工事にあたってはぐんの援助を切望している。

53　第288号　1949年12月31日

希望と失意に明け暮れた　1949年よ！さよなら

戦禍にうちひしがれた荒涼廃きょの中に幾多の苦難を乗り越えて突進する復興への建設譜は明暗の二重奏をおりなし、今宵を最後に静かな終幕　希望と失意に明け暮れた一九四九年よ！再三の台風に苦難に満ちた一九四九年よ！さよなら！知念から那覇へ民政府を追ってたどりついた圓覚寺の巨鐘も民政府構内で待機久しぶりに那覇の夜空に百八煩悩解脱の除夜の鐘の音をおくるべくきのう撞木の取付け終り今は撞き手の篤志家を待っている。

４まとめにかえて――紙面から見れる米軍政府の「文化財観」

うるま新報創刊の1945年７月から1949年末までの54ヶ月間に刊行された288号にわたる紙面を対象に、今日で規定する「文化財」及びその周辺に関わる記事を拾いあげてみたところ上記の53件の記事が選出できた。

その記事の内容から本稿の目的である米軍政府の沖縄文化に対する関心や、戦後混乱時から復興時にかけての沖縄の文化財の状況について若干の考察を試みたい。その53件の記事の内容を一覧表に表したのが表１である。また、記事の内容を文化財の種別等の掲載頻度を表示したのが図１である。これらの図や表からつぎの４点の特徴をみることができる。

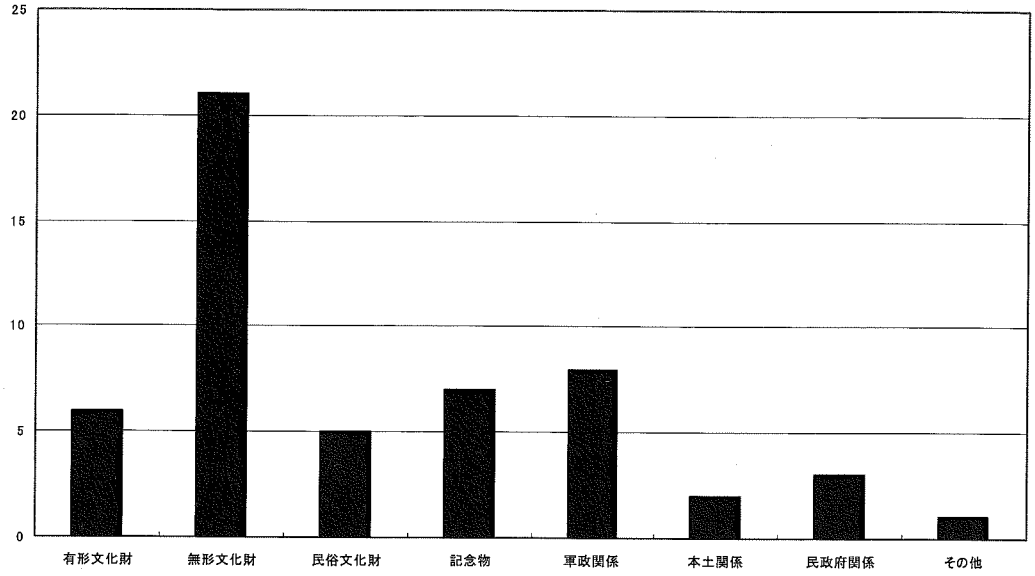
１点目は、無形文化財に関わる記事が全体の半数近くを占めるほど多いことである。無形文化財には工芸技術と芸能があるが、両者とも同じく10件を数え、両方に関わる記事が

表1 『うるま新報』に掲載された文化財関連記事一覧

No.	号	発行年月日	見出し	分類
22	108	47年8月15日	圓覚寺の巨鐘 比島から還る	A
29	129	48年1月9日	郷土芸術の誇り 向井文忠氏が沖縄博物館に寄託 自了・田名の逸品帰る	A
30	130	48年1月16日	鐘よ再び響け！ 那覇市民に朗話 埋もれた由緒の鐘発見さる	A
38	197	49年4月25日	沖縄文化の温存に在日本有志が大馬力 史料工芸品蒐集に資金募る	A
44	237	49年11月2日	まず石造建築物を保存 沖縄史蹟保存会発足	A
53	288	49年12月31日	希望と失意に明け暮れた 1949年よ！さよなら	A
			A データの個数	6
2	26	46年1月16日	期待さる壺屋の復興	B
4	29	46年2月6日	舞踊と米将兵	B
7	54	46年8月2日	沖縄演技いろいろ 五日の米独立祭を飾る	B
9	66	46年10月25日	芸能団確立し—三劇団俳優に審査制	B
11	82	47年2月14日	記者団沖縄へ 郷土古典芸能舞踊で歓待	B
14	86	47年3月14日	芸能界自活へ 芝居は四月から興行	B
15	90	47年4月11日	きかな、郷土芸術 紅型陶器舞踊紹介 米人側から好評博す	B
18	102	47年7月4日	大宜味芭蕉布も復活	B
19	105	47年7月25日	脚本募集 賑わう劇界	B
20	105	47年7月25日	梅劇団の美学	B
27	120	47年11月7日	蚕糸検定所近く設立	B
31	141	48年4月2日	松竹梅合同劇	B
33	164	48年9月10日	那覇の工芸展 溌らつたり復興色	B
35	165	48年9月17日	那覇工芸展 出品殺到す	B
36	170	48年10月22日	良き哉、芭蕉布	B
39	197	49年4月25日	沖縄演劇文化研究所設立	B
40	202	49年5月30日	軍政府主催 全琉球美術工芸展	B
41	208	49年7月11日	蚕糸会社復活	B
45	244	49年11月10日	文部省の芸術祭に琉球の“舞踊”と“音楽”	B
48	280	49年12月22日	琉球の唐獅子 近く軍政官府入口に	B
51	285	49年12月28日	新春を彩る 軍政府主催工芸品展 特別賞にミシン機1台	B
			B データの個数	21
5	34	46年5月15日	親川の獅子舞	C
6	48	46年6月21日	糸満名物爬龍船競漕盛況	C
34	165	48年9月17日	八月綱曳	C
42	229	49年10月4日	糸満町 恒例の大綱引 旧16日相撲大会	C
50	283	49年12月25日	優勝の金カップは 松田の獅子舞へ	C
			C データの個数	5
26	119	47年10月31日	中城城址を公園化しては だが然し経費は民で	D
32	153	48年6月25日	沖縄郷土史由緒の地 中城々址を公園化 米人遊覧者殺到、村民が美化作業	D
37	194	49年4月4日	首里城の石奪うなかれ	D
43	232	49年10月14日	史蹟を護ろう 軍も積極的に援助	D
47	266	49年12月6日	中城城址 米人遊園地に	D
49	280	49年12月22日	名所旧蹟 史蹟保存会が選定	D
52	286	49年12月29日	お化粧いそぐ 中城々址完成までにあと1年	D
			D データの個数	7
1	5	45年8月22日	仮沖縄諮詢会設立と軍政府方針に関する声明	E
8	62	46年9月27日	華麗なクリスマスカードで沖縄郷土色を紹介—軍政府委託で二万枚製作	E
12	85	47年3月7日	沖縄を理解せよ！各部隊に講座解説 意気込む米陸軍情報教育部	E
13	85	47年3月7日	沖縄占領初の報告 マ総司令部から発表	E
16	99	47年6月13日	高級美術作品初め 土産品販路を拡充 追々輸入雑貨なども取り扱う	E
17	102	47年7月4日	飛ぶように売れる 賑おう軍政府美術手芸品売店	E
21	106	47年8月1日	見事落第 新切手の図案に苦心	E
25	117	47年10月17日	売れる売れる沖縄みやげ	E
			E データの個数	8
23	115	47年10月3日	各界の学究を糾合沖縄文化協会生る 近く東京で”沖縄民芸展”を開く	F
24	115	47年10月3日	資料を蒐集 古美術工芸品も登録	F
			F データの個数	2
3	27	46年1月23日	沖縄教育部設立	G
28	128	48年1月3日	新しき沖縄の年中行事を制定 科学祭その他イロイロと	G
46	248	49年11月15日	沖縄文化座談会	G
			G データの個数	3
10	67	46年11月1日	嬉しや書籍一千冊 隣邦中国より寄贈 上海市教育局の厚情	H
			H データの個数	1
			総合計	53

凡例 A有形文化財、B無形文化財、C民俗文化財
D記念物、E軍政関係、F本土関係、G民政府関係
Hその他

図１文化財の種別等の掲載頻度状況



１件あり、総数で21件と最も多く紙面を飾っている。

２点目は軍政府の政策に関わる記事が多いことである。うるま新報が、軍政府・民政府の機関紙であったことからその紙面掲載の頻度は多くなることは当然予想されることであり、当然の結果として捉えられる。中でもその傾向としては沖縄の郷土色のアピールに取る組む米軍政府の姿勢が垣間見れて興味深い。この中には軍政府管轄の美術手芸品売店の活況ぶりの記事が３点報じられる。このことは、完成品としての美術手芸品以前にその製作に取り組む者に注目すれば、無形文化財の啓発・推進という側面もあり、分類的には「無形文化財」のカテゴリーに含めてもいいものもある。ただ、ここでは軍政府の政策的一面の方が強いと思われたので、その他の軍政府関連のカテゴリーに取り込むことにした。

３点目は記念物の話題が７件ある。うち、４件は中城城址のことで米人用の公園としての活用が叫ばれている。

４点目は有形文化財に関わることで、圓覚寺の巨鐘の返還や貴重な絵画彫刻が博物館へ寄託される話題など６件が含まれる。

ここでは、以上の４点の特徴を中心に米軍政府の沖縄文化に対する価値観、文化財保護に対する考え方、すなわち「米民政府の沖縄の文化（財）観」を検証してみよう。また、この時期は沖縄の人々による文化財保護・保存活動の動きが生じる時期と一致する。沖縄の人々にとっても文化財保護意識の芽生えがみてとれる。その契機のひとつが、沖縄史蹟保存会が結成されたことである。同会は石造建築物など記念物（史蹟名勝や天然記念物）の保存のために49年10月31日に発足した。沖縄側の文化財保護の動きも米軍政府の触発や、

民政府の牽引のもとに動き出すことになったのである。そのことは、戦争罹災のショックから少しだけ立ち直った沖縄の人々がやっと落ち着いて客観的に自らの周囲の社会状況、焼失した文化財などに目を向ける余裕がで始めるようになった、と理解されよう。

（1）軍政府の無形文化財への関心
―生活什器づくりの手わざ復興と人心ケアーのための芸能団設立

①工芸技術について

まず、53件のうち21件が無形文化財に関わる記事で全体の約半数を占める。無形文化財といっても中味は工芸技術と芸能に分けられるが、両者とも同じ比率で扱われている。工芸技術が10件、芸能10件、両者に関わるものが１件である。

工芸技術に関わる初出は、第26号（46年１月16日）掲載分で、壷屋復興の記事である。戦後ゼロからの出発時に、真っ先に食べ物を入れる容器や敷物などが必要であった。諮詢会では壷屋と兼城の関係者をまず最初に移動させ、什器生産を担当させる計画で軍政府関係者に移動要請を行った。そこで壷屋の一角が解放され、約30人で１組を結成し、城間康昌を隊長に戦後最初のやきものが作られることになった。

仲宗根源和メモでは、「45年12月５日、那覇壷屋に特殊業者（陶工職人）125人が移動」と記される。当時諮詢会工業部長の安谷屋正量談によると、同年12月15日には大城鎌吉を隊長とする製瓦業設営隊130人が入り、12月20日頃火入れ式を行ったとされる。

壷屋復興の記事は翌年１月に記された。壷屋の一部解放により、住民生活は什器の確保を目的に工芸技術の復興から始まることになったのである。

45年８月22日発行の「ウルマ新報」第５号には、「仮諮詢会設立と軍政府方針に関する声明」が掲載されているが、労働の項目に「沖縄古来の特殊技能を継続する事業を奨励し沖縄の新生活状態に相応しき新技能を啓発する事」とある。また、同声明の教育の項目には「後日高等の教育特に職業及び工芸教育制度を設ける事」（下線部筆者による。）とある。壷屋復興の措置は、什器確保という切迫の要因があるものの、「沖縄古来の特殊技能の継続する事業」として捉えられたにちがいない。また、後に述べる軍政府監督、民政府経営の美術手工芸品売店の設置や全琉美術工芸品展など工芸技術の振興のための競技展覧会の開催は、45年８月の軍政府方針に基づく施策の中で位置づけることができる。

軍政府主催の全琉美術工芸品展や工芸品展のコンテスト大会は、工芸技術の再興や振興を図る上で軍政府の苦心が見える催し物である。うるま新報第202号（1949年５月30日）に掲載された「軍政府主催全琉球美術工芸展」の出品要領では「原料は純島内産　製作品はアメリカ的スタイルや花模様等をさけ純琉球的な模様が望ましい」（下線部筆者による）と純粋な琉球産の工芸品産出を望む姿勢を打ち出している。その背景には、民政府美術手

芸品売店の経営が成功し、軌道にのったことがあげられる。これら売店は米軍関係者への販売を中心にしたものであったから、アメリカンスタイルよりは、彼らにとってエキゾチックな純琉球仕様のスタイルや模様が好ましかったのであろう。売店は軍政府、泡瀬、嘉手納の３ヵ所の設置からはじまった。これら売店は1947年６月16日から開店し、約１千点の品揃えで、初日の売り上げが額は数百弗と伝えられる（第102号・47年７月４日）。より沖縄的特徴を全面に押し出すことによって沖縄産出の土産品としての付加価値がつくことを米軍政府は奨励した。ちなみに、これら売店の小売価格は一般の流通価格より６割から10割の割り増しの価格が設定されており、その差額が民政府予算として繰り入れられた。

②芸能について

一方、もうひとつの無形文化財である芸能については工芸技術の振興とは大きく事情が異なった。諮詢会（民政府）文化部によって芸能団が設置されたからである。芸能団の設置目的は、軍や住民慰問を行うことにあった。さらには郷土芸能の振興にあった。46年２月６日付け第29号の紙面では、舞踊団は文化部の肝いりで発足し、米軍将校や住民の慰問巡演を行っている現場レポートが報じられている。また、46年10月16日には、適格審査に基づき、３つの劇団（３ヵ所）が設立され、郷土芸能の向上と民衆慰安に本格的に乗り出すことになった。劇団構成員である芸能音楽家に対しては、民政府文化部長により責格証明書が交付された。その数は50名（第66号・46年10月25日）。梅劇団（伊良波尹吉団長以下16名）、松劇団（島袋光ゆう団長以下16名）、竹劇団（平良良勝団長以下18名）の３劇団の本拠地は梅が知念、松が石川、竹が羽地と、沖縄本島を島尻・中頭・国頭の３地域に均等に配置し、住民に対して無料興行がなされた。劇団員の身分は民政府職員として位置づけられ、民政府予算から給料の手当がなされたのである。

戦争による傷痕癒えぬ民心のケアーこそが彼らに課された最大の使命であり、民政府にとっても、その監督官の軍政府にとっても、傷ついた人心の安寧を如何に図るかということが火急の課題であったといえそうである。

世の中が一段落付き始めた47年１月以降、劇団による歌舞劇の入場料は従来の無料から有料化へと移行される。47年３月14日付の第86号では、1ヶ月あたりの入場料実績が５回興行で28,817.7円の収入があったと報じられる。１回あたりの平均的興行額はざっと5,700円程度であったことがわかる。

そこで、民政府は軍政府指令に基づき４月１日以降の芸能団の人件費を削除し、すなわち民政府職員としての身分を解雇し、実質的に３つの劇団は民政府から独立した個人経営による劇団としての道を歩むことになった。

観劇の入場料は大人15円、子ども10円であったこと（注２）から１回あたり300名程度

の入場客を数えたことになる。

ところで、この入場料収入がどの程度の額であろうか比較してみよう。当時、花形的職種といわれた軍作業員の時間給が46年４月17日付けうるま新報第39号で記されている。この制度は46年５月１日から施行されることになったが、最高額が養成所教師・通訳・翻訳業務で2.30円。最低は非熟練労務者の普通労務者（普通人夫、農耕夫、造林夫、家事使用人女中洗濯婦料理人當男女、小使、下水人夫、徒弟）が60銭であった。したがって、１日８時間労働月25日間労働で換算すると、最高月額の場合460円、最低月額では120円となる。

しかしながら、演劇を取り巻く状況は決して甘くはなく、衰微沈滞化の状況にあった。民政府が設立を主導した手前、たとえ民営化された劇団とはいえ、そのような状況を看過することができなかった。その原因の１つを民政府は脚本の貧弱さからくるものと分析する。そこで、その打開のために第１回芸術祭用の演劇脚本を破格の１千円の１等賞金を掛けて募集したのである。題材は、軍政府を意識した内容にならざるを得なかった。テーマは「再建沖縄を表現し民主主義なるもの、軍国主義的封建主義的なもの敵国人権の不平等卑猥なるものは不可」というものであった。

戦後の芸能に関わる無形文化財は、人々の慰安という目的で始まった。工芸技術・芸能と無形文化財の技芸は戦後の復興期に時代の求めに応じ、その第一歩を歩みだしたのである。前者はまず、人々の什器の確保からはじまり、また沖縄に駐留する米人の土産品産業を支える技術として振興が図られた。また、後者は、沖縄人の傷心を安寧させる目的で、官営の劇団が設立されたのである。そのどちらにも米軍政府の戦略上の政策が反映されることになった。そして、軍政府の沖縄文化に対する価値観は、土着文化をアピールすることにあり、それこそが付加価値であるという認識であった。その認識のひとつを表す事例がクリスマスカード製作のエピソードにみてとれる。米軍ピーエックスは本国にクリスマスカード30万枚を注文するところ、クレイグ副長官からストップがかかった。民政府は同副長官の肝いりでそのうちの２万枚のクリスマスカード調達の仕事をもらうことになったのである。文化部で原画の絵を描き、工業部で商品化することになった。美しい沖縄の風土蒼空にくっきりと抜き出る棕梠に沖縄独特の草花を配したものや郷土玩具のチンチン馬小、ウツチリクブサー、今は思い出となった首里城の守禮門を描きだしたカードがそれである。沖縄駐留のための将兵が郷土の人々に送るために使用されたのである（46年９月２７日・第62号）。

（2）史蹟「中城城跡」の遊園地化と沖縄史蹟保存会の結成

米軍や軍政府の関心は無形文化財のみではなかった。休息日に家族で出かける公園や遊園地の確保は、軍政府にとって重要な懸案事項であった。将兵に対する福利厚生の充実こそは、将兵のストレスを解消する上で必要な措置であったからである。そこで、注目されたのが、軍司令部から目と鼻の先にあった中城城跡であった。

ウルマ新報の紙面上では記念物に関わる記事を７点拾い上げることができる。うち、４点が軍政府側からの中城城址の公園化・遊園地化の要望に関わるものである。

その初出は47年10月31日の第119号の紙面であった。10月15日軍政府将校が「歴史上由緒ある中城城址一円を沖縄の絶勝地として国立公園にしたら如何」というクレイグ副長官の意向が志喜屋知事に通達された。しからばと、知事がその整備経費は軍の方でご負担いただきたいとお願いしたら、アメリカのワシントン生誕地の例をたとえに、人々の寄附を活用するなど民政府で名案を考えてほしいと、うまく逃げられてしまった。この時すでに中城城址は毎週土日曜日は米軍将兵やその家族の遊園の地となっていたのである。戦後沖縄で最初にできた公園は、中城城址であった。続報の48年６月25日付けの第153号では、日曜日に２百人を下らない米人が訪れる状況が伝えられる。草も伸び放題の状態に北中城・中城両村の児童生徒や役場職員によって美化作戦が展開されたことが報じられる。

軍としても、米将兵によって沖縄の貴重な史跡が汚されることに危機感をいだきつつある時期であったかもしれない。民政府成人教育課では、49年10月11日に民政府会議室で史蹟の保存対策について協議がなされた。軍側からは軍情報教育部ブレイク夫人が出席、民政府側から又吉副知事、島袋官房、山城文教部長、富名腰情報部長、安里成人教育課長、新里教連主事、原田図書館長、民間側から豊平良顕、仲座久雄、名渡山愛順氏が出席した。席上、ブレーク夫人は「名所旧跡の保存は沖縄にとって最も重要な仕事で博物館の充実も焦眉の問題であり軍としては本事業に対して援助を惜しまない」と首里城その他の名所旧跡の保存を強調した。当日出席者一同によって名所旧蹟保存会準備会を結成されることになり、10月31日に沖縄史蹟保存会（会長知事、副会長文教部長）を設立する運びとなった(49年10月14日・第232号)。「戦禍に荒廃した郷土の史蹟名勝古文化財並に天然記念物を現状のまま散乱させては、文化沖縄の面目上捨て置けない重大問題として」の認識によるものであった。

この戦後初の本格的な文化財保存保護の民間組織の結成は、後の琉球政府文化財保護法成立の伏線になるものとして意義づけられる。当時、保存会の組織化にあたっては民政府文教部成人教育課があたり、その斡旋によって実現した。が、その背景では軍政府の強力な指導があったものと思われる。また一方で、民間側の動きも確認しなくてはならない。首里市文化部出身で戦後いち早く首里市立郷土博物館づくりに奔走した豊平良顕をはじめ、

琉球建築に造詣の深い仲座久雄、画家名渡山愛順氏がこの組織の主要メンバーに加わっていたからである。沖縄の知識人・文化人が文化財を取り巻く現況ついて危機意識を持っていたことも組織設立の背景の一面として捉えなくてはならないと思われる。

軍情報教育部の「本事業に対しては援助を惜しまない」という言質は保存会の結成にあたり、財源的な裏付けを与えるもので、その実質的活動にとって追い風になった。早速、緊急を要する問題として石造建築物としての園比屋武御嶽、崇元寺石門、龍たん、よーどれなどの保存を図ることが決定され、直ちに事業へ着手することになったのである。

（3）有形文化財の返還と博物館への資料寄贈

沖縄県立博物館は、現在梵鐘・銅鐘を12口所蔵している。そのすべてが国・県指定文化財（工芸品）である。その中でもっとも迫力のある巨鐘が旧円覚寺楼鐘である。この鐘は県内最大の梵鐘である。高さ206cm、口径119cmもある。ゆうに１トンは越えるものだと思われるが、誰もその重量を計ったことはない。この鐘は1978年（昭和53）に国指定重要文化財に指定された３つある旧円覚寺の鐘のひとつである。

現在その鐘は、当館前庭の鐘楼に吊り下げられる。年１回、11月３日文化の日のみ、「円覚寺の鐘を鳴らす会」という団体によって夕方からの一時、一般市民に解放される。かねがね、どうしてこの重要文化財だけ外に設置されているのか疑問であった。もともと楼鐘であるから、外の鐘楼につりさげられるのが自然であると云われればそうである。

実はこの鐘は、戦利品としてフィリピンのマニラへ渡り、もどってきた梵鐘である。軍政府初期の海軍統治時代の教育部長であったハンナ少佐が帰国の途、マニラでこの鐘を発見し、返還されたと聞く。「沖縄民政府会議録」によると、1947年９月に返還され、志喜屋知事が受領書にサインしている。

うるま新報において、有形文化財に関わることで記事になったのは、この鐘の返還が初めてである。47年８月15日付けの第22号では、つぎのように報じている。

８月22日の軍政府政治部長レイトン中佐の談に依れば、この巨鐘は現在フイリピンに健在し、米海軍軍政府管下時分に腕に錨を入墨した海兵隊が戦利品としてフイリピンに持って行ったが、今度軍政府の斡旋により郷里沖縄に帰り、住民と相見えることになるとのことだ。民政府では大典寺跡に残存する鐘楼を民政府庁舎前のロータリーに移し、この巨鐘を吊し時鐘にするとのはなしである、と。

49年12月31日付け第288号では、「知念から那覇へ民政府を追ってたどりついた円覚寺の巨鐘も民政府構内で待機、久しぶりに那覇の夜空に百八煩悩解脱の除夜の鐘の音をおくるべく、きのう撞木の取付けが終り、今は撞き手の篤志家を待っている」と報じられる。この鐘は1953年に龍潭湖畔の民政府立首里博物館に移管された。

『琉球教育要覧』（1955年度版）によれば、1954年当時の首里博物館の観覧者及び収蔵品状況はつぎのとおりとなっている。琉球人34,949人、外国人2,682人、日本人1,963人。収蔵品数は、1,387点である。戦後石川市東恩納に設立された戦後最初の陳列館（博物館）であった沖縄陳列館は翌年民政府所管になり東恩納博物館と名称を変更した。また、同じ頃、首里市によって首里汀良に設立された首里市立郷土博物館も民政府に移管し、沖縄民政府立首里博物館と改称される。1951年当時の首里博物館の収蔵資料では639点の資料が重要美術品として数えられている。46年の創設から２年後1948年頃、博物館は破壊を免れた古美術としての文化財の資料収集に奔走した。1948年１月９日付けの129号では、民政府博物館課の課長山里永吉が大島まで駆け回って、貴重な資料の寄託・永久貸与の約束を取り付けたことが報じられている。名瀬市の向井文向氏資料87点が首里博物館に寄せられたというのだ。王府時代の琉球画壇を代表した自了や田名宗経の菩薩像などの貴重な資料が他県のコレクターの理解と協力により沖縄に戻された。

（4）本土側の動き・沖縄の動き

この他府県からの援助の手助けは向井氏のみにとどまるものではなかった。沖縄救済の目的を兼ねて東恩納寛惇や仲原善忠など東京在住の沖縄出身著名文化人が中心となって、柳田国男、折口信夫、新村出、田辺尚雄、柳宗悦、稲垣国三郎氏など沖縄研究の権威を網羅して沖縄文化協会が設立されたのである。1947年10月３日付けの第115号では沖縄文化協会の発足につき、志喜屋知事あて便りがもたらされた、と報じている。同会は沖縄古典の蒐集にあたり、（球陽）の復刻や、折口信夫氏の講演、柳宗悦等が沖縄民芸関係の展覧会を催し沖縄文化の紹介に乗り出した。また、49年４月25日付けの第197号では、沖縄文化協会が結成され、沖縄の文化資料の蒐集について日本は勿論、米国にまで範囲を広げるべく野心的な活動を開始し、現在おもろの原本ペルリ日記原書も入手したとされる。また、同会の財政的な支援について、柳田国男氏は同会の活動資金としてその著作である沖縄文化叢説の印税を寄附した、と記される。

多くの他府県出身の沖縄研究の先人たちらによって、戦後沖縄の教育文化の振興が支えられたのである。

その一方、沖縄側の動きは、郵便切手・葉書の図案がすべて12世紀から1879年まで琉球を支配した王朝（尚家）の象徴する左３ツ巴や王冠、黄金のかんざし、守禮門など王朝文化に因んだもので、時勢にそぐわず人民とは無縁のものとの理由で復古調すぎるということで軍政府の承認をもらえなかったりと、軍政府の考え方に翻弄される状況がみられた。

これらの53件の記事が戦後の文化財やそれをとりまく社会状況を忠実に反映していると

はいいきれない。が、少なくとも情報が限定された戦後の混乱期において、うるま新報の報道は米軍政府や沖縄民政府の機関紙として、たとえ検閲などの制約や制限があったことをさしひいて考えても、またその時代の世相を語る資料として断片的であったとしても、終戦当時の社会の混乱状況や文化財を取り巻く社会の状況を知る上で、一級資料として位置づけらよう。

戦後４年半の沖縄の状況下で、文化財の世界において工芸技術や芸能に関わる無形文化財の復興がいち早く行われたことは大変興味深い。壷屋の復興は什器確保という実生活の必需品の調達として手わざが求められた。また、松竹梅劇団の官営劇団の設置は、人心の安寧を求めるためのものであった。そのどちらも米軍政府によって手始めにやらなければならなかった人心安定政策の一環としての戦後処理施策のひとつとして位置づけられるものといえそうである。また、中城城跡の保存に関しては、史跡としての文化財の保存というよりは軍人やその家族の遊園地として捉えられた。いうなれば、福利厚生施設のひとつとしての公園整備が米軍からいち早く要望がだされたことは意外と知られていない。この米軍の史跡観すなわち、文化財保護法で今日提唱される「保存活用」への関心が、沖縄史蹟保存会設立の契機の一因になったといってよい。軍政府の所管は情報教育部、民政府は文教部成人教育課であった。志喜屋知事を会長に、県下市町村に支部を置く本格的な全県組織であった。同会の手始めの仕事は、園比屋武御嶽や崇元寺石門などの石造建造物の保存を図り、緊急に修理する事業の採択であった。戦後４年後の1949年10月31日の沖縄史蹟保存会の結成こそは、戦後の文化財保護胎動期のもっとも大きな動きとして捉えられる。

戦後いち早く復活した糸満の爬龍船競漕や獅子舞、八月綱曳など全島で民俗行事が復活している様子がわかる。民俗文化財に関わる記事は５件しか掲載されていないが、それらは糸満や田井等など地方特派員常駐地近辺からの報告によるものである。特派員が不在の地域や遠隔地域など取材が困難な地域などの行事は取材不能であったため記事として掲載されなかったのであろう。

戦後の混乱期に米軍は沖縄の統治政策を模索し、沖縄住民による民政府も米軍の方針を一つずつ見極め確認しながら、復興に向けて歩むことになったが、残欠の文化財処理を含めた沖縄の文化財保護に対する考え方は両者に隔たりはなく、むしろ軍政府がより積極的に沖縄らしさを強調する傾向にあったといえそうである。

注記

注１　「沖縄県の文化財保護史―昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に」『沖縄県立博物館紀要』第26号（2000）　148―149p.p

注２　1951年３月21日付けの松劇団提出の「興行届」には税込みで大人拾五円、小人拾円と記される（当館所蔵伊藤氏寄贈資料）。

参考・引用文献

『縮刷版うるま新報』第１巻　1999年４月28日　不二出版

『縮刷版うるま新報』第２巻　1999年５月20日　不二出版

安仁屋政昭編著『沖縄戦再体験』1983年４月25日　平和文化

新崎盛暉「米軍占領下『うるま新報』」『縮刷版うるま新報』第１巻　1999年４月28日　不二出版

園原　謙「沖縄県の文化財保護史―昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に」『沖縄県立博物館紀要』第26号　2000年３月31日沖縄県立博物館

上江洲敏夫「破壊された文化財と還ってきた文化財」『甦る沖縄―戦災文化財と戦後生活資料展』（図録）1995年6月20日　沖縄県立博物館

沖縄県立博物館紀要　第27号　113－129，2001

特別展　「日系移民１世紀展」の教育プログラム

仲　底　善　章
(沖縄県立博物館)

A Note of educational programs related with Special Exhibition
"One Century of Japanese Emigration--From Bento to Mixed Plate"

YOSHIAKI NAKASOKO
(Okinawa Prefectural Museum)

１はじめに

当館では本年度教育普及事業として、特別展開催の関連事業「教育プログラム」を初めて実施した。

従来、当館における「展示会」の関連事業は、講演会や各種の舞台発表など、来館者を対象とするサービスであった。「博物館の展示は、より多くの人々へ還元を！」をスローガンに実施すべきであると考え、様々に検討した結果、特別展開催の関連催事として、三つの教育プログラムを試みた。

以下当館が実施した教育プログラム実施について報告したい。

２教育プログラムの概要について

今回、当館が、特別展開催の関連事業として実施した「教育プログラム」は以下の３つである。

まず、１つめが特別展開催期間中の来館者サービスの、より一層の向上を図る目的の展示解説ボランティア養成プログラムの開催である。このプログラムは特別展開催３ヶ月前からスタートし、３回の学習会を実施した。展示会の趣旨をはじめ、展示資料一点ずつの理解、３回目の講義では実際に展示されている個々の展示資料を追いながら展示解説ができるようになるまでの知識を収得する学習プログラムである。

本プログラムの最大のメリットは、担当学芸員とボランティアが知識を共有し、互いの知識を補足する点にある。様々な疑問を投げ合うことにより、ボランティア自身が最初のモニター（来館者）になることは、学芸員にとっては大変有意義であり、展示評価を行う上でひとつの目やすを提示することになった。

２つめに教育機関とタイアップした指導者向けへの展示オリエンテーションプログラムの開催である。これは展示会開催前に、学校や社会教育施設等の引率者を対象に、展示会の意義・概要などを説明し、展示会に対する理解を促進するための館内スタディーツアーの実施である。

そして３つめには、小学校や中学校及び児童館・公民館などの社会教育団体と博物館が連携・協力して、それぞれの機関が目的とする教育内容に則した学習プログラムを立案する「教育プログラム」の実践である。

このプログラム」では、①特別展「日系移民１世紀」の見学のためのプログラム　②博物館の有するさまざまな機能を、小・中・高等学校における「総合的な学習の時間」の活用例としてのプログラムの開発、③沖縄の自然・歴史・文化の殿堂としての博物館を活用した「総合的な学習」の場としてのプログラムの開発、の３つを試みた。

那覇市立城東小学校の６学年、総合的な学習の時間「国際理解：世界に広がるウチナーンチュ」、那覇市立久場川児童館「迷路の奥に沖縄発見！」実行委員会、那覇市立大名児童館「特別展　日系移民１世紀展をみよう」である。

その他に、那覇市立石嶺公民館の依頼による「親子寺子屋講座：博物館の見学」の中でも、本教育プログラムを活用した実践を行った。

資料１

特別展「日系移民１世紀」展
教育プログラム実施要領

１目的

この要領は、ハワイ移民100周年記念特別展「日系移民１世紀展」に係わる教育プログラムで、博物館教育と学校教育の密接な連携を試みるためのものである。従来、博物館事業は、展示活動を中心とするものであったが、近年の地域学習や生涯学習の中で高まる社会教育施設としての多様な活動が求められている。

このたび、当館では教育プログラムの先進的な米国の全米日系人博物館の協力を得て、初の本格的な学校と連携した博物館の教育プログラムを実施し、展示のより一層の理解の促進及び展示の背景にある歴史的・文化的なものを含めた総合的な学習を試み。博物館と教育関係団体の有機的連携をめざす契機とする。

２主催　　沖縄県立博物館、全米日系人博物館

3 後援　那覇市教育委員会・金武町教育委員会・沖縄県小学校社会科研究会

4 方法

ハワイ移民100周年記念「日系移民１世紀展」の展示会を活用した授業内容とする。授業やその指導案作成については、当館学芸員と参画する各教育機関（小・中・高等学校及び児童館や公民館など）の職員と個別に行う。

授業は、事前学習・展示会学習・総括学習で構成し、所要時間は各教育機関の状況に応じて弾力的に設定する。実際の学習においては、当館学芸員及び当館教育ボランティアと各教育機関の担当者が連携を図り、児童・生徒の実態や学習内容に応じて様々な形のティームティーチングを試みる。

5 対象　小・中・高等学校などや児童館・子供会・学童クラブを対象とする。

6 期間　特別展開催期間中及びその前後

7 その他

当事業の推進にあたり次のことに留意する。

①学習内容については、全米日系人博物館、森茂岳雄氏（中央大学教授）・中山京子氏（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）の協力のもと、当館教育プログラム担当者と当該教育機関担当者で個別に検討会議を設定し、指導案を作成するものとする。

②児童・生徒の移動に関しては、それぞれの教育機関で対応していただく。

③事業終了後、反省会議をもち、実践報告書を作成する。

④本事業参加の児童・生徒の当館への入館については、入館料を免除する。

資料２

特別展「日系移民１世紀」展
教育プログラム実施計画

1　主な内容

当館では特別展「日系移民１世紀」展を開催するにあたって、教育プログラムの先進的な米国ぼ全米日系人博物館の協力を得て、本格的に学校と連携した博物館教育プログラムを実施することにより、展示のより一層の理解促進、及び展示の背景にある歴史・文化を含めた総合的な学習を進め、博物館と教育関係団体のさらなる相互活動を展開するため。

(1) 特別展「日系移民１世紀」展の展示内容を活用した活動

(2) 沖縄の自然・歴史・文化の殿堂としての博物館を活用した「総合的な学習」の場としての活動

(3) 学校・社会教育施設等の引率者を対象とした「博物館スタディツァー」の開催

(4) 博物館職員と各教育団体職員によるティームティーチングを活用した指導方法の試み

(5) 作成した教育プログラムは、実践報告書として、各教育期間等に配付する。

2 教育プログラム参加予定教育機関

那覇市立城東小学校、那覇市立首里中学校、那覇市久場川児童館
那覇市立石田中学校、金武町立金武中学校、沖縄県小学校社会科研究会

3 期　間　　特別展開催期間中及びその前後

(1) 各教育機関の実施についてはそれぞれの教育機関と調整して実施する。

(2) 「博物館スタディツァー」は11月５日（日）午後２：００～４：００で実施

4 実施方法

博物館職員と各教育団体職員によるティームティーチングを活用して行う。

(1) 各教育機関施設内での事前・事後の主たる指導は当該施設職員が行う。
（但し、指導内容によってはこの限りにあらず）

(2) 博物館内の指導は、博物館職員及び博物館教育ボランティアが行う。

5 役割分担

総括責任者……前田教育普及課長
主担当……仲底
副担当……園原・太田
教育プログラム指導案の作成……各教育機関担当者・仲底
※ 指導案作成に関しては、全米日系人博物館、森茂岳雄氏（中央大学教授）中山京子氏（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）の協力をお願いする。
教育プログラムに伴う児童・生徒の移動……各教育機関
教育プログラムの実践……各教育機関及び博物館職員
博物館教育ボランティア
教育プログラムの実施の反省……参加教育機関の代表及び関係

する博物館職員

教育プログラム総括反省会……仲底及び関係者

資料３

「博物館スタディツァー」実施計画

１　目　的

社会教育団体の引率者を対象に、特別展「日系移民１世紀」展の事前の学習会を開催することにより、教育プログラムのより効果的な活用を図る。

２　主　催　沖縄県立博物館

３　後　援　沖縄県小学校社会科研究会

４　対　象　県内の小・中・高等学校の教諭や児童館や子供会等の社会教育施設の指導者

５　期　日　平成12年11月５日（日）

午後２：00～４：00

６　場　所　沖縄県立博物館

７　当日の日程

(1)　受　付　　午後１：45～２：00

(2)　開会式　　午後２：00～２：10

司会（仲底）

開会のことば・・・・前田教育普及課長

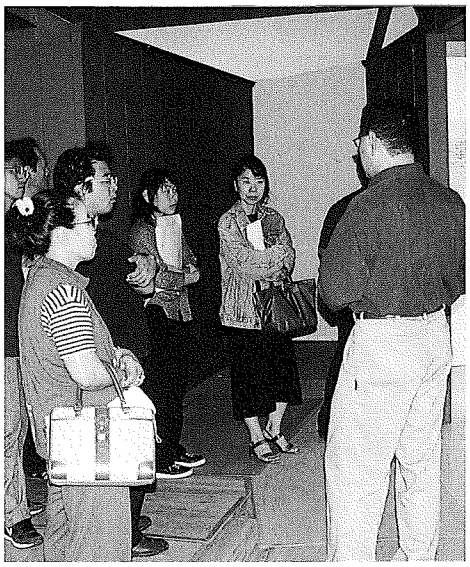
館長あいさつ・・・・平田與進館長

(3)　博物館スタディツァー

午後２：10～３：50

教育プログラムの趣旨・別展の内容説明、

質疑・応答・・・・・・園原外



博物館スタディツアー

(4)　閉会式　　午後３：50～４：00

司会（仲底）

閉会のことば・・・・・・・・・・・・・・・・・・前田教育普及課長

８　その他

本事業参加者の入館については、入館料を免除する。

3　教育プログラムの実践例
その１
展示解説ボランティア養成プログラム実施要項

沖縄県立博物館
博物館ボランティア会

１　目　的

ハワイ移民百周年記念特別展「日系移民１世紀展」開催期間中の、来館者サービスのより一層の向上を図ることを目的とする。

２　内　容

展示会開催前に展示会の趣旨理解、展示資料についての解説学習、実際の展示資料を追っての実践的解説プログラム学習を実施する。

３　日　時

(1)　平成12年９月20日（水）　午後２：00～５：00
　　展示会の趣旨説明と展示構成

(2)　平成12年10月11日（水）　午後２：00～５：00
　　展示資料についての学習会

(3)　平成12年11月８日（水）　午後２：00～５：00
　　展示された資料を追って実践的解説学習

４　参加者　沖縄県立博物館登録ボランティア

５　講師　園原　謙　（移民展担当学芸員）
　　三木美裕　（全米日系人博物館教育部部長）

その２
教育プログラム
「迷路の奥に沖縄発見！」

久場川児童館：迷路づくり実行委員会
沖　縄　県　立　博　物　館

１　趣　旨

本教育プログラムは、久場川児童館と沖縄県立博物館とが協力して行う事業である。

特別展「日系移民１世紀展」を機会に展示に関する教育プログラム「迷路の奥に沖縄発見！！」を実施することによって、博物館の有する機能を積極的に他の教育機関に利用して頂き、今後の博物館活動の指針とする。

2　**協力機関**

沖縄県立博物館、那覇市立久場川児童館、沖縄県立博物館ボランティア会

3　**実施期間**　　平成12年11月５日（日）　～　平成12年11月26日（日）

4　**内　容**

久場川児童館が企画する、「久場川児童館ふれあい体験事業・迷路づくり」に、今回の特別展「日系移民１世紀展」や常設展の自然史室及び民俗室の展示を生かす、学習プログラムとする。

5　**参加者**　久場川児童館　：迷路づくり実行委員会委員　玉那覇有和外９名

職　員　真栄城恵子館長外３名

沖縄県立博物館：仲底善章、伊波悦子、柏木祐

：沖縄県立博物館ボランティア会

6　**主な日程**

11月５日（日）　午前10：00～11：30

迷路づくりのイメージづくりのための事前学習のスタディツアー：博物館

11月11日（土）　午後４：00～

迷路のイメージづくり：久場児童館

11月12日（日）　時間は後日調整

迷路づくりの資料収集の為の特別展見学

：県立博物館

11月13日（月）～11月22日（水）

迷路づくり、必要に応じての特別展見学

：久場川児童館・県立博物館

11月23日（木）～11月26日（日）

迷路探検ツアーの開催：久場川児童館

12月２日（土）

迷路づくり総括反省会：久場川児童館

7　**その他**　実行委員の特別展見学については、教育プログラム参加者扱いとし、無料とする。

迷路探検ツアの参加者

実施状況

久場川児童館が実施する「迷路づくり」に、博物館の担当者も企画・立案の段階から関わり、県立博物館が有する写真・パネル資料を提供した。また、迷路も博物館の展示手法

を生かすような工夫をした。ダンボールで迷路をつくる作業に計画よりも時間がかかってしまった。バザーなどの出店も行ったので2000名余の参加者を得ることができた。

成果と課題

(1) 成　果

・博物館の特別展開催準備と同時進行で行ったが何とか予定どおりの日程で実施することができた。

・博物館資料を活用することによって「迷路」がより明確なテーマをもった内容にすることができた。

・博物館と連携した活動を、今後とも実施するための手がかりを得ることができた。

(2) 課　題

・　博物館の年間事業計画と連動した学習プログラムの企画・立案の為に、お互いが継続的な話し合いを続けること。

・　２つの館がこれまでに築き上げてきた成果を生かしたプログラムづくり

・　体験用に貸出ができる博物館資料の更なる充実。

・　担当者のみでなく、全職員で対応できる組織づくり。

その３
教育プログラム
「総合的な学習の時間」実施計画

那覇市立城東小学校６学年
沖縄県立博物館
全米日系人博物館

単元名　【世界に広がるウチナーンチュ】

１：単元の目標

(1) 「移民の学習」を通して、わたしたちの暮しが世界の人々と深く結びついていることに気づかせ、同じ地球に生きる人間として、協力し合って生活することの大切さを理解させる。

(2) 博物館での見学を通して，自分の学習課題について、自ら進んで学ぼうとする態度を身に付けさせる。

(3) 博物館を活用した恒常的な「学習活動」の機会とする。

２：単元について

(1) 教材について

県立博物館において実施される、特別展：ハワイ移民100周年記念「日系移民一世紀展」を機会に、「博物館の見学」を取り入れた学習を展開することによって、「博物館の活動」について、理解を深め、学習の場としての博物館利用の仕方やマナーについて学習する。

本単元を通じて、「総合的な学習の時間」における博物館利用の仕方を児童・生徒が主体的に学ぶ方策を探り、博物館と各教育機関が日常的に交流する機会とする。

単元指導の際には、博物館職員と各教育機関が連携を取り、児童の実態や学習内容に応じて、様々な形のテームティチングを試みたい。

(2) 児童観について

城東小学校６年生は、遊びに関してはとても明るく行動的である。しかし、学習になると消極的で指示待ちの姿勢が多く見られ、「自ら課題を持ち、積極的に課題を追求し、発表する力」が備わっているとは言えない。

保護者へのアンケートでも「追求する力、発表する力が少ない気がする。」という意見があがっている。

そのことから学年目標に「しっかり判断して行動する子」を掲げ、日々の生活の中で自ら問題意識を持つよう指導を進めているところである。

地域に見ると、県立博物館・石嶺公民館、首里図書館などの施設には恵まれているが利用することがあまり見られない。

そこで今回博物館で行われる、特別展「日系移民１世紀展」を教材にすることにより、地域にある施設を活用して、課題追求する力を児童に身につけさせていきたい。

また私た　ちの沖縄が、地理的にも文化的にも世界でどのような位置にあるのかを学習して行く中で、「自らの問題意識を持ち、課題を追求していく態度」を養う。

(3) 指導観

本単元の指導においては、体験的な学習や問題解決的な学習を通して主体的に課題をつかませたり、物や人と積極的に関わっていく中で、自己の学習課題に深く追求し、追求の楽しさを味わせたい。

イメージの段階では、「総合的な学習の時間」が自分の追求したいこと＝学習課題を自分で見つけ、友達や回りの様々な方、地域にある様々な施設＝図書館（学校、那覇市・沖縄県立）や博物館等の社会教育施設、インターネットなどの通信情報システムなど活用して、学習が進められることを理解させる。

また、グループに分かれて過大に沿って追求の方法や調べたことの発信の仕方を話し合わせ学習計画を立てさせる。そのことによって、ひとり一人の活動が明確になり、主体的な行動ができるようになる。

出会いの段階は、博物館で行われる特別展「移民展」の見学を通して、各自で学習課題を見つけ、課題追求への見通しや学習方法について理解を深めさせる。

追求の段階は、グループや各自で自分ができる学習方法で、それぞれで課題追求することになる。この段階では、個々で時間確保をして、調べ活動に入ることになる。

この場合、教師集団のみでは対応することができなくなるので、父母や地域の人材を活用しての活動ができるような学習環境の整備が重要になってくる。

発信の段階では、それぞれの学習課題にとって一番良い発信はどんなふうに行えば良いかを検討し、より有効的な方法で発信できるように工夫をさせる。

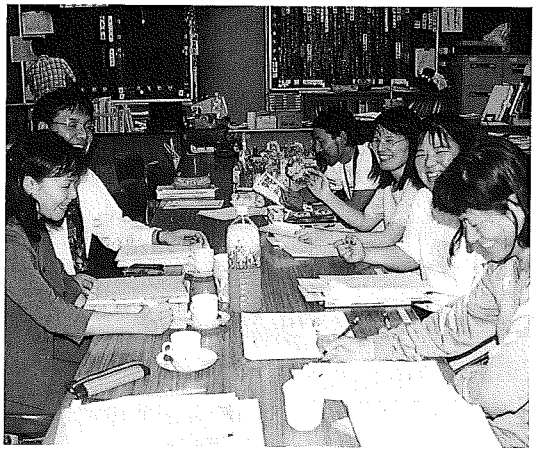
まとめの段階では、各自が調べ体験したことを中心にまとめ、次への継続につながるような学習への見通しを持たせていきたい。

3：実施機関

沖縄県立博物、那覇市立城東小学校6学年、全米日系人博物館との共催とする。

※　本教育プログラムよる博物館見学及び引率者については無料とする。

4：実施期間　　平成12年11月17日（金）　～　11月30日（木）



三機関による指導案検討会

発表の為の準備

資料１

５：単元の計画　　指導総計時数（15時間：総合９時間・社会科６時間）

過程	時数	学習活動	学習者の意識の流れ	備　　考
イメージ	(1)	オリエンテーション ＜総合的な学習の時間＞について ＜移民＞について学習しよう	・どんな学習をするのかな。 ・早くやってみたいな。	学年全体 （ 視聴覚室 ）
出会い	(4) 2	「課題探し」→　博物館の開催される特別展「移民展」で見つける ＜自分が調べて見たいことを見つけよう＞	・どれが自分にとって一番よい学習課題かみつける。 ・面白いネタはないのかな。 ・博物館ボランティアに質問しよう	(城東小,博物館) 博物館で見学 博物館利用のマナー 博物館ボランティア活用
	1	＜自分の課題＞を発表しよう ＜課題に添ったグルーピング＞ ＜グループ課題を見つめよう＞	・しっかりした自分の課題を持つようにする	各クラスで 学級内での編制無理は学年室へ集合
	1	＜学習方法を調べよう＞ ・調査の方法、対象や場所について ・アポの取り方について	・学習方法を理解し、実行できる手だてをきちんと考える。	学年プールでの実施 同一内容の課題別グループで行う
	課外	「課題追求をしよう」　追求① ＜調べる＞ ・博物館や図書館で ・インターネットの活用 ・身近な祖父母などから	・自分たちで出来るあらゆる方法を使って調べる。	・グループ別に調査活動を行う。 ・個人で行う (内容によっては)
発信	(4) 2	＜まとめる＞	・調べたことをわかりやすくまとめ、発表できるようにする。	・グループ別にまとめる
	(2) 1 1	＜見てもらう＝中間発表＞ ・各学級で発表する。 ・学年全体で発表する。	・自分たちの調査にも役立てられるようしっかり聞こう。	
追求	課外 (2) ① ①	「課題追求をしよう」　追求② ＜再追求すべき課題を整理する＞ ＜調べる＞ ・以前の調査計画を参考にしながら調査を進める。 ＜まとめる＞	・自分たちで出来るあらゆる方法を活用して調べる。 ・調べたことをわかりやすくまとめ、発表できるようにする	※課外活動として実施する.
発信	(①) (②)	「報告の準備をする」 「報告会をする」 ３学期　社会科		学年全体の場での発表会を行う。
まとめ	(①)	「学習のまとめをする」 ３学期　社会科		

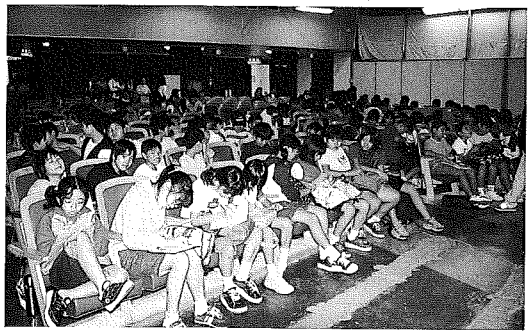
資料２
：実際の指導

平成12年11月19日（日曜日）10:30～12:30
城東小学校６学年　：校内及び博物館
指導者：各学級担任，前田・園原（博物館職員）
博物館ボランティア

１：**活動名**　自分の「学習課題を見つけよう」
２：**ねらい**　①　特別展「移民展」の見学を通して、学習課題を見つけさせる。
②　「学習課題解決」について、見通しを付けさせる。
３：**活動場所**　県立博物館
４：**本時の展開**（２～３／１５）

過程	学習者の活動	支援・評価
事前の活動	1　学年集会　テーマ「博物館へ行こう」 ・諸注意 ・博物館へ向けて移動	指導者：学年主任，各担任
イメージ	2　学習のめあてを確認する。 ①移民展の見学で「学習課題」を見つけよう 3　見学に際してのオリエンテーション ・学習の予定と内容 ・見学の際のマナーについて ・博物館ボランティアの活用について	指導者：前田（博物館職員）
追求	4　各自で「学習課題」を見つける為の見学 ☆　１階は全米日系人博物館の資料展示 ☆　２階は「沖縄の移民」関係の資料展示	指導者:各担任（上里 比嘉 平良 豊見山） 博物館職員 博物館ボランティア
まとめ	5　各自の「学習課題」について見通し付け、まとめる。 ☆　補則説明 ☆　次時予告	指導者：学年主任（上里） 園原（博物館担当職員） 新垣誠（日系人博物館コーディネーター） 指導者：学年主任（上里）

５：**評価（省略）**


講堂での学習

体験キットに挑戦

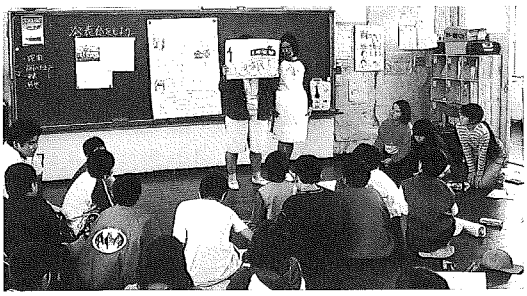
資料３
：実際の指導

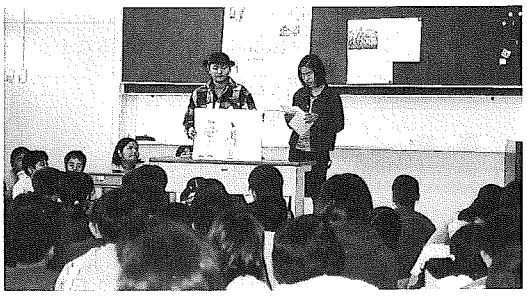
平成12年12月４日（月曜日）２～４校時
城東小学校６学年：２校時　６－１　３校時　６－３
４校時　６－２　５校時　６－４
指　導　者：各担任、仲底（博物館職員）
ゲストテチャー：森茂、中山

１：活動名　各クラスで、協力して調べた事を発表する。
２：ねらい　①　相手にわかるような発表にする
②　発表をよく聞き、自分たちの発表に役立てるようにする。
３：活動場所　各教室及び学年室
４：本時の展開（８／15）

過程	学習者の活動	支援・評価
イメージ	１　学習のめあてを確認する。 ①　グループ課題に応じた発表をする。	指導者：学年主任，各担任
発信	２　調べたことを効果的に発表する。 (1)　発表の方法 ・　壁新聞で、 ・　ビデオをつかって ・　ＯＨＰを使って (2)　分担に従って効果的な発表にしよう。 ３　発表に対する質問をしよう。 ・　はっきりした明確な質問内容にする。 ・　回答も具体的に答える。 ・　答えられないものについては、後日答えるようにする。 ４　学年全体で発表するグループを選ぼう。 ・　多数決で選ぶ	・役割を明確にして、発表にする。 ・はっきり聞き取れるような声の大きさで発表しよう。 ・他のグループの発表しっかり聞く ・互いに支え合って発表しよう。 （グループのメンバーの特技を生かす発表をする。）
まとめ	４　学習のまとめをする 次時予告　学年発表に向けての、準備を指示する。	

５：評価（省略）


学級発表会


学年発表会

資料４

６：授業記録

（１）６の１での記録　　司会進行は進行役の児童２名が行う。
教師は補足指導に当たる。

各グループの発表内容

① 移民をした人々と遊びについて（男５名）
② 当山久三と移民（女３名）
③ 戦争中の移民のくらし（女２名）
④ 世界に広がった移民（女２名）
⑤ 移民をした人々のその後（男３名）
⑥ 移民をした人々のくらし（女４名）
⑦ 移民について（女３名）
⑧ 移民と三線（男５名）
⑨ 移民と昔の道具
⑩ ハワイの学校

（２）６の２での記録　　司会進行は教師が行う。

各グループの発表内容

① 移民とその理由（男３名）
② ハワイ移民の仕事（男３名）
③ 沖縄からの移民　（女３名）
④ 移民の苦労と喜び（女４名）
⑤ 移民先の国　　（女２名）
⑥ 移民の仕事（女４名）
⑦ 移民の理由　　（女４名）
⑧ １世移民の苦労（男１名）
⑨ 移民をした遊びと道具（男４名）
⑩ ハワイ移民と宗教・文化

（３）６の３での記録　　司会進行は教師が行う。

各グループの発表内容

① ハワイへの移民（男５名）
② ハワイ移民の歴史（男１名）
③ 移民の数について（男１名）
④ 移民のくらし（男５女５名）
⑤ ある女性の移民史（女１名）
⑥ 戦争中の日系人のくらし（男１名）
⑦ 移民新聞　　（女２名）
⑧ 移民の理由・条件
⑨ 移民と昔の道具
⑩ ハワイの学校

（４）６の４での記録　　司会進行は教師が行う。

各グループの発表内容

① 移民をした人のくらし（女４名）
② ハワイ移民の暮し（女２名）
③ ハワイ移民について（女２名）
④ ブラジル移民について（女４名）
⑤ 移民と人々の考え（女２名）
⑥ 移民先の子どもの遊び　（男２名）
⑦ 戦争中の移民（　　名）
⑧ 日系人移民と暮し　　（男４名）
⑨ 移民と人々の暮し
⑩ キックボードについて

７：本時の総括

成　果

- 自分なりの課題を設定して調べることができた。
- 非常によく調べている。

課　題

- 発表の為の時間は少ない。
- 自分たちで独自に調べた内容が少なかった。（資料の引用が多かった。）
- せっかくの調べた成果が発表としてまとまっていない。（まとめる時間の確保）
- 発表の為の訓練不足（聞こえるような大きな声、正面を向いての発表）
- 自分の言葉でまとめ発表する必要性（引用資料の原文のまま）

8　成果と課題……総括会議の中から

（1）成　果

・　子どもたちが個々に自分の学習課題を設定して、調べることができるか心配であったが、子どもたちは自分なりの課題を設定して活動をすることができた。

・　修学旅行や達成度テストと非常に厳しい期間中にも関わらず、子どもたちは放課後等や休み中に博物館や図書館等校外へ出ての調べ活動によく頑張ってくれた。

・　「総合的学習の時間」での学習の仕方を子どもたちなりに理解し、活動することが出来、今後の「総合的学習の時間」活動に見通しを付けることができた。

・　自分たちでテーマを設定して学習することに楽しさを子どもたち自身で感じ取ることができた。

・　新聞、博物館・図書館やインターネットなどの様々な方法で自分たちが調べたいことをについて情報を集めることができるようになった。

ゲストティチャーからの学習

（2）課　題

・　子どもたちがゆとりをもって活動できる時間を設定すること。まとめる段階から発表までの期間を１週間ほどは確保すべきであった。

・　調べたことの発表＝発信の方法がこれまでの壁新聞による方法からまだ脱皮できていない。

・　調べたことわかりやすくまとめることと、発表することは根本的に異なる事が児童自身に理解させることができなかった。（発表には時間的な制約があるので１つまたは２つほどに的を絞って行うことなどの指導。）

・　発表の為の方法についての学習や指導をきちんすべきであった。（声量・資料の使い方、発表の手順など）

・　図書や展示パネルなどの出来合いの資料にたよりがちである。自分の身近な人から聞き取りする等の埋もれている生の資料を自分たちで掘り起こすことが、よりすばらしい調査であることを理解させる必要がある。

4　教育プログラムの成果と課題

今回実施した教育プログラムの成果と課題について、以下それぞれ個別にまとめる。

（1）展示解説ボランティア養成プログラムについて

当博物館での解説ボランティアは平成５年より導入され今年度で８年目になります。これまでにも、事前の打ち合わせや要請があったときには展示解説をおこなったきた。

成果として

① 今回は、全米日系人博物館及び同館のボランティアスタッフの協力を得て、特別展の趣旨、展示構成への学習会の実施したこと。

② ハンズ・オンを取り入れた体験型の展示解説の学習会の開催と、それを受けての実践ができたこと。

③ 展示評価科学研究所の協力を得ての「来館者の行動追跡調査」の方法を学び、実際に調査をすることができたこと。

④ 来館者行動調査の結果から、２階への導線上の問題から１階のみの展示であるとの間違った認識があることが発見することが出来、導線上の改善ができたこと。

課題として

① 博物館のスタッフの１員として、「来館者の行動追跡調査」の方法を活用しての実践的な活動ができなかったこと。

② 今回の展示解説へのボランティアスタッフの参加者に偏りがあったこと。

（2）展示オリエンテーションプログラム、（博物館スタディツァー）について

博物館スタディツァーとして11月５日（日）に開催をした。事前に沖縄本島内の全小中学校へ特別展のポスターと共に案内チラシの配布とマスコミ向けの事前の報道依頼をおこなった。

成果として

① 参加者は少なかったが、博物館が教師向けの「展示会の学習会」を実施してくれたことに参加者の教師からの良い評価を得たこと。

② 沖縄県小学校社会科教育研究会に協力団体として依頼をすることができたこと。

③ 博物館スタディツァーに参加した中学校教師が、今回の特別展を「総合的な学習の時間」」に位置づけて参加してくれたこと。

課題として

① 学校現場の忙しい時期の日曜日の開催でしたので、参加者する先生方がすくなかったこと。先生方への「博物館利用への研修会」の開催を各教育事務所や関係団体と協力して行う必要があること。

② 現場の先生との相互交流等によって、先生方の要望にあったプログラムの立案

（3）博物館見学を伴う教育プログラムについて

今回の教育プログラムには、那覇市立城東小学校の６学年、那覇市立久場川児童館、那覇市立大名児童館の協力を得て実施することができた。

成果として

① 那覇市立城東小学校の６学年とは、博物館の有するさまざまな機能を、小・中・高等学校における「総合的な学習の時間」の活用例としてのプログラムの開発ができたこと。

② 那覇市立久場川児童館とは、沖縄の自然・歴史・文化の殿堂としての博物館を活用した「沖縄県総合学習」の場としての活用が図られたこと。

③ 那覇市立大名児童館とは、特別展「日系移民１世紀」の見学のための学習プログラムの開発と実施ができたこと。

④ 博物館スタディツァーに参加した中学校教師が、今回の特別展を「総合的な学習の時間」」に位置づけて参加してくれたこと。

課題として

① 今回の教育プログラムへの参加協力については、特別展開催４ヶ月前からからの打診であったので協力をしてくれる関係機関との調整が難しかった。次回からは、次年度の行事を決定する段階から教育プログラム参加校についての事前調整する必要がある。

② 教育プログラムの実施について、担当者個人のみになってしまった。次回からは複数のスタッフを配置する必要がある。

5 おわりに

教育プログラム実施の背景には、博物館そのものが学校の教室の一部として捉えられる米国流の考え方があり、共催団体である全米日系人博物館の先進的な教育プログラムの実践経験と指導・協力のおかげである。

今日、博物館の活動は「見せる展示 → 見る展示、見る展示 → 触れる展示、館内展示 → 館外展示」へと大きく変化している。この変化を受け今回の関連催事の「基調講演・シンポジウム」も、博物館活動の未来を展望した内容の構成となった。

今回の試みが、今後、地域や多くの社会・教育団体との協力・連携して、博物館がより一層地域に親しまれ・利用されるための活動の契機になったと確信した。また、多くの関係者の皆さん方がこの特別展を観覧し、体験キッドなど米国流の展示活動に参画され、今回の教育プログラムに対してもご理解いただき、今後の博物館活動への課題や指針を下されたことに感謝します。また今回の企画に、多大なご協力をいただいた関係各機関に謝意を表します。

沖縄県立博物館紀要　第27号　131－139，2001

沖縄県内の博物館における来館者研究

柏木　祐・喜久川　智子
（沖縄県立博物館）

Audience Research in Museums in Okinawa

Yu Kashiwagi and Tomoko Kikugawa
(Okinawa Prefectural Museum)

Ⅰ、はじめに

沖縄県立博物館では、1997年８月から来館者を対象としたアンケート調査を実施している（註１）。それに先駆け1997年７月からは文化講座の受講者を対象にアンケート調査を行っている（註２）。一般来館者の声を聞くために始めたアンケート調査であったが、その要望は様々で、それらに応えるには現実的に無理なものも多く、またすぐに展示や活動に反映させられないという事情もあり、その結果を十分に生かせられないのが現状である。

そんな折り、当博物館で、特別展「日系移民１世紀展－From Bento to Mixed Plate」（会期：平成12年11月10日～12月10日）が開催された。この特別展の第１部では、全米日系人博物館の巡回展「From Bento to Mixed Plate」が開催され、全米日系人博物館の教育部主任学芸員である三木美裕氏を中心に「来館者調査」が行われた。当博物館で通常行なっている来館者に直接記入してもらう方式ではなく、インタビュー形式のアンケートを行っていた。

同じ「来館者調査」であっても、その方法は様々であり、また同じ方法でも、知りたいこと、必要としている情報が違えば、当然、質問事項は異なってくるはずである。当博物館のアンケートも、質問事項の再考が必要と思われる時期にきている。そこで、県内のいくつかの博物館、博物館相当施設にご協力頂き、それぞれの館の「来館者調査」についての調査を行った。それぞれの館の「来館者調査」と、沖縄県立博物館の「来館者調査」との比較をしてみたい。その上で、現在館内に設置してある来館者アンケート用紙を中心に、沖縄県立博物館における来館者調査の見直しについて検討することとする。

II、県内の博物館・博物館相当施設における来館者調査

1．来館者調査の実施状況とその方法

沖縄県内の他の博物館・博物館相当施設は、どのような方法で、来館者の声を聞いているのだろうか。また、どのようなことを知ろうとしているのであろうか。25館を対象に、来館者調査の実施状況を調査した。

結果は以下の通りである。「来館者調査」の方法は、沖縄県立博物館と同様に、「アンケート調査」が主で、実施している館は12館、実施していない館は14館であった。アンケート調査を実施していない館のうち３館は、調査の必要性を感じているとの回答があった。

アンケート調査を実施していると回答した12館のうち、６館が特別展・企画展の開催時のみにアンケート調査を行っているが、内４館が常設展でもアンケート調査を行う必要性があると感じている。

また、アンケート調査を実施する予定のない館では「アンケート調査はしていないが、ノートを置いて感想を書いてもらっている」「職員が来館者と対話することにより、直接要望などの情報を得ている」「こちらの意思を展示として見て欲しいのでアンケート調査は行っていない」等の回答があった。これらの意見、特に対話形式での調査を行っているという意見は比較的小規模の施設より出されており、利用者の生の声を得るという、より精度の高い方法で来館者調査を行っているともいえる。しかし職員数と来館者数との兼ね合いを考えると、どこの館でも対話形式での来館者調査を実施するのは困難である。来館者調査はそれぞれの館の形態に見合った方法で行われていると言えるであろう。

以上のことから、過半数の館でアンケート調査を実施、あるいは必要性を感じていることが伺われる。アンケート調査を実施していない館においても、来館者との対話やノートに感想を記入してもらうことにより、来館者の意識や要望を調査している。沖縄県内の各博物館においても、来館者調査を重要視する傾向にあるといえるであろう。

2．アンケート用紙の設問内容

次に、常時アンケート用紙を設置している館と、特別展・企画展の時のみにアンケートを行っている12館のなかで、アンケート用紙が入手可能であった７館10枚のアンケート用紙をもとに設問内容を検討する。

どの館も、来館者がどこから来て、どのような年齢層が多いのかということが一番知りたい情報となりうると思うが、やはり、すべての館で聞いている。これらの情報は、展示活動に直接関わってくる情報になってくる。

満足度や興味を持った展示など展示内容について細かく聞いている館は意外に少なく、展示、施設、サービスなどについて総合的に、感想を聞いている場合が多い。沖縄県立博

物館では、総合博物館ということもあり、どの分野が興味を引いたかということを聞いているが、他館では、展示分野が限られていることもあって、聞く必要がないのであろう。

リピーターがどれくらいいるのかを知るために、来館の回数を尋ねることになる。６館で聞いている。

何でその博物館について知ったかというのも、今後の広報活動につながるであろう。これも、６館で聞いている。

館によっては、接客サービスを重点に聞いているところもある

Ⅲ、他館のアンケート用紙と沖縄県立博物館との比較

他館のアンケート用紙については、前項で述べたとおりであるが、ここで沖縄県立博物館のアンケート用紙との比較を行ってみたい。

現在沖縄県立博物館で使用しているアンケート用紙は次頁のとおりである。

設問項目は　＊在住　＊性別　＊年代　＊来館の目的　＊利用回数　＊展示について（内容・興味を持った展示について）　＊見学以外の博物館利用経験　＊職員の対応について　＊感想　である。これらより、来館者の情報や、リピーター についてのデータを得ることが目的である。平成12年度（４月～12月）は、以下の通りの集計結果が得られた（表２）。

沖縄県立博物館においては、地元、県内の来館者よりも、県外の観光客を中心とした県外からの来館者が圧倒的に多い。従って、アンケートの回答も、「県外」在住の来館者が多数を占めている。それは、約７割が「初めて」の来館という結果になって表れている。

年代別に見てみると、実際の来館者は約60％が一般の方だが、アンケートの回答者は小学生、中学生、高校生、専門学校生・大学生といった学生が約63％を占める。これらの若い世代は、社会見学や修学旅行等、集団で来館することが多く、何人かで一緒に気軽に記入していることが多い事からの結果であろう。

展示内容について「満足した」「やや満足した」と回答したのは、約７１％となった。

興味を持った展示は、歴史、自然、民俗、美術工芸、考古の順となっており、特に歴史と自然は、全世代から平均的に支持が得られた。

職員の対応は、約半数の方に「良い」と答えて頂いたが、「ふつう」が多いのは気になるところである。しかし、アンケート開始時の結果よりは大幅に「良い」の割合が増えており、我々にとって嬉しい結果となった。

記入してもらう欄は、「展示について気付いた点」「興味を持った資料」「職員の対応」「博物館に対する感想・要望」と４つ設けた。要望を中心に整理すると、だいたい、以下

年　月　日（　）
入館したのは（午前・午後）

沖縄県立博物館来観者アンケート

今後の博物館活動の参考にしていきたいと思いますので、みなさんの“声”を聴かせて下さい。

※当てはまる事柄の番号に○をつけて下さい

在住	性別	年代	来館の目的
1. 県外 2. 県内 3. 国外	1. 男性 2. 女性	1. 小学生以下　2. 中学生　3. 高校生 4. 専・大学生　5. 20代　6. 30代 7. 40代　8. 50代　9. 60代以上	1. 見学　ア. 団体旅行　イ. 修学旅行 ウ. 個人　エ. 遠足・社会見学 2. 博物館行事への参加（　　）

Ⅰ. 沖縄県立博物館のご利用回数は？
1. 初めて　2. 1年に1 回　3. その他（　　）

Ⅱ. 展示について
ーア. 内容はどうでしたか？
1. 満足した　2. やや満足　3. 普通　4. つまらなかった

気付いた点があればご記入ください

ーイ. 興味を持たれた展示は何ですか？（複数回答でも可）
1. 考古　2. 歴史　3. 自然　4. 美術工芸　5. 民俗　6. その他（　　）

展示されている資料で特に興味を持たれたものがあれば、あげてください

Ⅲ. 見学以外に沖縄県立博物館を利用したことがありますか？（複数回答でも可）
1. 電話での問合わせ　2. 移動博物館　3. 文化講座　4. 博物館シアター
5. 子ども体験教室　6. 夏休み「歩く・見る・作る」教室　7. ボランティア養成講座
8. 博物館友の会　9. なし

Ⅳ. 職員の対応は？
1. 良い　2. 普通　3. 悪い

気付いた点があればお書きください

Ⅴ. 博物館に対するご感想・ご要望

●差し支えなければ、お名前、ご住所をご記入下さい。
お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ご住所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご協力ありがとうございました

表1 アンケート集計結果 期間:平成12(2000)年4月～12月

在住(%)

県外	県内	国外	無記入
51	32	1	16

性別(%)

男性	女性	無記入
35	50	15

年齢層(%)

小学生以下	中学生	高校生	専・大生	20代
27	15	13	8	6
30代	40代	50代	60代以上	無記入
8	7	4	3	9

Ⅰ. 利用回数(%)

初めて	年に1回	その他	無記入
73	9	15	3

Ⅱ. 展示について

ア. 内容はどうでしたか(%)

満足した	やや満足	普通	つまらない	無記入
47	24	19	7	3

イ. 興味を持った展示(複数回答%)

考古	歴史	自然	美術工芸	民俗	その他	無記入
9	27	26	13	20	2	3

Ⅲ. 見学以外に沖縄県立博物館を利用した事はありますか？(複数回答・この表のみ実数)

電話での問い合わせ	移動博物館	文化講座	シアター	体験教室	
4	5	6	13	10	
夏休み「歩く見る作る」	ボランティア養成講座	博物館友の会		なし	無記入
8	3	7		342	59

Ⅳ. 職員の対応(%)

良い	普通	悪い	無記入
48	42	5	5

のように分類できる。

①博物館の施設について

・老朽化が目立つので建て直して欲しい。

・空調が悪い

・トイレが古くて臭い

②展示について

・キャプションの文字を大きくして欲しい

・説明文の用語説明が欲しい

・読み仮名をつけて欲しい

・英文キャプションをつけて欲しい

・映像や音楽を使って欲しい

・触れる展示品を増やして欲しい

・展示品の数が少ない

・万国津梁の鐘は、ロビーに置いて欲しい

③職員の対応

・親切に笑顔で対応してくれた

・話しかけてくるのがうるさい

・寝ている人がいた

④その他

・入館料が安い

これらの意見に直ぐに対応するには、建物の老朽化等、施設に関しては困難なものも多くあるが、キャプションの文字を大きくする、読み仮名をつける等は、少しずつでも改善していけるものもある。それらについて、早速、着手していきたい。また、沖縄県立博物館友の会についての意見や要望もあり、来館者から、サービスの提供を期待されていることがわかる。

Ⅳ、今後の「アンケート」の検討

アンケートは、来館者に手軽に書いてもらうためにどうしても、選択肢の中から最も近い回答を選んでもらう方法になってしまう。それだと、なぜ、その答えになったかということが、分かりづらく、どう対応、または改善すべきかが分かりにくいこともありうる。

そのため、「感想・要望」を書く欄を設けてあるが、細かな意見が聞きたいと欲張りすぎて「展示について」、「職員対応について」「博物館にたいして」と記入してもらう欄が

多すぎたため、書いて欲しい欄とは違った欄に意見が書いてあったり、全てが無記入であったり、同じ事が全ての欄に記入されていたりと、こちらの意図がまるで違ったものになってしまった感もある。「意見」を記入してもらう箇所は、まとめて最後に一カ所で良いと判断した。

以上まとめた結果、次年度からはアンケート用紙の一新を図る（次頁参照）。
項目を減らしたり、新しい項目を追加したことにより、博物館活動についての感想や要望についてのより詳しいデータが得られることを期待する。体裁についても見やすく、親しみやすい印象を与えるため、フォントの変更や飾り枠の使用などの点を工夫した。また、アンケート用紙の設置場所についても増設することを検討する。

V、まとめ

前章でも触れたが、感想等の記入者に文章で回答してもらう設問の取り扱いについても検討が必要である。来館者の生の声として貴重なデータであるにも関わらず、種々の回答が出てくるため、データ化が困難である。また、来館者としても記入に手間がかかるため無記入のものも多くある。この点をクリアして見やすい・書きやすいアンケート用紙を目指していかなければならない。

沖縄県立博物館に限らず、どの博物館においても、何らかの「来館者調査」は、行われているわけで、その館の状況や、どんな情報を必要としているのかでその方法は異なってくる。今回、再考された当博物館のアンケート用紙も、時間がたてば必要ではない項目が出てくる可能性がある。また、他の調査方法が良いとされることも考えられる。

「来館者調査」を行い、その結果を博物館の展示や教育普及といった諸活動に反映させようとしたとき、どのような方法の調査が有効か、どのような情報を得たいのかを十分に考慮されるべきである。

また、これからはホームページ上でのアンケート調査も可能となってくるであろう。その場合、沖縄県立博物館に来館したことのない回答者も十分に想定されるわけで、館内に設置してあるアンケート用紙の設問とは別の内容にする必要があり、今後の検討課題であろう。ホームページは来館に直接繋がる広報手段という側面だけでなく、沖縄からの情報の発信という面からもホームページの充実を図らなければならない。

沖縄県立博物館来館者アンケート

★どちらからお越しになりましたか？

那覇市内　　県内（　　）市町村　　県外（　　）都道府県

★おいくつですか？

幼稚園　小学生　中学生　高校生　大学生
一般（10代　20代　30代　40代　50代　60代以上）

★ご来館の目的は？

遠足・修学旅行・観光旅行・その他(　　)

★この博物館をどこで知りましたか？

新聞・雑誌・テレビ・旅行ガイドブック・学校の紹介・当博物館ホームページ
インターネット・その他（　　）

★どの分野の展示に興味を持ちましたか？

歴史・考古・自然・美術工芸・民俗
＊特に興味を持った展示内容があればお書きください。
（　　）

★館に対するご意見・ご要望があればお書きください。

（　　）

御協力ありがとうございました。

註１）仲間留美・喜久川智子「より良い博物館活動をめざして～アンケート調査より～」『沖縄県立博物館研究紀要』第24号 沖縄県立博物館　1998

註２）宮平真由美・喜久川智子「博物館文化講座考」『沖縄県立博物館研究紀要』第25号 沖縄県立博物館　1999

参考文献

・三木美裕「博物館・美術館の来館者研究－アメリカの事例から－」『国立民族学博物館研究報告』24巻３号 国立民族学博物館　1998年

ご協力頂いた博物館・施設（順不同）

本部町立博物館
名護博物館
石川市立歴史民俗資料館
読谷村立美術館
諸見民芸館
宜野湾市立博物館
浦添市美術館
那覇市立壺屋焼物博物館
南風原町立南風原文化センター
旧海軍司令軍壕
沖縄県立平和祈念資料館
平良市総合博物館
今帰仁村立歴史文化センター
宜野座村立博物館
読谷村立歴史民俗資料館
沖縄市立郷土博物館
佐喜眞美術館
琉球大学資料館　風樹館
首里城公園
沖縄逓信博物館
沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄平和祈念堂
ひめゆり平和祈念資料館
石垣市立八重山博物館
（財）国営沖縄海洋博覧会記念公園管理財団

博物館紀要執筆規定

1　誌名：沖縄県立博物館紀要　BULLETIN　OF　OKINAWA　PREFECTURAL MUSEUM とする。

2　目的：本誌は広く自然、歴史、民族、考古、美術工芸、教育普及等に関する原著、短報、資料紹介、論文紹介等の研究成果を公開する事によって県民の博物館についての関心を高め、理解を深める。また、この紀要を通して国内、国外の博物館職員や研究者との交流を深める。

3　執筆者：博物館職員及び博物館職員との共著に限る。

4　別刷：原著については１論文につき30部の別刷を無料で進呈する。それ以上必要な場合の超過分は著者負担とする。

沖縄県立博物館紀要

第 27 号

2001年　3月30日　発行

編集・発行　沖縄県立博物館
〒903-0823 那覇市首里大中町1-1
TLE（098）884－2243
FAX（098）886－4353

印　　刷　㈱平山印刷withなんくるプロ

BULLETIN OF OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 27

2001

CONTENTS

Masayuki MAEDA: Bylaws making Public Facilities Available to Disabled Person and the Museum 1

Kosyo KAMIYA : Geography and Geology of Yagaji Island 15

Ichiko YONAMINE and Shin KOKI : <Material Note> The Ⅲ Textile item on Okinawa Prefectural Museum – "*Tateuki-Hana-ori*", Supplementary wrap weaving– 29

Kenji TAKEHARA: Notes on two breeding Birds, *Accipiter gularis* and *Pericrocotus divaricatus tegimae,* on urban area in the southern and central part of Okinawa I., The Ryukyus 45

S.ANEZAKI, K.TAKEHARA: Checklist of Birds recorded in South Borodino Island 51

Ken SONOHARA: In Relation to Articles as to Okinawan Cultural Properties on "Uruma Shinpo " Newspaper Published in Ishikawa after World War Ⅱ 77

Yoshiaki NAKASOKO: A note of Educational Programs Related with Special Exhibition "One Century of Japanese Emigration -From Bento to Mixed Plate" 113

Yu KASHIWAGI and Tomoko KIKUGAWA : Audience Research in Museums in Okinawa 131

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM